35-248
1200701640649
35
248

始

中等教科難問解說

教科難問 日本地理 地文解說

35-248

帝國圖書館藏

申等教科難問解說

難問

日本地理文解說

寺崎留吉編

東京 博文館藏版

大正
4. 11. 25
内交

例　言

一本書は博文館の需に應じ日本地理並に地文學に關する難問要項を摘集し之れに解説を加へたるものにして、程度は中等教育を標準とし、配列は可成現今の制度に據らしめたり。

一近來の教科書には外國地名を悉く假名にて綴るが慣習なれども、官報新聞紙、其他官公出版物に用ゐる漢字地名を除去するは餘り社會と隔離する弊あれば本書には可成、之れを引用したり、亞細亞、和蘭、喜望峰、巴奈馬など其例なりとす、又近來、外國地名の呼稱を統一せんと欲して選定せられたる呼稱あれども之れ亦、實用に適せざるを以て可成、世間一般通用の呼稱を採用したり、例へばナイルをニル、アルプ

スをアルプと呼ぶは學校以外に通用せざる迂遠の語なればなり。

一統計數値は可成、最新の調査に係るものを擧げ一には教科書の參考たらしめ一には定量的概念を養はしめんと欲せり。

一南北極、阿弗利加等の如く普通の教科書に比較的略説する部分は却つて詳密に解説を與へ、教科書の補足たらしめんと欲せり。

一地文學中にて地球星學は國民常識の上に須要の部門なれば特にこれに重きを置き比較的多數の頁を割きて之れを詳説したり。

一在學中の生徒は擔任教師の講義を決して忽にす可からず而して時々本書を繙きて參考に供しなば課外の趣味と智識を得ること蓋し少からずと信ず。

大正四年秋

寺崎留吉誌す

目次

第壹編　日本地理之部

日本帝國の位置……一頁
關東地方……八
奥羽地方……四七
中部地方……六八
北陸地方……一〇四
近畿地方……一一八
中國地方……一三七
四國地方……一四八
九州及琉球地方……一五六

北海道及樺太……一八〇
臺灣……一九八
朝鮮……二〇九

第貳編　地文學之部

地球星學……二一七
測地學……二三八
地球構造學……二五一
地面の變動……二五八
氣象學……二六六
海洋學……二三四
以上

教科難問 日本地理文解說

寺崎留吉編

第壹編　日本地理之部

◎日本帝國の位置

一　日本群島……我日本國の要部は大小數個の主なる島と之れに附屬せる小さき島嶼より成れるを以て日本群島と呼ぶ而して其位置が餘り不規則でなく東北より西南に列べるを以て日本列島とも稱す、以前は日本は悉く島ばかりなりしにより別けて群島とか列島とか呼ばざりしが朝鮮併合後は大陸の一部分も亦日本の領地となりたれば日本を二つに別ち大陸の部と群島の部と呼ぶことゝなれり。

二　北緯、東經……世界の上の何の邊に日本が在るかを言ひ表はすに「北緯」幾度と「東經」幾度と算へて謂ふなり「北緯」とは地球上赤道以北、何れ位の所にあるといふことにて赤道を零とし北極を九十度とし北緯四十五度は凡そ其中程に當り其他の度數は大抵この割合にて行くなり「東經」とは地球上にて何れ程東へといふことを表はす度なり之れには萬國地理學者相談の上、英國のグリーニッチ天文臺の在る所を通して正しく南北に劃く線を以て基と定め、其基となる可き線より何程東へ寄るかを表はすなり、地球上を東西に一周りしたる長さを三百六十度と定め太陽が一晝夜二十四時間を以て照し巡るなり、卽ち一時間に十五度照し巡る勘定となる故に東經百五十度の所はグリーニッチより正しく十時間太陽が早く照らし、夜の明け日の入り、正午何れも十時間早きなり、百三十度とか百二十度とかは其割合にて勘定するなり——詳しきは地文學の篇に讓る。

三　內地・植民地・殖民地……古くより日本の領地たりし部分を「內地」とし、近年に至りて新しく加はりし部分を「植民地」又は「殖民地」と呼ぶ臺灣樺太朝鮮は明治廿八年以後に加はりたる領地なるを以て植民地とす、北海道は餘程昔より一部分我領地たりしが全部

が確かに我國政府にて治むることになりしは明治以後なれば、これ亦植民地の如く考ふることあり。

四　樺太に於けるロシアとの境界……樺太は日本の領地かロシアの領地か久しき以前より兩國の間に議論が定らざりしを日露戰役の末、明治三十八年九月五日ポーツマス媾和談判の結果北緯五十度の線を以て境界となし兩國の委員は樺太に出張し天文測量を以て北緯五十度に當る地點を定め之れに四個の標石を建てたり、これ等の標石を連ぬる直線は卽ち五十度の緯度線にして其北はロシア領其南は日本領とす標石は花崗石にて作り南面には菊の御紋章、北面にはロシアの鷲の紋章を刻し、永久に腐らぬ樣、動かぬ樣に堅牢に建設せるなり。

五　日本の面積……現在に於ける日本帝國領土の面積總計は四萬三千四百五十八方里三八なり其內譯を擧ぐれば左の如し但し、琉球、澎湖島、壹岐、對馬、小笠原島等を除く。

本州	一萬四千五百七十一方里、二二	四國	一千百八十方里、六七
九州	二千六百十七方里、五四	北海道本土	五千〇八十三方里、八七

臺灣　二千三百二十四方里、一一　樺太　二千二百〇方里、九二
朝鮮　一萬四千百二十三方里、　千島　一千〇十一方里、四九

六　日本の人口……日本帝國現在の人口は凡そ六千八百萬に達せり、明治四十二年十二月末日に於ける調査の數を精確に擧ぐれば左の如し、而して一ヶ年に約七十萬を增加す。

內地　五千〇二十五萬四千四百七十一人　臺灣　三百〇六萬四千九百十七人
朝鮮　千二百九十三萬四千二百八十二人　樺太　二千百〇八人
合計　六千六百二十五萬五千七百七十八人

今世界に於ける人口の豐富なる國を比較のために擧ぐれば左の如し。

支那—凡そ四億　英領印度—凡そ三億　露西亞—凡そ一億千六百萬　北米合衆國—凡そ九千萬　獨逸—凡そ六千五百萬

七　日本帝國領土の增加……帝國領土の中、本州四國、九州の最も古くより同胞の住居する所となりて確實なる領土たりき、北海道は元と「アイヌ」人の巢窟たりしが數百年前より本邦人の渡りて移住する者漸く增し、德川幕政中には松前藩を置きたりしが、明治

維新後、開拓使を派遣して確實に統治することゝなれり、樺太千島の地も二百七十年前より本邦人の往來するものあり約百年前已でに間宮林藏、松田傳十郎などの探檢に據りて同地が亞細亞大陸より海峽を夾みて離れ居ること發見せり、恰も此頃より露西亞の東方侵略のため移住者の來るもの漸く多く一時は兩國の共有地の姿なりしを明治八年の條約にて樺太全島を露國の領有と定め千島の全部を我に收めて頗る不利益なる交換を行ひたり然るに明治卅八年日露戰役の結果樺太を北緯五十度にて折半し南半を永遠に我有に收むることとなせり、九州の南方なる琉球は嘗て獨立國の觀を呈し時に支那の屬國とも稱し態度極めて曖昧なりしを明治十二年確實に我領土に編入したり臺灣と澎湖島は元と淸國領なりしを明治廿八年日淸戰爭の結果淸國より割讓せられたり、小笠原島は約三百年前小笠原貞賴氏始めて發見し無人島なれば久しく其まゝにて打ち捨たりしを西洋人の漂流者など之れに住して恰も一小共和國たりしが明治八年我領と定め更に其南方なる硫黃島は明治卅一年、尙其南なる南鳥島は明治卅五年日米兩國協議の末、亦我有に收めたり、朝鮮は古來內地との關係少からず、殊に近世に到りては淸國へ朝貢して其屬邦の如く取扱はれ、剩さへ外交上少か

らぬ面倒なりしを明治三十八年の議定に據り我が保護政治の下に立ち四十三年八月我國に併合することゝなりたり、かく日本帝國は近來領土の擴張に力を用ゐ漸次其効を收めつゝ今日に到れり。

八　世界の一等國……世界の上には國と名の付く可きもの五十近くもあれども其内にて克く獨立を完ふし國家の基礎を固め世界の大勢を左右する權威があり且つ機會もあれば他の國をも侵略する丈けの力のある國を一等國とす、現今の所では先づ英吉利、獨逸、北米合衆國、佛蘭西、露西亞、墺太利匈牙利、伊太利と我日本帝國位のもので其他の諸國は强國の保障の下に獨立を得、又辛ふじて獨立せるものさへあり然れども一等國なる地位は時世と共に變遷し嘗ては一等國の名に背かざりし西班牙、葡萄牙、土耳古、支那なども今は地位を落し獨逸、日本の如きは近來新しく一等國の班に列せしものなり而して一等國たるの素地は國力の充實、産業の發達、兵備の完成、國民志氣の强固によりて造らるゝものにして我日本帝國の如きも、日清日露兩大役の試驗を經て、一等國の伍列に加はり諸外國も、今は明かに之を認むるに到れり。

九　東洋の覇權……東洋とは西洋に對し世界の東部といふ意味にして先づ亞細亞の東部を指すといふも大差なし支那、朝鮮、西比利亞、印度方面卽ちこれなり、此等の地方は主として亞細亞人一に蒙古人種とも黄色人種とも呼ばるゝ人民の住地にして其人口に於ては實に世界總人口（約十四億）の半ば以上を占むると雖、彼等の多數は西洋人の壓迫する所となり彼等の國土は白人の蹂躙する所となりて或は獨立を失ひ或は祖先より傳來せる山河富源を侵略せられて憐む可き狀態に陷れり其内に在つて五千餘萬の同胞を率ひて他國の侵略を擊退し開國以來未だ嘗て歴史に汚點を蒙らず唯に自國の獨立を完ふするのみならず進んでは隣邦の保全を計り魏然として亞細亞東部の大立物となつて居るは我日本帝國を除いては他に見ること能はず。

一〇　人口に於ても優勢……世界に於て最も人口の豐富なるは支那の四億、英領印度の三億を最高とし露西亞の一億二千萬、北米合衆國の九千二百萬、獨逸の六千五百萬を夾みて日本帝國之れに次ぐ、尤も印度は英領地にして一獨立國にはあらず又支那は國の基礎比較的に弱くしてこれ亦單に人口の夥多といふに過ぎず。

一一　地方別……日本帝國を地方に別けて本州、四國、九州、北海道、朝鮮、臺灣並に樺太となすは自然の地理に據るなり、而して本州の如き大なる土地は便宜上更に細かく分けるの必要あり地理學者は關東、奥羽、中部、近畿地方と中國となし時には北陸を一區劃となすこともあり、これ等の區別は地理學者任意の別け方にして人々多少意見を異にせり、國法上又は習慣上といふにあらず、昔は內地を畿內と八道に分ちたりき畿內は卽ち帝都の在る附近の地にして其他を東海道、東山道、北陸道、山陰、山陽道、南海道、西海道、北海道に區別したりき、今は唯、舊名を存するのみにして公には用ゐず更に細く分つときは各府縣に分つを得、京都が帝都たりし時は畿內を最初に呼びたりしが皇居を東京に移されしより東京府を最初に呼ぶこととなし關東地方を頭に置くなり又海軍區、陸軍師管區、氣象區といふ樣に種々なる區分法もあり。

◎關東地方

一二　關東地方……德川幕政の時代には箱根山を邦內第一の關所とし、其東部を關東地

方と稱せしが今尙ほ習慣となれり當時は關東八州又は單に關八州と稱し八ヶ國を指させしものなり。

一三　關東平野……一に東京平野とも稱へ東京市より南は直に海なれども西は十數里にして關東山系に劃られ北は二十餘里にして榛名、赤城の火山の裾野に連り東は千葉、銚子、筑波山の麓に及び東北は利根川の一大支流なる鬼怒川の上流を沿うて五十里計りも伸び遂に奥羽の阿武隈川の分水界に達す、我邦に於ては北海道の石狩平野及び濃尾平野と共に三大平野をなす。

一四　關東山系・關東山脈……武藏、甲斐、相模、上野、信濃に跨れる廣大なる山地にして東京平野より望めば一連の屏風の如く見ゆ、最も高き所と雖、七千尺を越えず然れども、起伏、凸凹限りなく溪谷深く其間を穿ちて交通は極めて不便に、村落も少し、東京より山梨縣甲府に到る甲州街道並に中央線鐵道は之れを東西に貫通すれども、道路は平坦ならず鐵道には大小無數の隧道あり就中、笹子、小佛最も長く笹子は本邦最長のものとす秩父地方も亦關東山系の一部分なり。

一五　阿武隈山系……磐城、常陸、陸前に跨がり廣大なる面積を占める山地にして著しき高山なけれども起伏凸凹極りなし遠く之れを望めば恰も波の如く見ゆ。

一六　三國山系……越後、上野、下野、信濃に跨がる山地にして高さ八千尺に達する高峰相列び地勢峻嶮なり關東より越後に打踰す二條の峠あり一を三國峠といひ一を清水峠といふ、共に六千尺の高所を越ゑ冬月積雪深し三國山系の名は三國峠より取れるなり。

一七　房總半島……安房、上總、下總の國をなせる半島にして東北より西南に曲りて東京灣を擁せり、

一八　利根川……利根川は一に坂東太郎とも稱し、三國山系より發する本流の外に渡良瀬川、鬼怒川、大谷（だいや）川、箒川等數多の支流を合せ房總半島の根に於て太平洋に注ぐ、本流の長さ八十二里内地に於ては第三位に在り若し之れに支流全體を合すれば總計一千百二十一里となり、流域總面積千二十二方里、舟筏の通ふ所、二百十七里に及ぶ、此等の點に於ては内地第一等に位し東京平野の田畑灌漑と交通との上に多大の便益を與へ實に東京平野の大動脈とも稱す可きものなり、大動脈とは身體内に於て血液を循環せしむる最大の管に

して全身の營養を司り之れを斷ては忽ち生命を失ふ、支那の楊子江は亦支那の大動脈なりと呼ばる、利根川本流は河口の銚子より十數里の上まで汽船を通ず。

一九　荒川……關東山系の一部分なる秩父の山中より發し東京平野を迂回したる後東京市を貫きて東京灣に注ぐ中流を戸田川、下流を隅田川といふ、櫻の名所なる墨堤はこの川岸をいふ、本流の長さ四十五里、支流を合せば二百七十七里、舟筏を通ずること百二十六里といふ。

二〇　多摩川……一に玉川とも書く、關東山系中の溪流集まりて成る、東京平野の四境を流れて東京灣に注ぐ下流を六鄕川といふ、東京市附近に於ける鮎漁の名所なり水勢急にして舟楫の利少し東京市に供給する淨水は此の川の中流なる羽村より引入る。

二一　相模川……富士山の東麓なる山中湖より發し關東山系の南部山間を穿ち幾度となく屈曲して相模の平野に出で遂に相模洋に注ぐ上流を桂川といひ下流を馬入川と呼ぶ、大部分急流にして舟楫の便少し、東京市に供給する水力電氣の發電所は、桂川の中流大月村に在り其れより少し下なる峽谷に奇橋の名ある猿橋（えんきやう）を架す。

二二　霞ヶ浦……東京平野東南部にある海岸性の大湖にして其面積一萬八千町歩、周圍三十四里本邦に於ける第二番に位す水産物の利、汽船小舟の交通に便を與ふ其下流は利根川に合す。

二三　北浦……霞ヶ浦と相連り恰も其一部分の如し周圍八里、面積九十九百町歩といふ。

二四　犬吠崎……千葉茨城兩縣の平夷なる海岸より太平洋中に突起せる岬にして利根川河口南岸に當り、堅固なる岩壁屹立せり、こゝに建立せる燈臺は光力六萬七千五百燭光を放ち太平洋沿岸航路を照せり又其附近に近年無線電信局の設ありて太平洋上に浮べる米國航路の汽船と通信を交換して多大の便宜を與へり、岬の附近は暗礁多けれども風光美しく、夏季は遊覽客多く集る。

二五　相模灣・相模洋……伊豆半島と三浦半島との間は海岸灣入して相模灣と稱し其海上を相模洋といふ沿岸の地一帶は湘南と呼ぶ、風光明媚、氣候溫和、冬月霜雪少し、さればこの避暑避寒海水浴、其他遊覽客常に絶えず、殊に夏季は最も賑かなり、逗子、葉山、鎌倉鵠沼（くげぬま）、茅ヶ崎、大磯、國府津、小田原、熱海等世に聞ゆ。

二六　關東地方の鐵道系……古來關東地方の往還は江戸を中心とせり、今日の鐵道系亦東京を中心として四通八達せり就中其幹線たる可きものを擧ぐれば左の如し。

- 東京市
  - 東→房總線（房總半島を通ず）—船橋—千葉—蘇我—大東—勝浦／木更津／佐倉—成東—銚子／成田—佐原
  - 東北→常磐線（東海岸に沿うて北走す）—千住—我孫子（あびこ）—土浦—水戸—平—仙臺→／太田
  - 北→奥州線（奥羽地方に向ふ）—赤羽—大宮—久喜—小山—宇都宮—白河—福島→／日光
  - 西北→中仙道線（本州を横斷し信越線と連絡す）熊谷—高崎—横川—（碓氷）→長野／秩父／前橋—足利桐生／下仁田
  - 西→中央線（山梨縣長野縣を經て名古屋に向ふ）—國分寺—立川—八王子—甲府—松本／川越／横濱／青梅
  - 東南→東海道線（東海岸に沿うて京都大阪に通ず）—横濱—大船—藤澤—國府津—靜岡→／鎌倉—横須賀

東京府

二七　武藏野……東京平野は今日でこそ大小の都邑散在し戸口も繁殖し頗る殷盛なれども其昔、江戸城開府の頃は一般に寂寞たる平野にして見渡す限り雜草生ひ繁れる荒地たりき、月は草原より出で草原に沒すると謂ふは實に當時の光景を描寫せり、これ卽ち「武藏野」なる名の起る所以なり、今日に到りても東北部の栃木縣に屬する地方は幾分か其面影を存せり。

二八　東京……明治維新前は江戸と稱へしこと何人も知る所なり、明治二年皇居をここに移し給ひてより元の京を西京と稱し、江戸を東京と呼ばしめ給ひたり明治二十二年市制町村制御發布と共に行政上東京市と稱し當分の內は京都大阪と共に特別市制の取扱を受け、東京府知事が市長を兼ねることとなり居りたり、其後特別市制廢止の結果全國一般の市と共に市長を市民代表者より選定することとなれり、又東京市は帝都たること、人口の多きこと、學藝、政治、外交、商業、交通其他諸般の事業の中心にして他の諸市とは自ら

其趣を異にせるを以て普通の市とは同一の制度の下に治む可きものにあらずとの理由にて特に東京のみを都と稱し制度を新にせんことを主唱せる論者少からず、近年都制案なるもの帝國議會に提出されたることあり其案に據れば市を東京都とし周圍の郡部を千代田縣となす可しといふ。

二九　江戸城……東京市の中央に位して大面積を占め今日皇居となれる所は元と江戸城又は千代田城と稱せしこと何人も知れる所なり德川氏幕政を執れる時代には全國の統治と共に兵馬の全權を握り軍事上の中心たりせば防備の必要より周圍に堅固なる石垣を積み內外の濠を以て繞らし城壁の入口には樓門を設けて見附けと稱し城壁の外には諸侯の邸宅を排置せり、當時市內にも諸所に關門を設けて通行人を誰何したり、今日皇居と成れる所は舊城廓內の一部分にして之れに接近せる地は外濠の內なれば今尙ほ丸ノ內と呼び近衞師團、各省官衙、大使公使館など建ち城內には昔の天守閣尙ほ殘れり內濠の城門は櫻田門、和田倉門、桔梗門、馬場先門、半藏門、田安門などと呼び、外濠の城門は赤坂見附、牛込見附、四谷見附などと稱せり、國內泰平の今日、最早や防備の必要もなければ唯皇居を圍

める所を除きて城門は凡て開放せられ剩さへ廓壁の一部分を崩して交通の便を計れる所さへあり、極端なる論者は濠を埋めて市街地となす可しと唱へり、江戸城の創立は德川氏幕府開始より遙か古きものにして江戸なる名は源平爭權の時代より既でに傳はり、今を距る四百五十年前足利氏に對抗するため上杉氏の臣、太田持資（道灌）が始めてこゝに築城してより其名漸く著はれ其後、上杉、北條と持主替り、豐臣氏天下を統一するに及んで德川家康に與へられ、家康の經營によりて關東軍政の中心となりたり後、慶長五年家康が彼の關ヶ原の戰役に大勝を占むると共に德川氏幕政の策源地となり、爾來三百年全國軍政の首都なりき。

三〇　東京の人口……

東京市の人口は調べ方によりて大に差あり普通の調査方卽ち區役所に屆け出たる人名を計算するときは二百萬を超えるが、明治四十一年十月に實施したる市勢調査の方法卽ち大勢の役人が手分けをして各戸に當りて一々人員を檢した計數に據れば百六十二萬餘たりき今日と雖とも百八十萬を超すこと恐く無かる可し、蓋し普通の調査方法にては市民が他に轉居せし場合なども其まゝに捨て置くことありて一人が二人に

も三人にも勘定され居ること少からず、故に市勢調査に據りて得たる百六十萬の方、必ず正確たる可し、何れの國にても大都會の人口は極めて曖昧たるを免れず今假りに東京市現在の人口を百八十萬と見做すも世界に於ける屈指の大都會たるを失はず試みに世界屈指の大都會を擧ぐれば左の如し。

英吉利ロンドン—七百五十萬　北米合衆國ニューヨーク—四百八十萬
佛蘭西パリー—二百八十萬　獨逸ベルリン—二百四十萬
北米合衆國シカゴ—二百二十萬　墺太利匈牙利、ウキンナ—二百五萬
露西亞ペトログラード—百九十萬

右の表を一覽すれば東京市の人口はペトログラードに劣らず實際二百二十萬もあれば優に世界第四位の大都會たるを得、近來、東京市の人口は區劃外に溢れて隣接町村の人口益々增加するを見る、將來若し東京市の區劃を擴張して周圍の町村を合併し大東京市を形成する曉には更に尨大なる人口となり獨逸のベルリンと伯仲するに到る可し。

三一　東京市内の區分……

地方行政上、東京市を十五區に分つ、麴町、神田、日本橋

京橋、芝、麻布、赤坂、四谷、牛込、小石川、本郷、下谷、淺草、本所、深川これなり又地形上、山手と下町とに分つを得、山手は高臺の地にして交通稍惡く、邸宅多く、下町は交通の便良く殊に水運の利多し故に商工業者の工場又は商店、事務所密集せり。

三二　國道の起點……全國の諸地方への距離を何里何丁何間と測算するの基となる點にして日本橋を以て其起點となす日本橋は市内の日本橋區に在り其昔慶長八年創めて架けて以來幾度か燒け明治五年九回目のを架換えてより修繕に修繕を加へて明治四十一年に到れり、從來は木橋にして比較的幅も狹かりしを最後には石造洋風となし明治四十五年落成を告げ都下第一等の石橋となれり。

三三　中央停車場……東京市より諸方に向つて發する鐵道は西南に新橋、東北に上野、西に新宿ありて三大幹線なる東海道、奥州線、中央線の起點驛となれり、其他短距離鐵道の起點驛も二三あり而して東海道線は近年市内へ延長して宮城前に中央停車場を設置せられたり中央停車場は將來三大幹線の結接點となり、其名に背かず本邦交通の中樞となる可きにより其構造壯麗を極む。

三四　政治・學藝・軍事・商業の中心……帝國政治の主腦たる諸官廳は殆んど皆な東京市内に在り、貴族院衆議院の議事堂、内閣、樞密院、宮内省及び各國務省（内務、外務、大藏、陸軍、海軍、司法、文部、農商務、遞信）、帝國大學、其他文部省直轄の專門諸學校、私立專門學校、帝室博物館、帝國圖書館、參謀本部、海軍々令部、鐵道院、諸外國の大使公使館、日本銀行、勸業銀行、興業銀行、其他公私團體の設立に係る政治學術技藝教育の研究調査會並に社黨の本部、大商店大會社の本店本社、概ね市内に備れり。

三五　東京の工業……東京市の内外には大小無數の工場あり、就中最も產額の多きは毛綿紡績にして市外東北部なる千住の製絨所、東南に「モスリン」工場、西南に品川の毛織工場あり、綿絲としては隅田川東岸に鐘ヶ淵紡績工場あり、製紙工場亦少からず市外西北なる王子の製紙場最も著名なり其他麥酒釀造、印刷、「セメント」、硝子、鐵器、電氣器械製造に何れも大なる工場あり又官營煙草工場あり大藏省專賣局の管理に屬す、同じく官設としては陸軍兵器火藥工場の頗る大なるものあり。

三六　伊豆諸島……伊豆半島より南方太平洋上に列べる諸島は交通の便宜上、東京府の

管轄に屬せしむ實際これ等の諸島に赴く船舶は多くは東京灣内より出帆するなり、主なる島を擧ぐれば大島、新島、利島、式根島、神津島、三宅島、三倉島、以上を伊豆七島と稱す其南に八丈島あり更に其れより遙か南方に小笠原島あり其中間に青ケ島、鳥島、ピオネス岩等あり て一直線に南北に並列せり、これ等の諸島は凡て火山岩より成り其線を北に延ばせば富士山及ぶ數座の火山あるを以て富士火山帶と稱す。

三七　三原山……大島には三原山といふ 有名なる活火山あり 大なる噴火口を開きて常に煙を吐き其底には時々熔岩を溢出す近年噴煙盛にして明治四十五年の秋には稀なる活動を呈したり。

三八　鳥島……八丈島の先に位せる鳥島は火山性の島にして 元來無人島なれば、海鳥夥しく集りて產卵す、近來出稼人渡りて其の羽毛を採集せり、去る明治三十五年七月俄然大破裂起りて噴出せし土砂は全島を掩ひ人畜悉く埋めらる其後再ぶ採集者來りて採羽に從事せり、海鳥は主として信天翁（あほうとり）と呼ぶものにして羽翼長大なり、採りたる毛は褥に用ゐるため歡迎せられ頗る高價なり。

三九　椿油……伊豆諸島殊に八島島三宅島の名產たる椿（つばき）油は島に自生せる山茶（つばき）の實を絞りて得たる油にして婦人の頭髮に用ゐる品質他の油より遙かに優れりといふ。

四〇　八丈絹……八丈島には一種の絹織物を產す 名けて「八丈」と稱す 主に黃褐色に染めたる絹糸を以て織る質强きを以て名あり。

四一　小笠原島……小笠原島は今を距る 三百年前小笠原貞賴氏の探檢によりて發見せられたりしか其後全く打捨て〻顧ざりし間に西洋人の移住者多く之れに住居し島の所屬不明なるを以て一小共和國の姿をなし居りたり然るに明治八年日本政府は官吏を派遣して帝國の所有なることを宣言したれば住民は異議なく之れに服し住民全部我邦に歸化し日本臣民となれり。

四二　海龜……海龜は俗に正覺坊と呼ぶ小笠原島名產の大龜にして 甲の長き四尺に餘る常に大洋に游泳して產卵の爲め島に來る、島民この時を期して捕獲す甲は著しき用なけれども肉は美味にして生にて又は鑵詰として食用に供す、近來濫漁したる結果、此島に來る數も減ずるに到れり、されば現今にては島廳に於て保護し濫りに捕ふるを許さず、南洋諸

島の土人は皆好で海龜を捕へ食ふ。

四三 バナ、……「バナ、」は芭蕉の一種にして甘蕉と書す實は數十個、房をなして著き房は漸次伸びて不絶、實を結ぶ熟すれば黄色となり果肉淡くして美味なり、元と西洋人の專ら食用とせしものにして布哇、マニラ等より稀に本邦に輸入せしことありしが今日にては臺灣、小笠原島などに栽培し東京其他大都會に輸送して盛に販賣せらる、「アナ、ス」(鳳梨)と混同する勿れ。

四四 鳳梨……洋名「パインアップル」と稱し從前は專ら「アナ、ス」と呼びたり熱帶に產する植物にして形、內地の萬年青(おもと)の如くにして葉の高さ二三尺に及ぶ、葉質薄くして硬し株の中央に大なる松毬の如き實を結び實の頂に更に小葉を簇生す、實は熟して赤くなり生のまゝ厚皮を剝ぎて食し又鑵詰となす小笠原島に近近來作り初めたり。

四五 南鳥島……南鳥島は小笠原島の東南に離れたる太平洋上の孤島にして明治三十一年確實に我領有となり東京府下に編入せり、島は平坦にして三角形をなし、全島珊瑚礁の碎屑にて成り疎らに草木を生じ、多少燐鑛を產す。

四六 硫黄島……硫黄島は小笠原島の南方海上に散布せる三小島より成り北中南と呼ぶ何れも火山岩にて成る、北硫黄島と中硫黄島とには住民渡りて農業に從事せり南硫黄島は鳥帽子形をなせる岩島にして密林にて掩はれ、船を寄せること難し近年其東方海中に新しき火山噴出し熔岩水面に現はれ小丘をなせり。

四七 太平洋海底電信線……太平洋には從來海底電信線の布設なかりしが我明治三十二年米國と西班牙と戰爭の結果、フキリピン群島は米國の領有となりたれば、同國に於ては太平洋を横斷する電信の必要を感じ太平洋の深底を測量し遂に明治三十六年サンフランシスコより布哇、ミドエイ島、グアーム島を經てフキリピンのマニラまで一條の海底電信線を沈設することとなれり同線は米國商業電線會社の管理にして米國と東洋諸國との通信に多大の便宜を與へたり後明治三十八年グアーム島より我小笠原島二見港まで同會社の支線を伸ばし。二見港にて中繼をなして伊豆諸島の側を通り東京灣內に入り東京まで連續することとなれり小笠原島以內は我遞信省の所轄にして同年九月一日開通式を行ひ我明治天皇陛下と米國大統領ルーズベルト閣下との間に祝電の交換ありたり從來日本より歐米に

達する電信は必ず亞細亞大陸を横斷して一は西比利亞を通じ一は印度を經るの道順なれば日露戰爭の際など甚だしく危險を感じたり、太平洋横斷線開通の曉は戰時と雖ども かゝる憂なるが可く且つ米國へ向けては頗る便利となりたり、因に謂ふ太平洋には別に一條の海底電線あり北米カナダと濠洲とを連絡し英國の管理に屬せり。

神奈川縣

四八　大山……大山(おほやま)は相模の國の中央にあり高さ三千五百尺、平野より屹立して三角形をなす一に阿夫利(あふり)山とも呼び山の中腹に阿夫利神社あり年々夏季には關東諸國よりの參拜客雲集す東京よりは特に大山街道なる順路あり。

四九　丹澤山……丹澤山(たんざはやま)は縣内第一の高峰どす 相模の國の西部に在る大なる山嶽なり最高點五千尺に達し東海道より手に取る如く見ゆれども登山者極めて少し。

五〇　秦野……秦野(はたの)は相模中央の小都會にして其附近烟草の耕作を以て著名なり。

五一　横濱……横濱は本邦第一の貿易港たること謂ふ迄でもなし、今を距る六十餘年

前、安政六年米國使節の要求に迫られて已むを得ず通商のため開きたる港なり、舊、東海道國道の神奈川驛より故らに離して此地を選定し水野越前守忠德が特に土工を起して主に外國人のため市街地を經營したるなり然るに當時寂寞たる漁村は時運に伴うて遂かに發展し今日にては神奈川まで連絡し之れを併せて市區を擴張し人口卅九萬五千本邦第四位の大都會となれり、海岸水深く天然の良港たる上に長大なる防波堤を築き、棧橋、船渠等を設け數千噸の大汽船も直ちに岸に繫ぐを得、歐米並に東洋南洋諸地方の航路の起點となり歐米との輸出入頗る盛なり輸出品の主なるものは生糸と羽二重なり。

五二　東京灣の咽喉……東京灣の入口は東に房總半島、西に三浦半島相迫りて恰も漏斗の口の如き姿をなす帝國の首都たる東京並に最大貿易港なる横濱へ海上より寄り付くは必ず、この漏斗の口を通過せざるを得ず、觀音崎と富津(ふつ)崎相向うて突出し正にこの入口を扼し恰も天然の關門をなし國防上肝要の地點なり、されば此の附近を要塞地帶と定め、天險の上に砲臺を築きて愈々防備を嚴にせり觀音崎の内側に横須賀の軍港あり鎮守府として本州東海岸の警備に住す。

五三　浦賀・久里濱……浦賀は横須賀の南方二里にある小港にして今日にては單に東京灣内汽船の寄泊する所なれども、歴史上著名の港にして我邦最も古き船渠あり、其南方なる久里濱は米國使節ペルリ氏が開港を迫るため初めて上陸したる地點なれば今は其處に紀念碑を建てり。

五四　臨海實驗所……相模洋は日本近海にて比較的深き所なり暖流之れに入りて魚族多く又珍奇なる動物に富む、されば三浦半島の南端を西は廻りたる油壺灣に東京帝國大學の臨海實驗所の設ありて海産動物の採集實驗に便にせり、實驗所は元と半島の南端なる三崎町にありしが地積狹隘なるため現在の地點に移したるなり毎年夏冬の休暇などには研究者多く集まる附近に三浦氏の城跡あり。

五五　鎌倉……鎌倉は相模國三浦半島の根基の西側にして相模洋の東北沿岸にあり別に纒まりたる都會とては無く唯丘陵起伏して周圍を繞らし内に狹き平地あり其昔源頼朝がこに幕府を開きて關東諸州を鎮壓管理したりし跡たるを以て歴史上著名なり當時の史乘に著はれたる鶴岡八幡宮、大塔宮の土崖、頼朝の舘趾、源氏諸將の墳墓などあり附近の地に稻

村ヶ崎、滑川、白旗山、扇谷、極樂寺、切通し、建長寺、圓覺寺等史跡多し、頼朝の舘趾には今は縣立師範學校設置せらる、此邊氣候溫和、風景明媚なれば觀光の客、年中絶ゆることなく殊に夏冬は避暑避寒のため都人士の來遊するもの夥しく、貴族富豪の別莊多く建ち且つ病院の設などあり呼吸器患者の轉地療養に適す。

五六　逗子・葉山……鎌倉より南相模洋に臨みて逗子(ずし)並に葉山の勝地あり逗子は鐵道を通し葉山は皇族の御用邸あるを以て殊に聞ゆ、この地、氣候溫和、遙に富嶽と伊豆半島を望み前は海波清砂を洗ひ眺望頗る佳なり。

五七　江ノ島……江ノ島は相模洋の沿岸に在る小島にして砂洲を以て陸地と連絡し干潮のとき歩して渡るを得、島の面積僅かに一方里に滿たず且つ丘陵性にして耕作にも適せず、されども外洋よりの怒濤岩根を咬み、遠近の連山富嶽などを望みて風光快豁加ふるに氣候溫和なれば遊覽の客、四時絶ゆること無し、鎌倉より二里、東海道藤澤驛より一里、相模海濱の一勝地として其名聞ゆ、貝殼細工を以て名物とす。

五八　茅ヶ崎・鵠沼……茅ヶ崎、鵠沼(くげぬま)は共に相模洋沿岸の勝地にして白砂、丘をなし青

松之れに繁り避暑避寒の客少からず。

五九　大磯……大磯は亦相模洋沿岸の勝景にして都人士の別莊、多く列び、遊覽客、年中絶えず殊に夏季は海水浴場として其名高し、國府津と共に湘南の名區なり。

六〇　小田原……小田原は舊東海道國道の要驛にして箱根山の東麓に近し、この驛より箱根を打ち越して駿河の三島驛に出づるまでを所謂箱根八里と呼びしなり、今の東海道鐵道はこの地を經由せず一里半を隔てたる國府津驛より北に折れて箱根の北麓を迂回せり、されども國府津より伊豆半島に通ずる街道に當れるを以て、旅客の往來繁く旅舍多く軒を列べ、且つ水産物の取引盛なり舊小田氏の城址あり。

六一　箱根……箱根山は神奈川靜岡兩縣に跨れる山嶽にして舊東海道の要關に當ると、溫泉の湧出するを以て古來著名なりき、元來消火山なれば裾野は四方に伸びて直徑六七里に及ぶ峰は環狀をなせる外輪山と中央火口丘（地文學火山の條下參照せよ）とに分れ外輪山には金時山、明神岳、明星岳等秀で中央火口丘には駒ヶ嶽、冠ヶ嶽、神山、上二子、下二子の諸峰拔で、殊に駒ヶ嶽は中軸をなして聳え、鐘を伏せたるが如し、高さに於ては神

山最も秀で頂は五千尺に垂んとす、山中の西隅に芦ノ湖を湛へ其水、火口丘の北を巡りて早川となり、外輪山の東南隅を破りて相模洋に落つ、流に沿つて湯本、塔ノ澤、宮ノ下、堂ヶ島、底倉、木賀の溫泉あり火口丘の中腹に芦ノ湯、小涌谷、仙石原、姥子等の溫泉あり就中、芦ノ湯は最も濃き硫黄泉とす、冠嶽の北斜に爆裂の跡あり熱氣强くして盛に硫汽を吐く、之れを大地獄と呼ぶ其傍に炭酸泉の涌出あり箱根水と稱する飲料は之れを汲み取るなり、芦ノ湖は海拔二千五百尺水清く湖岸綠樹蓊鬱、晴天には富嶽の倒影を映じ風景頗る佳し、東南隅に塔ヶ島の離宮地あり、箱根宿は湖の南畔にして舊東海道の要驛たり有名なる關所の趾は驛の東端、塔ヶ島に近き所にあり、箱根は東京を距る約二十二里交通極めて便なれば遊覽、探景の客四時絶えず夏季特に賑ふ山中に壯麗なる旅館あり、神代杉、寄木細工などを製して販賣す外人の遊客亦少からず。

埼玉縣

六二　秩父……秩父とは武藏の西北隅なる一帶の山地の總名なり大部分は埼玉縣に屬し

南面は東京府西多摩郡に入る地理上關東山系の一部分にして、最高頂は漸く六千尺内外に過ぎざれども峰巒欝結、山勢峻嶮、溪谷之れを穿ちて曲折極まりなく、交通極めて不便なり、溪水は集まりて荒川となり武藏野を貫流して東京市に下る、川の上流に秩父盆地と稱する小平野あり大宮町こゝに位し附近産物の集散地なれば商人の往來賑なり殊に養蠶盛なれば繭、絹織物の取引多し秩父銘仙は、この地に産す、盆地は東北に向て開き、東京方面より直路これに入ること難く、中仙道熊谷驛より鐵道を通ず、大宮より奥に三峰山あり、三峰神社を祀り夏日參拜者多し、三峰より奥は山越し數里にして信濃、甲斐に出るを得。

六三　大宮……埼玉縣平野の中央に位し、中仙道と奥州線兩鐵道の分岐點に當る、秩父大宮と同名なれど混同す可からず、氷川神社、大宮公園あり東京を距る約六里とす、鐵道用品製作の大工場あり。

六四　浦和……浦和は埼玉縣廳の所在地なれども川越、熊谷に比すれば人口遙かに少し。

六五　川越・所澤……川越町は埼玉縣平野の西寄りの町にして所謂川越藷(いも)を以て名高し、東京より交通便にして二條の鐵道あり、其附近に鑄鐵工場ありて鍋釜の類を産す中央線鐵

道の國分寺驛より川越に到る支線の中間に所澤驛あり元と農作物の小さき集散地なりしか近來飛行演習地を設けられ兒童すら其名を知るに至れり。

六六　熊谷……熊谷は中仙道の要驛にして養蠶業の一中心なり荒川其西を流れ堤上に櫻樹を植ゑて名所となれり。

千葉縣

六七　習志野……東京市と千葉との中間にある平野の一部分にして一望千里僅かに丘陵の起伏せるあるのみ、東京附近の一大練兵場にして兵營あり。

六八　印旛沼・手賀沼……千葉縣の中にて下總國に屬する所は土地低く殊に利根川流域には濕地多し印旛沼、牛久(うしく)沼、手賀沼等はこの低濕の地に在り地文學者の考説に據れば利根川の河跡湖なりといふ、河跡湖とは平野を貫流する河筋が水勢のため迂曲し、年と共に迂曲は益々甚しくなりたる後一朝洪水などのために水流變更するときは迂曲部は遂に本流より離れて獨立の湖沼となるものなり故にこれ等の湖沼は其形細長くして舊水路の一部分

たるを證せり、印旛沼牛久沼手賀沼は何れも魚貝を產し、沿岸には稻田開け、又、菰、菱、蓮根等の副產物あり又冬月は鴨雁などの候鳥多く集りて狩獵の好適地となる。

六九　牛久の葡萄……牛久沼の沿岸なる牛久村には葡萄園あり之に栽培せる葡萄を以て葡萄酒を釀造販賣すといふ、葡萄栽培は事實なるも其量決して多きにあらず果して釀造販賣の原料として足るや否や疑はし。

七〇　九十九里濱……千葉縣の太平洋沿岸にて下總國に屬する部分は東北犬吠崎より西南上總の大東岬に到る約二十里の間は海濱全く沙丘にて成り岬角の突起するもの一も無し之れを九十九里ヶ濱といふ鰮の漁夥しく、或は生のまゝ東京又は附近の市場に出だし或は直ちに釜に投じ煮て魚油を搾り滓は〆粕として貴重なる肥料となるなり。

七一　銚子……利根川の下流、方さに太平洋に注がんとする所、稍や膨張して所謂「銚子の口」をなす、河の南岸、遙かに突出し巖角露出して犬吠崎となる、盡端に壯大なる燈臺あり本邦屈指の燈臺にして外洋航路を照らす其傍に無線電信局の設あり太平洋航行の汽船との間に通信を交換し得て頗る便なり、岬の外側は風光雄壯なれば海水旅館軒を列べて

つ、銚子には復た捕鯨會社ありて捕鯨船出入す。

七二　香取・鹿島・息栖……利根川の沿岸に香取、鹿島の兩神宮あり香取は川の西岸に在りて千葉縣に屬し佐原より近し經津主の神を祀り鹿島は川の東岸に在りて武甕槌の神を祀る兩方とも軍神なれば軍艦に其名を採れり官幣大社にして神殿は伊勢大廟の式に造り森嚴謂はん方なし鹿島より流に沿うて下れば息栖神宮あり總稱にて三社と呼ぶ。

七三　佐倉・成田……佐倉は千葉町の東北に位して兵營あり其附近に佐倉宗吾を祀れる神祠あり更に其北なる成田には壯大なる不動堂ありて近縣よりの參拜者常に賑し共に東京より鐵道を通ず、成田の東北に佐原ありて利根川本流支流を往來する川船の發著所なれば水路交通の中心點をなせり。

七四　清澄山……房總半島は凡て丘陵地なるが、中にも上總の鹿野山、鋸山、安房の清澄山を以て屈指の高山とす清澄、鹿野兩山は共に一千尺を超ゆ、清澄山は太平洋沿岸に近く山は高からずと雖も深くして森林良く茂り杉の良材を出だす、山中に農科大學の演習林あり最高頂を妙見山と呼ぶ其麓に天津、小湊の兩港あり、小湊には誕生寺といへる名刹あ

り親鸞上人の誕生地なりとぞ。

七五 北條・館山……房總半島の南方東京灣の出口に面せる海岸は氣候溫和、波浪荒からず風光亦佳ければ夏は海水浴に冬は避寒のため滯留客賑し東京灣の汽船所々に發著す殊に北條、館山は其名最も著はる。

茨城縣

七六 筑波山……茨城縣内の名山は筑波の右に出るものなし筑波は磐城常陸の大部分を占むる阿武隈山系の南端に聳え、東京平野に面するを以て遠く之れを望めば孤立して恰も小き富士山の如し山頂は二峯に分れ男體、女體と呼ぶ女體山の方高くして二千七百尺に達す山の中腹に筑波町筑波神社ありて登山に便なり、男體山頂には有名なる氣象臺あり。

七七 日立鑛山……常磐線鐵道助川驛に近く日立(ひたち)鑛山あり久原氏の經營に係る、鑛石の産地は阿武隈山系中に在り、主として黄鐵銅鑛を出だし山麓に壯大なる精煉所電氣分解工場等を設けてて一ヶ年千萬斤以上の銅と若干の金銀とを産す現今にては足尾、別子、小坂

と肩を列べ本邦一流の新進の鑛山なり、其昔赤澤鑛山と呼びしが明治四十年頃より漸く頭角を現はし近年に到り長足の發展を遂げたり、其位置交通に宜しければ原料鑛石は邦内諸地方より購入して精煉を行へり。

七八 寒水石と竹葉石……茨城縣に有名なる石材二つあり一を水戸の寒水石と稱し水戸市の北なる眞弓村より截り出だす結晶質大理石にして純白雪の如く之れを刻み磨きて建築裝飾用材、置物、石碑などを作る、竹葉石は橄欖岩にして同じく水戸の北なる町屋村より截り出だす截面は鼠色に黑色の笹の葉の紋樣を呈す、時に紅葉班、牡丹班などあり何れも彫刻用材として水盤、浴室、廊下、卓子等に佳し。

七九 霞浦……千葉縣と茨城縣に跨る大湖にして湖面は分岐して掌を開くが如し、北方に彎入せるを北浦と稱す霞浦は總面積一萬八千九百町歩、周囲三十四里、面積に於ては我邦第三番に位す（近江の琵琶湖、羽後の八郎潟に次ぐ）、湖岸には平野連り水田開け所々に村邑あり湖上には汽船往來し交通に便を與ふ、下流は利根川に合す、浦の西北端なる土浦は沿岸の最大町にして汽船の發著頻繁なり魚貝蝦の産亦少からず。

八〇　水戸……水戸市は茨城縣の中心にして茨城縣を漠然と水戸と呼ぶことあり、幕政時代には德川家親戚を以て藩主となし親藩と稱す、其昔水戸義公、烈公など出でゝ德川家の勢力旺なる時代に專ら勤王論を唱へ大日本史を編纂して我帝國皇統の連綿、皇室の御威稜を世に敎へたりき大日本史の編纂局は今尙ほ修文館と稱し常盤公園內に存せり。

栃木縣

八一　日光山……日光山は一個の山嶽にあらずして數座の消火山の彙集せるものなり地文學者は之れを日光火山彙又は火山群と名づく、群山の間に溪澤あり湖沼あり瀑布ありて風景壯絕なり加之、山麓には日光廟の建てるありて名聲海外に聞ゆ、群山の中にて最も秀でたるを男體山、一に二荒山又は黑髮山とも呼ぶ、形狀整しくして恰も鐘を伏せたるが如く標高二千四百九十五米突とす卽ち約八千尺に及ぶ、男體山は實に日光山彙の中軸にして其北に大眞名子、小眞名子、女峰、赤薙及び太郎山ありて略東西に列び何れも七千五百尺を越ゆ、又其西北に白根山ありて前白根、奧白根に分れ奧白根は休眠火山にして明治年

代中にも中腹より破裂して噴灰せしことあり最高點は男體山と相伯仲す、山彙より落つる諸水は大谷川となり東南に流れて鬼怒川に入る、大谷川の源は男體山の南麓なる中禪寺湖にして其水面は海面より高きより千三百米突卽ち四千尺位にして湖尻は華嚴瀧となり斷崖を越えて直下すること五十丈といふ紀伊の那智瀧と共に本那最大の瀑布なり中禪寺湖の源は更に奧なる白根山の麓なる湯ノ湖より發す湯ノ湖の畔には硫黃泉湧出し中宮祠溫泉又は單に湯元と呼ぶ、湯ノ湖と中禪寺湖との中間には一里四方なる戰場ヶ原あり坦々として砥の如し、又湯の湖の落口は湯瀧となり次に龍頭ノ瀧となりて中瀧寺湖に注ぐ其他、男體女峰兩山の間に磐若、方等、裏見、慈觀、寂光、七瀧等の瀑布あり各、光景を異にし何れも特色を備ふ、日光の諸山は雨量多く凡て森林欝蒼として繁り、翠緣滴るが如し、剩さへ土地高くして盛夏と雖、冷氣肌に迫り、湯元の如きは殘雪初夏まで消え去らず、三伏の候と雖も朝夕は火鉢を用ゆ、殊に秋季紅葉頗る美しく滿山錦を綴る、交通の便亦宜しくして山麓なる日光町まで汽車を通じ尙ほ大谷川に沿うて二里計り電車を利するを得、されば夏季には靈廟參拜を兼ね避暑遊覽の客頗る賑はしく、舊曆七月上旬には數千の信徒、白衣を纏うて

群山を登拜す、中禪寺湖畔には外人向きの旅館並に別莊の設あり、湯元には溫泉宿軒を列べ時に浴客充滿することあり、世に聞ゆる日光廟並に日光町は山麓の東麓にして大谷川に沿へり、湯元の奥に西澤金山あり。

八二　日光廟……栃木縣は由來、日光によりて世に聞え、而して日光の聞ゆるは日光廟在るがためなり、奥州線鐵道宇都宮驛より支線に岐れて西北に走ること九里、終點は卽ち日光町なり、町は已でに海拔一千尺を超ゆ、町の盡端大谷川の奔湍に架するに朱塗の木橋を以てす之れを神橋と呼ぶ、川の北岸、老杉密立、枝椏天日を掩うて晝尙ほ暗き裡に金碧、燦爛たる堂宇出沒するもの卽ち是れ日光廟にして德川家祖宗の靈を祀る所とす、抑も日光の地が世に知られたるは遠く一千百五十年の昔にあり孝謙帝の御代、神護景雲年間、名僧勝道上人、初めて此地を探檢し、山中に神佛を祀り溫泉を發見したり、二荒山神社は上人の創建にして大己貴命を祀れり二荒山は卽ち日光の語源なり、爾後數百年世の變遷に連れて荒廢に傾きたりしが今を距る三百年前、德川二代將軍秀忠の世に家康の靈を駿河久能山より改葬するため、こゝに東照宮造營の事業始まり同三年四月改葬了れり靈廟、拜殿、唐門、

陽明門、五重塔、鐘樓、華表、燈籠など皆此の時代の建造に係り、大將軍の權威を以て諸侯並に外國をして獻納せしめたるものなり、彫刻精工を極め、色彩丹靑を擬らし、結構の壯麗なること內外人の均しく讃歎する所にして俚俗に「日光を見ざれば結構と言へず」と謂へり、本廟は中央に家康、左右に賴朝と秀吉を祀る又別に三代將軍家光の廟あり、二荒山神社並に輪王寺亦同じ境內に建てり、參拜の客四時絕えず、案內者を置きて一々說明せしむ、造營物中、陽明門、最も壯麗にして俗に日暮ノ門と呼ぶ。

八三　日光街道……日光への交通は今は鐵道の便あれども昔は奥州街道宇都宮驛より西へ折れて九里、東京より三十六里とせり、宇都宮、日光間の九里は往還の兩側に老杉堵列して並木をなす、幹の太きものは數人手を連れて抱へる位なり、枝椏密茂して遙かに之れを望めば一大屛風の觀あり樹下冷濕にして盛夏と雖ども旅客は炎暑に苦まず、傳へて曰ふ、日光造營の時、諸侯の內に某小藩あり獻納物の競爭に堪へず僅かに路傍に杉苗を植えたりしが、其杉苗今や三百年の壽を重れて天下無比の並木となり其名海外に聞ゆるに到れり、別に日光例幣使街道あり、奥州街道栗橋驛より分岐し鹿沼を經て今市に到り本街道に合ふ、

こゝにも杉並木の植えたるものあれども、齢稍々若くして本街道に及ばず。

八四　足尾銅山……栃木縣の名所は日光に次で足尾なり足尾は利根川の一支流なる渡良瀬川上流の岸にあり今は鐵道を通ず、本邦第一の銅山にして古河氏の所有に屬し、年々一千餘萬斤の銅を産す其昔慶長十五年木村某氏の發見に係り爾後二百年間、德川幕府の管轄なりしが明治維新の際、日光縣卽ち今の栃木縣所轄となり同四年民間に拂下げたりしが産額極めて減少し衰微の極に達せしを同十年古河氏の手に移りてより氣運急に進みて遂に現今の盛況に向ひたり、山より産する鑛石は主として黃銅鑛にして之れを粗煉して日光の附近なる清瀧といふ所に送り、こゝにて精製加工し、銅板、銅線、銅塊として市場に出せるなり鑛山のため發達せる村邑、人口三萬を超え山中に一都會をなす、されども精煉の工場より吐出する硫烟は山林を荒して山は全く赤裸となり、渡良瀬川亦有毒の水を流すと稱し下流の村民屢々鑛毒問題を唱へて騷ぎたりき。

八五　大麻と瓢……栃木縣の名産の中に大麻（あさ）と干瓢あり、大麻は到る處に畠に作り、刈て以て纖維を採る、鹿沼町には製麻會社の大工場ありて綱、織物等を製造せり、瓢は亦

各所の畠に植え其大なる實を剝ぎ乾して干瓢を製す、干瓢は本縣と兵庫縣播磨が名産なり瓢の實の老成したるものは丸のまゝ横に孔を明け内肉を去り厚皮のみを乾し固めて以て炭斗（すみとり）となす其形奇なれば風流人の愛す所となる。

八六　那須……那須は栃木縣の北部にして廣大なる平野をなし、之れを那須野ヶ原といふ古來寂莫無人の曠原たりしが近年、徐々に開墾に著手せり、されども地味瘠せて農作物豐かならず奥州線鐵道之れを貫通して西那須野、黑磯、太田原などの停車場あり、原の西方に那須火山あり其中腹に溫泉湧出するを以て有名なり火山の最高峰は茶臼岳並に朝日岳と稱し、茶臼岳には山頂に近き所に雄大なる硫汽洞あり盛に硫烟を噴出し、附近一帶硫黃の粉末を蒙りて岩石皆な黃色となれり、溫泉は那須、三斗小屋、松室、甲子など數ヶ所ありて就中那須溫泉最も賑かなり浴舍軒を列べ、黑磯驛より四里、馬車を通ず。

八七　鹽原……鹽原は亦著名なる溫泉地なり西那須野驛より西方那須原野を貫くこと五里にして箒川の上流に沿うて數ヶ所の溫泉湧出あり福渡（ふくわたり）古町、中鹽原、上鹽原等著名なり、溪流に沿うて風景佳しく紅葉最も妙なり流の南に雞頂山、高原山聳ゆ。

八八　鬼怒川……利根川の一大支流にして日光群山の北面なる溪谷より發す流の源には鬼怒(きぬ)沼山あり山頂に鬼怒沼あり溪に沿うて日光澤、川俣、藤原等の溫泉あれども交通不便なり、藤原の附近に水力電氣の發電所ありて、電力は遠く東京市に導き電燈、電車に使用す。

群馬縣

八九　榛名山と伊香保……群馬縣に著名なる三岳あり上野三山(かうづけさんざん)と呼ぶ、榛名は其一なり東京平野の北部に聳え消火山にして裾野は遠く曳き山上數峰に分れ中央に伊香保富士あり、小なれども整しき富士形を呈し其西麓に半月形の榛名湖あり、周圍の外輪山は嶮崖露出し其最も高きを相馬嶽とす五千尺を超え、山の西側中腹に榛名神社あり奇巖怪石の突兀たるを以て名あり、東側中腹に伊香保溫泉湧出し泉質、鐵を含みて赤く、泉量豐なれば古より著名なり浴館軒を接し夏秋の候殊に賑ふ、加ふるに近來交通の便開け東京より半日にて達する得。

九〇　赤城山……上野三山中の最も高きは赤城山にして同じく消火山なれば形狀、榛名に似たり兩岳とも東京平野の北境に列び、西なるは榛名にして東なるは卽ち赤城なり赤城は溫泉の湧出なきを以て登山客少けれども山上に大沼小沼の兩湖あり風景幽邃なり大沼を夾みて黑檜、地藏の兩峰あり黑檜最も秀で六千尺を超ゆ、大沼は冬月結氷厚くして氷塊を切り出だせり。

九一　妙義山……妙義山は上野三山中最も低きものなれども、中仙道往還並に信越線鐵道より近きを以て其名世に聞ゆ、山は白雲、金洞、金雞三峰に分れ白雲山最も高くして二千六百尺を超ゆ、奇巖の最も集まれるは金洞山一名中ヶ嶽とし、最も嶮岨なるは金雞山なり金洞山には第一より第五に到る石門大小五ッあり、鬚摺岩、鏡岩、大砲岩などあり何れも鐵鎖、鐵梯を設けて頂に登るを得、白雲山南麓に妙義神社妙義町あり松井田驛より一里半磯部溫泉より二里とす秋季には學生の見學旅客多く來る。

九二　碓氷峠……中仙道國道は東京平野を西北に貫き高崎を過ぎ利根川の支流なる碓氷川に沿うて漸く山地に入る、坂本村より道愈々昇りて、上り三里下り一里なる碓氷峠を

越えて長野縣の東隅に通ずるを得、峠道は峻嶺の中腹を横に沿うて羊腸數十曲、途中所々に茶亭などの設ありしなるが今や鐵道の開通してより貴賤の別なく皆、之れを利用し徒歩するもの更に無く、道路荒廢寂莫を極む、鐵道は横川驛より上りて輕井澤に到るまで七哩とす其間大小二十六合計一萬四千五百尺の隧道を穿ち、山を削り谷を埋め工事の困難なりしこと察するに餘あり、剩さへ傾斜急峻にして往々十五分の一に及ぶ、されば尋常の列車輛にては到底之れを登る能はずアプト式齒狀軌といふ軌道を布き齒車附きの電氣機關車を以て列車を牽引せしむ其速力亦甚だ弱し途中熊の平と呼ぶ所あり小驛を置き列車の行き違ひ旅客の洗面などに便にす、抑も碓氷嶺は信濃川と利根川の分水界にして古來有名なる天險なりしが今や文明の利器を應用し、座し乍ら風光を賞しつゝ昇降するを得、而して軌道は今尙ほ單線にして運搬力鈍く六七月の交、繭の取引の盛なる頃には貨物澁滯に苦むといふ、峠の頂上は長野縣に屬す。

九三　草津溫泉……群馬縣は全國中最も溫泉に富める縣にして、其多數は縣內西北隅なる利根川の支流なる吾妻川の流域に集まり草津、四萬（しま）、猿渡（さわたり）、河原、鹿澤（かざは）を吾妻五湯と稱

す就中草津は全國に冠たる溫泉場として聞え、溫泉番付には常に東大關として擧げらる、白根火山の東麓に位し海面上四千五百尺の高さに在り、硫黃質の强き熱湯旺んに湧出し日夜滾々として川をなす重き皮膚病を治するに特効あるを以て湯治客夥しく集まり旅館の宏大なるもの少からず巷の中央に硫黃泉の大溜地ありて湯畑と稱し湯華を沈澱す、無數の浴舍の內に熱（ねっ）ノ湯なるもの五ヶ所あり湯溫百二十度を越え、直ちに之れに入るときは皮膚は糜爛す可し、されば入湯客は時刻を期して集まり充分熱湯を攪拌したる後、監理者は號令を下して一齊に入浴せしめ僅に三分にして出さしむ、草湯は古來其名國內に聞え交通の不便に拘らず遠近の浴客來集せり、今や前橋より十八里馬車連絡し東京より一日にして達するを得、溫泉の發見は遠く往古にて元正天皇の養老五年、行基僧正の發見に係るといふ。

九四　白根山……群馬、長野兩縣の境上に聳え、日光の白根と區別するため特に草津白根の名あり、火山性にして頂に火口趾あり三つに分れ溫湯を湛へ、湯釜、水釜、涸釜と呼ぶ有史以來時々破裂して火山灰を降らすを以て草木枯れ、滿山白灰にて掩はる、湯華を採り硫黃を製造す。

九五 磯部溫泉……磯部は有名なる溫泉なれども泉質は硫黃を含まず鹽類を有して鹹味あり溫度も低し、されば人工を以て沸かして入浴す、此點は他の硫黃質溫泉と全く異なれり、含有物は炭酸曹達、食鹽等にして泉水を以て食鹽を製するを得、所謂、磯部煎餅はこの泉の鹽分を加へて製したるものにして鹽味あり、元來獨逸のカルヽス溫泉を用ゐて製したる一種の菓子をカルヽス菓子と呼ぶ、磯部煎餅はカルヽス煎餅の類似品と知る可し。

九六 桐生絹織物……群馬縣は全國中屈指の養蠶地にして繭の產額、生糸の產額も可なり夥しきが、特に注意す可きは絹織物なり絹織物は內地向きの銘仙、糸織、絽、御召縮の外に紋羽二重あり、紋羽二重は內地人の衣服、羽織に用ゐるの外に盛に海外に輸出せらる、本縣の桐生、並に栃木縣の足利は其中心なりとす桐生には染織學校の設あり。

九七 坐繰組合……生糸を繭より繰り採るには從前は殆んど農家の副業にして一二臺づゝ簡單なる機械を据ゑて生糸を採りたり之れを坐繰（ざぐり）といふ、其後輸出の盛なるに及びて工場を建て蒸汽の動力などを用ゐて西洋風の製糸機械を運轉するに到りたり、されども群

馬縣の西北にては今尙ほ坐繰を奬勵し、切りに輸出向の生糸を產せり、而して輸出向きには必ず糸質と束ね方を統一せざるを得ずこれがため組合を設けて巡回敎師を賴み繰り方を一定し、且つ中央に枠上場（わくあげ）を置き、こゝに持寄りて一定の枠に卷き、束ね方を一樣にし一定の商標を貼付して輸出港に送ることとなせり、この制度を坐繰組合と稱す碓氷川の流域に碓氷社、甘樂川の流域に甘樂社、下仁田社等の組合ありて好成績を擧げ居れり。

◎奥羽地方

九八 奥羽地方の地形……奥羽地方は殆んど南北に並列せる三條の山脈より成る卽ち中央に火山帶あり東側に北上、阿武隈、兩山系あり、西側には火山並に丘陵より成る地帶あり中央火山帶と北山、阿武隈、兩山系との間には南北に走れる一大縱谷ありて阿武隈川、北上川、馬淵川之れを流れ、中央火山帶の西側には特立せる火山の麓を繞りて迂回せる谷あり最上川、雄物川、能代川（米代川）、青木川之れを流る。

九九 奥羽の盆地……奥羽地方の中央火山帶より西側は地形錯雜せるを以て山間に小

き平野を圍む所あり(盆地)卽ち南方に會津盆地、最上川の中流に米澤山形盆地、北方に弘前盆地あり、猪名代湖畔亦一の盆地となす。

一〇〇　北上山系……岩手縣の地は一帶の山地にして地形極めて錯雜し、交通亦極めて不便なり其太平洋沿岸は海岸線鋸齒の如く出入し、山脚は直ちに海水に沈みて平地なく船舶を入るに便なる所多けれども陸上に村邑の開け得可き地なし故に小港は無數あれども前盆地あり、大都會の發達なし。

一〇一　阿武隈山系……磐城一帶の地は丘陵起伏して地形、錯雜すれども、高山といふ可きもの無し其太平洋方面は傾斜緩漫にして海岸に沿うて帶狀の低地あり交通の便を與ふ古來、陸前濱街道と稱し、江戸より仙臺に到るの要路たりき今は常磐線鐵道之れに布設せらる而して其海岸は遠淺にして港灣、碇泊所少し。

一〇二　奥羽の鐵道系……奥羽地方を縱貫せる最大幹線は所謂奥州線にして、東京より青森に達する線なり、之れに次ぐものは奥羽線と稱し、奥州線福島驛より分れ中央火山帶を踰え、日本海沿岸に近き山地の間を屈曲して青森に通ずるなり第三に常磐線あり東京

より太平洋沿岸に近く北走して仙臺に到り奥州線に會するなり、別に二條の横斷線ありて工事半ば成れり、一を岩越線とし奥州線郡山より西へ分れて新潟縣新津(にいつ)に達し、東へ分れて磐城の平に通ずるなり、二は酒田線とし奥州線小牛田(こごた)驛より東は石卷港に達し西は中央火山帶を踰えて山形縣新庄に出で最上川に沿うて下り日本海沿岸の酒田港まで伸ぶる計劃なり、其他、秋田縣小坂鑛山へは奥羽線大舘驛より短距離の輕便鐵道を通ぜり。

一〇三　奥羽の產業……奥羽地方は人口稀薄にして都邑も少し、未だ開墾の屆かざる荒地多し而して氣候も稍涼しければ森林良く發達し林業を第一とす又、中央火山帶に沿うて金屬鑛物の產出多ければ鑛業發達し銅、銀、鐵に次ぎて石油、士瀝青、硫黃等あり、農業としては米よりは麥、豆、馬鈴薯等に適し、南方は桑に良しく從て養蠶盛ゆ、北部は地味林檎に適し近來其產額益々增加せり。

一〇四　奥羽地方の區劃……奥羽地方は封建時代には六藩に分れ今は六縣となせり福島縣が磐城岩代を管轄するの外は一縣一國卽ち宮城縣は陸前、岩手縣は陸中、青森縣は陸奥、山形縣は羽前、秋田縣は羽後を管轄すれども、其境界何れも出入せり、磐城國の北

部は宮城縣に入り陸前の北部は岩手縣に入り羽後の南部は山形縣に入り陸中の西北部は秋田縣に入り東北部は青森縣に入る。

福　島　縣

一〇五　吾妻山……吾妻山は福島縣岩代國と山形縣に跨れる火山群にして東吾妻、中吾妻、西吾妻の三部に分れ東吾妻は一切經、家形山、吾妻富士等の消火山より成る、吾妻富士は形、整然たること富士の如く頂に立派なる火口の跡あり、一切經山の南中腹に新火口ありて盛に硫烟を噴出す、明治二十五年強き活動を呈し一時、盛に灰石を降らしたり理學士三浦宗二郎並に西山技手、調査のため派遣せられ、落下する岩塊に打たれて悲慘なる最後を遂げたりき、今は硫烟を利用して硫黄を採集せり、山中に鎌沼、桶沼、五色沼等の池沼あり概ね火口の跡なるが如し中吾妻、西吾妻は共に密林を以て掩はる、火山群の麓には幾多の溫泉湧出し、高湯、溫湯（ねるゆ）、五色湯、玉子湯などあり。

一〇六　磐梯山……明治二十一年七月の大爆裂を以て有名なる磐梯山は岩代國の中央

に位し猪苗代湖の北岸に聳ゆ其猪苗代湖も亦大同年間に起りたる磐梯山活動の産物なり山頂には深き舊噴火口の趾ありて水を湛へ沼ノ平と名づく火口趾の周圍に大磐梯、小磐梯等の峰あり大磐梯最も高くして五千五百尺に及ぶ明治二十一年に爆裂せしは小磐梯にして爆裂の跡は今尚ほ大なる痕となりて存し、所々より蒸汽を吐く、抛げ出されたる土石は北麓に堆積して古への溪谷を塞ぎ、ために三個の新しき沼を生じたり檜原湖、秋元湖並に小野川湖といふ、山の中腹並に麓に磐梯、押立、川上等の溫泉あり。

一〇七　沼尻山……磐梯山の東に沼尻山あり亦消火山にして明治三十一年七月突然、爆裂して多數の硫黄採集業者を生埋めにしたることあり爆裂の跡は沼ノ平と稱へ圓き沼をなすこと磐梯山の如し山頂より東側は草木繁茂して何等、火山活動の形迹を呈せず其最高頂を安達太郎山といふ、沼尻山には強き硫黄溫泉あり多量に湧出して瀧をなす又盛大なる硫黄製造所の設立あり。

一〇八　猪苗代湖……猪苗代湖は岩代國の中央にある湖にして周圍十三里、面積一萬九百町歩、本邦屈指の大湖なり其昔日橋川（につはし）の溪谷が大同年間の大破裂のため塞がれて、こ

の湖を生ぜしと傳ふ。湖は水深くして風景に富む、湖の北に富士形の磐梯山聳え、西畔の翁島には皇族の別業などあり近頃湖より落つる水を利用して電氣を起せり。

一〇九　飯豐山……飯豐山(いひでやま)は本縣と山形、新潟三縣に跨り、高さは六千尺なれども山勢嵯峨として頗る峻嶮を極む、山頂は一王子より五王子の五峰に分れ、別に劔ヶ峰、西ヶ嶽、大日ヶ嶽など連なり、冬月の積雪は三伏の候に到るも尙ほ消えず風景の雄壯なること內地罕れに見る所とす、山中數ヶ所に小祠を安置し登山の信徒少からず、山形縣よりも登るを得れとも福島縣喜多方(きたかた)よりするを最も便とす山麓一ノ戸村に信徒の宿舍、軒を列れ又山頂にも小屋ありて雨露を凌ぐに足る、この山は會津の靈山として崇敬せられ山頂の事情は山下に於て語らざるを習ひとす。

一一〇　磐城平と炭田……本縣磐城の東方、太平洋沿岸に近き所に平(たひら)の町あり其南に溫泉湧出し湯元と稱す又其附近一帶地下に石炭埋藏して豐富なる炭田をなし小野田、入山等の炭坑ありて盛に採掘せり。

一一一　匂來關……磐城の東海岸南に寄りて匂來(なこそ)ノ關の跡あり、街道は丘陵の上を過ぎ

昔此の地に關所の設ありしといふ今は碑を建てゝ紀念となし將軍源義家の歌を刻む、歌に曰く「吹く風を匂來(なこそ)の關とは思へども道にせに散る山櫻かな」、關所は當時、東北の蠻族を防ぐために築きしものなり。

一一二　相馬と相馬燒……磐城の東海岸の北寄りを相馬地方と呼び中村町を以て其中心となす馬を育つるに巧なるを以て古來有名なり又、其附近より一種の陶器を產し相馬燒と呼ぶ鼠色の土に砂を交え、體裁粗野なれども自ら風致あり茶器、水瓶などを製し必ず馬の紋樣を畫くを例とす。

一一三　會津……福島縣西寄りの部分に會津盆地あり、四方山岳を以て繞らし別天地をなす封建時代には會津藩ありて其名著はれ、若松は其中心なり明治維新の際、舊藩の子弟、意氣壯烈官軍に抗し形勢不利なるを見るや十八名枕を列べて自盡せり世に之れを白虎隊と呼ぶ今は飯盛山と稱する丘陵の麓に石碑を建てり、會津盆地の南方山中に東山溫泉あり夏日大に賑ひ管絃の聲絕えず、會津には復た會津燒と稱する陶器を產す高雅なる品は無けども家庭向きの茶器土瓶等多く供給せらる。

一一四　川俣の羽二重……羽二重は元と北陸、福井石川の獨占の如く思はれしが近年、川俣に新らしき産地興り專ら大巾の輸出向を織り出し其産額決して少からず。

一一五　信夫文字摺……福島市の東に信夫文字摺（しのぶもぢずり）の碑あり、河原左大臣の歌を刻す曰く「陸奥の信夫文字摺、誰故に亂れんと思ふ我ならくに」、現今にては「ハンケチーフ」などに忍（しのぶ）草の葉形を刷り出し右の歌の石摺を添へて鬻げり。

宮　城　縣

一一六　仙臺……仙臺附近は封建時代には伊達領と稱し陸奥地方の有力なる大藩なりき、伊達政宗は卽ちこゝの人なり其城市なる仙臺は今日と雖ども東京以北の最大都會にして人口十萬に及び、第二師團の司令部、東北帝國大學、高等工業學校其他種々の官衙あり萩の名所として知られたる宮城野は東方にあり。

一一七　埋木細工……仙臺名物の一として世に聞ゆるは埋木（うもれぎ）細工なり埋木は黑褐色の古木材にして地中に埋れあるを掘り出して彫刻を施すなり質重くして堅く紫檀の如し多く

茶托を製す近時藥品を用ゐて擬物を作り廣く販賣せり埋木は古代の樹幹が倒れて久しく土砂中に埋沒し木質を變化したるものにして稍や石炭に近けるものなり仙臺市の郊外に俗に木炭（はくたん）と稱して半ば炭化せる木質を產し掘て焚き物となす煤烟多し、これ亦埋木と同一樣の品なりといふ何れも泥炭に屬す。

一一八　松島灣・松島……東京灣以上に於ける大灣にして其沖合に松島群島散布せるを以て松島灣と名づく群島の數は俗に八百八島と唱へ大小無數なり島は凡て層狀をなせる軟き岩石より成り瀨戸內海に於ける花崗岩の島嶼とは自ら趣を異にす、多分古へは連綿たる臺地なりしが地變力、海水の削磨力等に因りて分裂せしものなるべし、各島の形狀千差萬態一々名狀す可からず、大なるものは松樹繁り小なるものは僅かに兜形の孤岩なるあり時に或は懸橋の姿をなして將に切斷されんとせるあり或は赤裸たる岩角に老松孤立して漸く餘命を繫げるなどあり、岸に近く五大島あり其前に瑞巖寺を建つ、松島は古來日本三景の一と稱へられ月夜雪景殊に絕佳なりとす、丘に登りて望めば全島を双眸の裡に收め、松島町より孤舟に棹して群島の間を縫つて鹽釜に渡るも亦佳なり近時宮城縣の經營にて公園

組織となし弘く觀光客の吸收に力めつゝあり。

一一九　金華山……牡鹿半島の南端岬角の前に横はれる一小島にして石巻港より山鳥ノ渡を渡れば則ち島に登るを得、島は花崗岩の山にして、黄金神社あり社は奥羽地方、屈指の建築なりしが往年祝融の災に罹りしは惜む可し、神苑に鹿を養ひて風致を添ふ、昔此の島より黄金を産せしを以て「黄金花咲く」の古歌世に傳はれども實際黄金を産せしや否や頗る疑はし、宮城縣に於て古より砂金を産するは涌谷といふ所にして今尚ほ採取しつゝあり。金華山の海上は暖流、寒流出會ふ所にして種々魚族に富み漁利多し就中、鮪、鯨、海獸に有名なり、兩海流の出會ふため、水蒸氣凝縮して霧濃く、燈臺の光すら往々遠く達せざる時あり霧笛と稱する笛を備へて、航船を警戒す。

一二〇　多賀城趾……仙臺市と松島との間に多賀城の碑あり千餘年の昔、源義家が陸奥の豪族を防禦するために築きたる城壘の跡なり今は僅かに古き瓦片の土中に埋まれを發見するに過ぎず好奇家之を拾ふて硯を刻む。

一二一　藏王山……宮城縣の西南に近く福島縣と山形縣に跨りて聳ゆる消火山にして

刈田嶽とも呼ぶ山上數峰に分れ熊野嶽最も秀で海拔六千尺に及ぶ山中に五色沼あり、舊噴火口の跡なり、山麓に數ヶ所の溫泉あり青根、遠刈田の兩溫泉共に著名にして殊に青根は奥州第一等の稱あり奥州線鐵道大河原驛より八里とす又西麓山形縣に屬する方面に赤湯溫泉あり、近頃五色沼の水を排流して沈澱せる硫黄質の泥を採り硫黄を精煉する計劃ありといふ。

一二二　鬼首溫泉……宮城縣の西北部、栗駒嶽(一に酢川嶽)の麓なる玉造郡鬼首村に吹上ノ湯といふあり間歇性にして時刻を定め盛に蒸汽を噴出す、其狀況、伊豆の熱湯の大湯の如し、交通不便なれば浴客賑しからず。

岩手縣

一二三　岩手山……岩手山又は巖鷲山とも書し一に南部富士とも呼ぶ、岩手縣は昔南部氏藩領にして此山の遠望富嶽に似たるに因る、山は東西兩部に分れ東巖手の方高く、重複せる消火山にして、大なる舊火口跡の中に妙高々嶽と稱する中央火口丘聳ゆ最高六千五百

尺に達す、東南の中腹に網張の溫泉あり、山麓は裾野廣くして曠原打開け未だ耕作を施さず主として馬の放牧に逸せらる、小岩井牧場最著名なり。

一二四　早池峯山……早池峰山(はやちねさん)は北上山系中の最高峰にして六千五百尺に達し岩手山並に秋田縣の鳥海山(ちょかい)と共に奥羽三高山の一に居る、盛岡市を距る東方十里餘にして交通不便なれども、珍奇なる草花を産するを以て近年世に知らる。

一二五　北上の海岸……北上山系は太平洋沿岸まで達し、山足直ちに海水に沈み其間に平地を殘さず故に海岸線は鋸齒の如く出入し數多の小港灣をなせども、陸上の平野狹ければ大なる港市發達すること能はず多くは漁村若くは小き寄泊地に過ぎず、氣仙沼(けせんぬま)、大船渡(おほふなど)、釜石、宮古、山田等の港灣相並べり就中大船渡は灣最も深く入りて天然の良港をなせども陸上交通の不便なるを如何せん、其他の港灣よりも奥州鐵道へ出るには何れも北上山系十數里を横斷せざるを得ず、又此邊一帶は明治二十九年六月に所謂三陸の大津浪の災害を蒙りし所にして、さなきだに海岸は長年月の間に徐々に沈降して昔の建物の礎石など今は水底に沒せるを發見せる所あり。

一二六　釜石……北上山系の海岸にて最も著名なるは釜石港とす海を距る四里の山中大橋村に大なる鐵鑛の産出あり之れを採て精煉するために海岸に製鐵工場の設けあり内地に於ては筑前八幡の官設製鐵所に次での大規模とす、工場は田中長兵衛氏の經營にして主として銑鐵を製出す、昔より有名なる南部鐵瓶は此鐵を以て鑄造せるなり。

一二七　水澤……奥州鐵道線に沿うて水澤の驛あり、今は寂寞たる村落に過ぎざるも昔は小き藩城の在りし所なり驛の西方に文部省の所管なる臨時緯度觀測所あり萬國測地學會の國際的事業として精鋭なる望遠鏡を据ゑ連夜星辰の觀測をなしつゝあり、所長理學博士木村榮氏の研究成績は世界の學界に賞讃を博したり。

一二八　平泉……奥州鐵道線一ノ關驛の北に平泉驛あり今を去る八百二十年の昔、嘉保年間、時の押領使兼鎮守府將軍藤原淸衡が政廳を開き壯麗なる邸宅を構へしより約百年間藤原家の居住せし所にして平泉館と稱す、館の附近に多數の寺堂、佛刹ありしが概ね兵燹のため灰燼に歸したり、其附近に建てられたる中尊寺の一部分今尙ほ存せるのみ。

一二九　高館……平泉館趾より數丁の東北、北上川に接して高館の趾あり源義經が關東

より落ち來りて此地に邸宅を構えたる所にして一に判官館とも衣ノ館とも呼びしなり、今は唯名のみにして荒れ果てたる寒村なり。

一三〇　中尊寺……現今の平泉驛より西北十數丁なる丘上に在り、今を距る約一千六十年前、仁明帝の御宇、嘉祥三年慈覺大師の創建に係り清和帝貞觀元年、中尊寺の號を賜はり、藤原家鎮守府將軍として全盛の時代には幾度か資財を投じて修理增築せられ堂宇輪奐金碧の美を盡したりしが、平泉の勢力衰へると共に漸〻頽廢に歸し、加ふるに建武四年野火延燒して、惜む可し大伽藍、樓門等概ね灰燼と化し金色堂、一切經藏のみ僅かに祝災を免れ今は藤原式建築の好模範として歷史家美術家の賞讃する所となり國寶として保存せらる、因に記す藤原式建築の現今まで殘存せるもの中尊寺の外に山城縣宇治、平等院、醍醐寺法界寺を除きて殆んど無し、金色堂は八百五年前天仁二年藤原清衡の建立せる所にして中尊寺大伽藍中の一小堂なりしが積年の風雨に曝され漸く腐朽しゆくを鎌倉將軍惟康親王之れを憂ひ正應元年執權貞時をして外側に覆ひ堂を造りて保護し後、德川時代には伊達家の屢々修繕を加へたるありて漸く今日に至れり、堂の廣さ、三間四面、中の間僅かに七尺二

寸、柱の高さ一丈九寸、規模は寧ろ狹小なりと雖ども其構造、綺麗を極め、柱梁は凡て金泥を塗り珠玉螺鈿を鏤め鐫彫、壁畫何れも壯嚴を盡し建築の當時は燦然人目を驚かし藤原氏の榮華を誇りしものなる可し、佛像を安置せる壇床の下に、清衡、基衡、秀衡の柩並に忠衡の首桶を藏せり、佛像の中、一字金輪佛最も貴重せらる。

青森縣

一三一　八甲田山……消火山の一大群にして酢湯(すかゆ)岳、井戸岳、赤倉岳、櫛ヶ岳、鹿島大岳など其主なるものにして就中酢湯岳と井戸岳の頂には實に立派なる噴火口の跡あり高さ六千尺に及ぶ、中腹に酢溫泉並に硫流汽洞數多湧出し硫黃を產す、裾野は極めて廣大にして放牧に適し三本木種馬所は山の東麓に在り、青森市より山頂に到る九里嘗て雪中行軍にて多數の兵士が凍死せしはこの裾野にてなり、

一三二　恐山……一に字曾利(うそり)山とも呼ぶ下北半島の盡端に聳ゆ、破壞せる消火山にして溫泉硫汽の湧出あり。

一三三　岩木山……一に津輕富士とも呼ぶ、殆んど孤立せる消火山にして山容整しく宛ら富嶽の如し高さ五千五百尺、弘前市より西に當り三里にして山麓に達す、岳ノ湯、湯段等の溫泉湧出し夏は浴客少からず。

一三四　青森……奥州、奥羽兩鐵道幹線の終點にして東京を距る百九十里、鐵道四百五十六哩内地より北海道に渡るの要津なり、近年北海の開拓益々進むに從ひ年を追うて榮ゆ、人口五萬に近し、市の東方に淺蟲溫泉あり海濱より湧出し風光も佳なれば浴客多し、此附近一帶、木通蔓の細工、盛にして多くは籠を編む、原料たる「ミツバアケビ」は附近の山野に夥しく産せり。

一三五　弘前……青森市に次ぎての都會にして縣の中央より西に偏し岩木川の流域平野に位す昔は津輕藩の城市にして青森の開港する迄では當地方の中心なりき城跡は今日第八師團の司令部となれり、津輕地方は所謂津輕塗と稱する漆器を以て有名なり、又、林檎を多く産す、近年市場に見る林檎は素と西洋種なれども奥羽並に北海道の氣候に適するを以て年々産額を增す、其大部分は青森縣下より出だし縣内にては弘前附近を最盛とす。

秋田縣

一三六　鳥海山……鳥海山は本縣と山形縣との境に座する消火山にして、其西南麓は長き裾野を曳きて日本海と最上川の下流に達す、山頂は二三に分れ鳥ノ海の湖あり、大同年間に噴出せしといふ新山あり生々しき熔岩の湧出せる跡明なり、最高頂は六千七百尺を超え、岩手山、早地峰と共に奥羽第一流の高山にして盛夏と雖ども殘雪皚々たり、最上川の出口なる酒田港より蕨ヶ岡又は吹浦を經て登山するを便とす、蕨ヶ岡は表道にして大物忌神社を祀り年々登山客少からず俗に酒田富士とも呼ぶ。

一三七　森吉山……本縣の中央に位せる消火山なるが山の低きため其名著れず。

一三八　能代川……能代川は一に米代川とも呼ぶ、本縣内を迂曲して日本海に注ぐ其流域には檜、羅漢柏(アスナロ)等の森林繁茂し良材を出だすを以て、下流には木材の集積夥しく、河口なる能代港には盛なる製材工場ありて木材を挽き柱、板等を製せり、又春慶塗と稱する漆器を産す。

一三九　十和田湖……秋田、青森兩縣の境にある圓き形の湖にして周圍十六里、面積七千九百町歩本邦屈指の大湖なりとす、四圍、山岳を繞らし水面高く、水質清涼、湖岸の風光頗る佳なり、但し交通極めて不便なれば遊覽客少し。

一四〇　小坂鑛山……本邦第一等の金屬鑛山にして秋田縣の東北部、岩手縣に近き所に位し陸中國に屬するを以て昔は南部藩の管轄たりき、奥羽線鐵道の大館驛より九里、交通宜しからざりしが、今は同驛より鐵道支線を通ぜり、此山は文久二年の發見に係り慶應二年舊南部藩の御用鑛山として專ら銀を產したりしかば小坂銀山の名世に傳はれり明治維新後、政府の經營に移りしが銀鑛漸次減じて成績良しからざりき明治十七年拂ひ下げて藤田組の有となり、同三十三年精煉法を革新し含有量の乏しき銅鑛より燃料を節約して精煉する方法を採用してより、銅の產額頓に增加し今日にては銅の產出額は足尾と匹敵して年々一千萬斤を超え、銀八千貫及び金の六十五貫(六萬五千匁)を產し金屬鑛山として實に本邦第一等に位す。

一四一　院內銀山……院內は縣の南部、鳥海山の東麓にあり、慶長十一年の發見以來、

舊秋田藩にて採掘精煉を施せし頃は銀の產額多くして院內銀山の名世に聞えたり維新以降產出漸く減少し今日にては殆んど廢坑の姿となれり足尾銅山の所有主たる古河家の所有なり。

一四二　椿銀山……內地に於ける最大銀山なれども未だ世に聞えず、本縣の西北青森に接して日本海沿岸にあり能代港を距る八里とす明治二十一年の發見に係り今日にては銀一萬餘貫並に若干の金銅を產出す武田恭作氏の有なり。

一四三　尾去澤・不老倉・荒川・阿仁……秋田縣は全國中金屬類を產する額に於て實に拔群なり小坂、椿、院內を始め古來大小無數の金銀銅山諸所に散在し、各相當の產額あり、就中、尾去澤、不老倉(ふろくら)、阿仁、荒川を以て屈指とす何れも本縣の北部にありて交通は餘り宜しからず、尾去澤鑛山は和銅元年の發見に係り今は三菱家の所有たり荒川は元祿十三年の發見といひ同じく三菱家の有なり不老倉(ふろくら)鑛山は明和元年、阿仁は慶長年間の發見にして共に古河家の手に經營せらる何れも銅を主とし多少の金銀を併せ產す。

一四四　秋田……秋田市は封建時代には佐竹氏藩の城市にして城跡は今は公園となれ

り、縣廳の外に官立鑛山專門學校の設あり市の附近に秋田織と稱する絹織物を產す。

一四五　秋田蕗……世に秋田蕗と稱するは大形の蕗にして葉は傘の如く葉柄は棒の如し生のまゝ煮て食するの外に、砂糖漬として販賣せらる、然れども大形の蕗は獨り秋田のみならず凡て北方の雪の深き國に產し、北海道には更に偉大なるものを自生せり、秋田には絹布に蕗の葉を摺り出して驚き名物の一となせり。

山形縣

一四六　月山……山形縣の中央に座を占めたる大なる消火山にして、最高點六千尺に及ぶ、山麓に羽黑山、溪谷に湯殿山の神社あり、最上川の沿岸なる清川より登るを便とす夏日近縣より集る登山客、萬を以て算ふ、月山、羽黑山、湯殿山を巡拜するを三山參詣といひ恰も三峰鼎立の如く見ゆれども實は單一の山なり。

一四七　最上川……最上川は本邦屈指の長流にして本流の長さ五十五里とす、本邦三急の一に算ふれども夏季と冬季は水量少くして舟行緩かなり、初夏雪解けの頃は一度に增水

して急流となるなり。

一四八　酒田……酒田港は最上川の河口に位する港市にして昔は北海の良港として、庄內平野より產する米穀は主として此港より輸出せられたり、之れを酒田米といふ。

一四九　絹織物と櫻桃……山形は古より絹布織物の名產地にして殊に米澤を以て中心とす所謂米澤絲織これなり近時同縣置賜郡より大島紬の如き絣を產す又櫻桃卽ち櫻實は近年西洋種の輸入にして盛に栽培し、美しき果實を市場に出す。

一五〇　板谷峠……福島縣より中央山脈を踰えて山形縣に出づる山道を板谷峠と云ふ、今は奧羽線鐵道を布設して交通は便利となれり、然れども素より傾斜急峻、山岳溪澗參差したる地形なれば、幾多の隧道を穿ち軌道に二三ケ所の「スキッチバック」を設けて漸く山背を越すを得、殊に冬季は積雪深くして、軌道を埋め時に雪崩を押し降して危險少からず、爲めに往々列車の運轉を妨ぐることあり、嘗て大椿事を演じたる赤岩信號所とは此險路にあるなり。

◎中部地方

一五一 日本アルプス……本州の中央部最も幅の廣き所には殆んど南北の方向を指して數列の大山脈が走り、本州を東西兩部に遮斷せりこの大山脈は北は越中越後の間に於て截然として日本海に沒し古來有名なる親不知の險をなし南は蜿蜒として漸次低下し太平洋の沿岸に達して西に曲り餘脈は紀伊半島より四國九州に及べり之れを日本群島を構造せる山骨の南彎とす、而して本州の中央に於て最も秀で內地に於て富士山に次げる高峰をなす、山勢の雄大峻嶮なること地質構造の相似たる點により近來の登山者は日本「アルプス」と呼べり、この大山脈の横斷せるがため本州の東西兩方の交通を阻害し從て風俗習慣を異にせり關東關西なる語は箱根の關所の東西を意味するものなれども、實際其自然的の區劃はこの大山脈により分たるゝが如し大山脈は更に二三條の平行せる山脈より合成し其高峰は一萬尺內外に達し、日本海に近き部分は冬月積雪非常に深く三伏の候を經ても溪合は殘雪を以て埋められ、高山植物の種類豐富にして珍奇なる稀品多し、風景の壯絶なること海內

多く其比を見ず交通の不便なるがため人跡到らざる所多けれども近年探檢家の跋涉するもの漸く繁く紀行文など世に公にせられたるもの少からず山脈中、北半は飛驒山系とし南半を赤石山系とす一に日本北「アルプス」南「アルプス」とも呼ぶ。

一五二 飛驒山脈……飛驒、越中、信濃に跨る大山脈にして日本北「アルプス」の名あり、凡そ三列の山脈より成り其主なる高峰は北より算へて白馬山、立山、劍嶽、藥師嶽、鹿島鑓ヶ嶽、大黑嶽、黑嶽、五六嶽、常念嶽、大天井嶽、燕嶽、穗高嶽、笠ヶ嶽、槍ヶ嶽、有明山等あり頂巔は八千尺乃至一萬尺の間を往來せり、就中、白馬山は一に大蓮華とも呼び白馬山、杓子嶽、鑓ヶ嶽の三峰に分れ、高山植物の豐富なることを以て名著はる、立山は越中富山方面よりの登山客多く殊に北陸地方の少年は必ず一度は登山せしむるを例とす其他の諸峰は登山の路、甚だ困難なるを以て世に聞ゆるもの少し山脈の南部には燒嶽一に硫黃嶽、乘鞍嶽、木曾御嶽(おんたけ)あり燒嶽は活火山にして近年活動して盛に噴烟し灰を降らせしことあり、御嶽と乘鞍嶽は共に一萬尺に達する偉大なる消火山にして殊に御嶽は夏期登山客夥しく其名關東諸國に知らる、飛驒山脈の間に夾める峽谷を黑部川とし北流して日本海に

注ぐ又山脈を横斷せる通路として南に野麥峠ありて御嶽と乘鞍の間を通じ、北には針の木峠ありて信濃の大町より越中の立山溫泉を經て富山に出るを得、されども、途中黑部川の籠の渡しを渡り、一二夜は野宿せざるを得ず。

一五三　赤石山系……甲斐、信濃、駿河、遠江に跨る三列の山脈より成り日本南「アルプス」と呼ばる、最も東に位せるものは北に甲斐の駒ヶ嶽あり南に延びて鳳凰山、地藏嶽に連る中央に夾まれるは白峰とし峰頭は北嶽、間ノ嶽、農鳥嶽に分れ北嶽の絶巔は一萬尺を超え內地に於ては實に富士に次での高峰とす、西なる山脈中には赤石山最も秀づ、又山系の北部に仙丈ヶ嶽あり、山脈の間に野呂川、田代川の峽谷あり前者は富士川の支流にして後者は大井川の水源をなす。

一五四　富士火山帶……南彎山系の東側に沿うて本洲の中央を横斷せる一大火山帶にして北方は勃然日本海の沿岸より起り燒山、妙香山、黑姬山、戸隱山、飯繩山、立科山八ヶ嶽、富士山、箱根、愛鷹山、天城山を連れて伊豆七島となり更に延びて八丈、小笠原島並に南洋の火山島となる、淺間山、白根山、乘鞍嶽、御嶽等の火山はこの火山帶に接近

して聳ゆれども、中央火山帶に屬せるものと見做すを適當なりとす。

一五五　信濃川……本邦內地に於ける最大川にして其本流水源より河口までの長さ九十四里之に支流を合算すれば總計九百八十一里となり流域面積七百九十五方里、本流と支流の內にて舟筏を通じ水運に便を與ふるところ百七十八里に達すといふ、南彎大山系以東に於ける信濃の諸水は集まりて犀川、千曲川となり所謂川中島に於て合流し信濃川となり斜めに越後を貫きて日本海に注ぐ其河口は日本海よりの常風のため漸次北に移るとぞ、河口の西岸に新潟市あり。

一五六　木曾川・木曾……信濃川と正反對の方向に流れて太平洋の內海なる伊勢灣に注ぐ、本流水源は信濃の南部なる飛驒山系、赤石山系に發し木曾山脈に沿うて濃尾平野に下り鈴鹿山脈、飛驒高原より發する揖斐川、長良川を併せ、伊勢の桑名に於て海に注ぐ、本流の長さ七十六里、支流を併せて七百七里、舟筏を利すること百十四里、流域五百九十方里に及ぶ。木曾山脈を沿うて下る所は峽谷をなし花崗岩の間を穿ちて狹潭をなす、之れを寢覺の床と呼び潭中の巖上に浦島太郎の小祠あり此附近木曾街道峽谷に沿うて通じ、古へは道路險

惡にして僅かに棧を架して通ずるを得たり、之れを木曾の棧と稱して世に聞え芭蕉翁の俳句「棧や命をからむ蔦蔓」あり、今は國道を開き石碑に句を刻みて路傍に立てり、木曾川の方さに尾張に入らんとする所に虎溪の名勝あり又其下に錦織の綱場あり强き綱を張り上流より落し來る木材を纏めて筏となす、木曾山脈、飛驒高原に跨りて莫大なる帝室の御料林あり針葉樹の生育頗る佳く、殊に檜の良材を出だす、昔は尾州藩の所轄に屬し其れより產する木材は熱田の白鳥に集積し汎く世に拂下げたれば尾州檜の名著はる、木曾川と信濃川との分水界は信濃の中央を南北に走れる赤石山系の餘波にして中仙道之れを横る所を鳥居峠と呼び本曾御嶽神社の遙拜所とす、所謂、木曾節なる俗謠は木曾山林伐木作業の歌なり。

一五七　天龍川……水源は信濃の諏訪湖に發し木曾、赤石兩山脈の間を縱走して東海道に下り遠江の海に注く、其中流には花崗岩の峽谷をなし天龍峽と稱す風光奇拔の所少からず、下流は積原廣くして長き鐵橋を架せり雨期には出水甚しく屢々鐵道を破壞すれども平時は水淺く流急にして大船を通ずること能はず本流の全長五十四里之れに支流を合すれば五百五十六里となる、されども舟筏を利す可き所漸く九十里を過ぎず、東海道三大川の一

とす、信濃飯田より東海道に下るに便なれども舟行危險なり。

一五八　富士川……東海道三大川の一にして其上流は甲斐信濃の境より發し笛吹、釜無の二大支流となり甲府盆地の西南に於て合し、富士山の西麓を南下して駿河灣に注ぐ水淺く流急なれとも甲斐盆地より東海道に出づるの捷路なり、早朝、甲斐の鰍澤より輕舟を發すれば半日にして駿河の岩淵に達するを得、然れども途中危險の箇所少からず。

一五九　濃尾平野……尾張、美濃と三河、伊勢の一部分に跨る大平野にして其面積內地に於ては東京平野に次ぐ、東北西の三面山を繞らし、木曾川の本流支流之れを貫流して南面なる伊勢內海に注ぐ地味豐沃、農產物夥しく戶口益々蕃殖す名古屋、岐阜、大垣等大小十數箇の市町を有し巨萬の人口を包容す明治二十四年十月近來稀れなる大地震起り夥しき損害を與へたりき世に之れを濃尾地震と呼べり。

一六〇　東海道と中仙道……封建ノ世、政治兵馬の權、江戶に在りしとき幕府より皇室の所在地たる京へ往來する國道二條あり、一を東海道と稱し主として太平洋沿岸に接して通じ、名古屋の南端なる熱田より伊勢に入り鈴鹿峠を越え近江の草津を經て京に達す、二

を中仙道と稱し江戸より北に向ひ碓氷峠を登り、信濃を斜めに西南に貫き岐阜、大垣、關ヶ原を經て琵琶湖の岸に沿ひ草津に於て東海道に合す、東海道は幾多の急流を渡り、中仙道を多く山間を通り大なる峠を越し木曾川に沿へり、東海道は氣候溫暖にして冬の往來に適し中仙道は冷涼にして夏の旅行に良し、又東海道は夏期降雨の節往々出水のため交通を杜絶すれども中仙道はこの憂なし其代りに中仙道は冬月霜雪深くして路を塞ぐことあり、要するに夏は中仙道に據り、冬東海道を擇ぶを便なりとす、今や鐵道は兩街道に沿うて敷設せられたるが所謂東海道線は名古屋以西に於て中仙道の一部分を取れり、蓋し本線敷設の當初、軍用線を目的として中仙道を擇びしが岐阜以西竣工の後、政府の方針一變し殘餘の線路は東海道に沿ふことに更めたるに因るなり。

一六一　信越線……群馬縣の中央なる高崎より碓氷峠を登り長野縣の東部を北走して越後の海岸なる直江津に達する鐵道線路にして途中、碓氷峠の上なる輕井澤と信濃、越後の境上なる柏原に於て三千尺内外の高原を通ぜり(碓氷峠に就ては群馬縣の條下を見よ)殊に柏原驛は海拔二千七百尺、冬月北海より吹き寄せる降雪深く積りて往々汽車の進行を塞

ぐことさへあり。

一六二　中央線……東京より山梨、長野兩縣を通過して名古屋に達する鐵道線路にして東京甲府間は所謂甲州街道なる往還に沿ひて關東山系を貫き、長野縣の鹽尻より西は主に木曾川に沿ひ木曾街道に據れるなり、其東方なる一部分は元と甲武線と稱し平坦なる東京平野を通じたれば疾くに開けたりしが其れより以西は地勢險惡、工事甚しく困難なるを以て政府の經營によりて敷設せられ今は全部、國有線となれり全長二百五十二哩、十五年の長年月と四千三百萬圓の鉅額を費やして落成したるなり、隧道大小九十五ヶ所、總計八萬六千七百尺、其内特に長大なるを笹子、小佛とす、笹子峠の隧道は海拔二千四十三尺の高際に於て一萬五千百七十六呎(二哩七十鎖(チエイン))を穿ち小佛峠隧道は之れに次ぎて八千三百五十一呎に及べり、又地盤の高き所は信濃の中央なる鳥居峠の附迄にて海拔三千百八十九尺に達し全國鐵道線路中最高き地點とす之れに次ぐものは信濃甲斐の境なる富士見驛に於て三千百三十九呎を算す、明治四十四年五月一日始めて全線開通せり。

一六三　東海道線……東京、京都、大阪の三大都市を連絡せる鐵道線路の一にして主

として東海道國道に沿へるものなり我邦に於て最も早く開通したる幹線にして其計劃は已てに幕末に始まり明治五年に東京横濱間を開き同七年に大阪神戸間を通じ同二十三年に全部の運轉營業を見るに到れり、本線は以上の三大都市の外に横濱、名古屋、神戸、靜岡、大津、濱松等の貿易港又は都市を經由せるを以て、交通の頻繁なること固より國内に冠たり全線三百七十哩、最急行列車は十二時間五十分にて達するを得、目下全部複線なれども更に軌道を擴張して四呎四吋の廣軌鐵道に改めんとの計劃あり、通過する地方は主に東海道の太平洋沿岸にして山脈を横切る地點は比較的に少けれども大川を渡ること極めて多く夏秋の交、屢出水汎濫して鐵橋軌道を破壞し交通を杜絶すること決して珍からず建設の當時、其餘り海岸に接近せるを以て、萬一の場合、敵艦の狙擊を憂ひ、別に軍用線を山間に布くの急務を唱へしが今や、太平洋の海上權は益安固となり當初の杞憂は竟に消滅せしと雖ども大河の氾濫は長へに本線を禍して年々其災害を反覆せり文明の利器尙ほ天險を打破し能はざるを遺憾とす。

長野縣

一六四　淺間山……長野縣の東境、群馬縣に跨かりて聳ゆる大なる活火山にして其座積約八里四方を占む、裾野は南北に遠く曳いて追分ヶ原と六里ヶ原となり山容、富士に似て現在活動せる山頂は高さ八千二百三十尺、其西に牙山並に前掛山と稱する二重の舊火口壁を存せり又東麓に小淺間、離山の二個の寄生消火山あり頂上なる火口は直徑、千尺を超え周壁、削れて井戸の如き姿を呈す四時白煙絶ゆることなく殊に近年は時々盛に活動して灰石を降らし四隣を震動せり昔、天明三年强烈なる大破裂を催し關東諸州を荒せしことあり山麓に溫泉湧出する所少からず登山には南麓の沓掛、追分よりの路を便とす。

一六五　輕井澤……長野縣の東隅、淺間火山の東南麓にして碓氷峠の上に當り地盤高くして海拔三千百尺に及ぶ舊中仙道、碓氷峠の頂點に峠町と稱する小村落あり其れより西に下ること一里にして舊輕井澤宿あり信越鐵道の停車場は其れより一里南に開けて新輕井澤と俗稱す、附近一帶浮石の層にて深く地味、磽确、加ふるに冬月寒氣强きため普通の農作

に適せず專ら落葉松の殖林を施せり、されども夏日は氣候冷凉にして殆んど炎熱を知らず避暑の好適地なれば內外人士の集るもの頗る多し近年多少耕作を試み西洋蔬菜を植ゑつゝあり。

一六六　戸隱山……長野縣の北部、新潟縣に近き所に位する名山にして最高峰を高妻、乙妻とし高妻山は八千尺に及ぶ其南方に屏風の如き連嶂東西に亘りて絕壁をなし之れを前山と稱す、前山に對して高妻、乙妻を戸隱の奥山と呼ぶ前山の麓に戸隱神社の中院並に奥社あり長野市より飯縄(ねづな)山の麓を廻はりて五里とす山中珍奇なる草木に富む、飯縄山は一個の消火山にして長野市の背後に聳ゆ、別に黑姫山あり戸隱の東に接して屹立し亦消火山なり戸隱、飯縄、黑姫の三山は何れも火山質なれば其北なる燒山、妙高山と共に總稱して妙高火山彙とす。

一六七　白馬山……信濃と越中、越後の境に聳ゆる高峻なる山嶽にして從前は此邊の連山一帶を大蓮華山と呼び地勢も明かに世間に知られざりしが近年登山家の增せしにより山勢愈々明瞭となり今日にては大蓮華、小蓮華なる名稱は古き地圖面にのみ存すれど實際の

所在不明となり却て白馬山なる名稱普く膾炙する所となれり同山は飛驒山脈中の最も東に位し南北に走れる一脈中の最も高峻なる部分にして、山上は三峰に分れ最も北なるを眞の白馬山とし標高一萬尺に近し其南なるを杓子嶽、鑓(やり)ヶ嶽とす(槍ヶ嶽とは別なり)山勢東に向て急にして姫川の谷に臨み西は緩漫に傾斜して黑部川の峽谷を隔てゝ越中の立山連峰と相對す冬月積雪非常に深く三伏の炎暑を經て尙ほ消え去らず溪谷は殘雪を以て埋れたるまゝ秋に到る、されば寒帶性の草木に富み珍奇なる高山植物乏しからず、「ハゴロモグサ」「シロムマアサツキ」「ツクモグサ」「クモマキンバイ」「タカネキンバイ」など殆んど他の高山にて見る可からざる珍草とす登山者は東麓姫川の畔なる北條村よりし白馬尻と稱する大雪溪を攀ぢ途中岩窟の下に一夜を明かざれば往復することを得ず、近年途中に銅山の開けしより登山は便利となれり別に越後糸魚川方面よりも登るを得。

一六八　諏訪湖……諏訪地方は一の盆地をなし四圍山岳を以て繞らし東に和田峠、西に鹽尻峠あり諏訪湖は其形圓くして周圍凡そ四里、面積千四百六十五町歩、湖畔は水田開け又天然瓦斯と溫泉の湧出あり天然瓦斯は之れを導きて燈火燃料となし溫泉には浴舍を設く

湖面の高さ海面を拔くこと二千三百尺、可なりの高山と同樣なり、されば冬月寒氣の强きため湖面一帶に結氷し其厚さ一尺以上に及び人馬氷上を渡りて決して破れることなし近年氷滑りの遊戯盛に行はれて遠近の客多く集まり、汽車も割引券を發行するに至れり、嚴冬に到れば氷面の收縮と龜裂のため氷下ノ水、浸出して再び凍り、ために一直線の氷の堤を氷上に築くを例とす俗にれを諏訪明神の「御渡り」と稱し其方向現出の狀態によりて年の吉凶を卜することとなれり素より迷信に過ぎざれども四百七十年の昔足利時代より「御渡り」の模樣を奉行へ報告するを例とせり「御渡り」の記錄は明治維新まで一年も缺かさず絶えず報告を繼續せりといふ湖底は比較的に淺くして僅かに二十二尺位を出でず、魚類水草の蕃殖多くして水產の利少からず、此湖は其形の圓きと周圍に火山あるを以て嘗ては火口湖と推定せしことありしが地質學者の研究の結果、閉塞湖なりと斷定するに到りたり卽ち太古は今の釜無川に通ずる一大谿谷なりしを八ヶ嶽火山よりの噴出物のために谿谷は閉塞されて爰に一時は出口なき湖となり後、今日の如き出路を生じて天龍川の水源となりたるものなりといふ、現に歷史の示す所によれば昔の水面は遙かに今よりは高く、從つて湖水の表

面も廣かりしが今日にては漸次、水面は減縮し周圍に平地を生じつゝあり。

一六九　和田峠……舊中仙道の要衝にして八ヶ嶽火山の中腹を越す峠なり昇降八里、東は岩村田より西は諏訪に通ず峠の頂は海拔五千尺に近く、しかも道幅廣く兩側に東餅屋、西餅屋の大休憩所ありて各小部落をなし大厦を構へて旅客の休泊に便にす、地高ければ夏日と雖ども焚火に暖を取れり今は附近に鐵道の開通せしより、旅客貨物の往來頓に減じ著しく寂寞となれり。

一七〇　松本平……長野縣の中央西寄りの高原にして南北十數里坦々たる平野をなし、桔梗ヶ原と呼ぶ西は所謂日本「アルプス」の連嶂を望み、東は八ヶ嶽火山の餘波、山地をなして遮り、僅かに保福寺峠を以て信越街道に連絡す、中央に松本市あり縣內第一等の繁華にして舊城址あり、嘗て筑摩縣の中樞なりしが同縣廢止の後、長野縣廳を長野市よりこゝに移さんと企てしが鐵道交通の開けしより其議消去れり、實は松本こそ長野縣の中央を占めて縣廳所在地に適當なりとす、市の北に淺間溫泉あり蠶種製造を以ても著はる。

一七一　善光寺平……長野縣の北部に偏し信濃川に沿へる細長き平野にして其南部は

千曲川と犀川の合流點なる川中島の古戰場なり、平野の北西は直ちに飯縄山を負ひ其麓なる丘陵地に善光寺の名刹ありて遠近の參詣人年中雲集して頗る殷盛なり寺の前は卽ち長野市とす長野市は松本、上田の如き古城市にあらずして善光寺參詣客の旅舍の集合より發達せし都會なれば人情自ら縣内他所とは異なれり。

一七二　上田……長野縣内の東に寄れる小高原にあり其邊を上田平といふ、上田は古城趾にして今は文部省直轄蠶絲專門學校の設立あり。

一七三　岡谷……長野縣は邦内第一等の生絲產地にして諏訪は其中樞なり、而して岡谷は諏訪の中樞となれり、諏訪湖尻より天龍川に落つる清流に臨み製絲工場無數棟を列べ細き煙突夥しく林立す、蓋し維新以降生絲輸出の進歩と共に發達したる町にして其水流は工業の發展に大なる助をなせり現今生絲の產額全國に冠たり。

一七四　御嶽……御嶽（をんたけ）の名ある山岳、邦内に少からず故に特に木曾の御嶽と呼んで區別を明にす、信濃、飛驒の境上に位せる偉大なる消火山にして山頂に數個の火口跡ありて水を湛へ二ノ池、三ノ池などと稱す頂巔、一萬尺に達し盛夏と雖ども殘雪あり、關東諸州より白衣の信徒登山するもの實に夥しく信徒の結社は所謂御嶽講なり、登口は木曾川の岸なる福島（ふくじま）を最も便とし王瀧口、黑澤口の二道あり山腹に三笠山、八海山、御田（みた）の原などの名地あり。

一七五　乘鞍嶽……御嶽と相對せる消火山にして山容、高さ共に御嶽と肩を並ぶ山頂廣く二三の湖沼あり最高峰は一萬尺に近し飛驒信濃兩方面より登るを得、山麓に白骨、平湯の兩溫泉あり白骨溫泉特に著名にして松本より島々村を經て達するを得。

一七六　槍ヶ嶽……長野縣の名山の一つなり天晴朗の日松本平より西を望むときは、層層たる連山の後に一頭地を拔いて銳き鋒を高く仲天に突出して見ゆるもの是れ卽ち槍ヶ嶽なり最高點一萬尺に近く磊々たる岩塊、崩碎亂積して殘雪之れに交り豪宕雄愴の景多く他に見ざる所なり之れに登らんと欲するものは松本平の西端なる島々村より德本（とくご）峠を打越し神河内（かみかうち）（上高地）溫泉に泊し更に梓（あづさ）川の谿澗を逆り途中一夜露宿して始めて頂巔に達するを得るなり、槍ヶ嶽と列び一谿を隔てゝ穗高（ほたか）嶽あり高さ槍ヶ嶽と相伯仲す。

一七七　燒嶽……一に硫黃嶽とも稱す同名の高山、內地、二三あり長野縣の燒嶽は飛驒

との國境に聳ゆる活火山にして高さ七千尺に達し頂に火口あり常に烟を吐き灰を降らす、近年著しく活氣を帶ぶ、其東北麓に神河内溫泉、西麓に飛驒の蒲田(がまた)ノ湯あり。

山梨縣

一七八　甲府盆地……山梨縣の大部分は甲府盆地にあり甲府盆地は四面、何れも高峻なる山岳を以て圍まる、南に富士、北に八ヶ嶽、東は關東山系、西は赤石山系とす、笛吹、釜無の兩川、東北、西北の山間より發して盆地を貫き其の西南隅に於て會合し富士川となりて駿河に下る、盆地内は地勢平坦砥面の如し、太古は一帶の湖底なりしと考へらる湖尻は漸次、深くなりて水は涸れ終に今日の如き盆地と化せしならん、周圍天險の防禦と盆地内の地味肥沃なるため群雄割據時代は好適の城市たりき、武田信玄こゝに據りて四方を攻略せしなり。

一七九　八ヶ嶽……山梨、長野兩縣に跨がる偉大なる消火山群にして裾野の廣大なること富士に劣らず、最高峰を赤嶽と呼び九千尺を超ゆ、横嶽、權現嶽、硫黄嶽、立科山之れ

に連結せり、西は諏訪、南は甲府、東は千曲川沿岸の佐久郡何れよりも登るを得、山中六千尺の高所に本澤(ほんさは)の溫泉あり又、山の西方中腹に澁ノ湯(草津白根山の西麓にも同名の湯あり)明治溫泉等あり山頂は珍奇なる草木に富むを以て採集家の好で登山する所なり。

一八〇　甲斐駒ヶ嶽……山梨縣の西北隅に聳える高峻なる山嶽にして、甲府盆地の西境を劃せる山脈の起點をなし高さ九千尺を超ゆ北麓なる臺ヶ原村より登るを便とす山頂は崩解せる花崗岩の白砂にて掩はれ所々に巨巖屹立して壯觀を極む、昔時は甲斐ヶ根と呼び登山客夥しかりし故、石像、小祠など數知れず安置し、險惡なる箇所には鐵鎖を懸けて攀づるに便にす、信濃方面よりは白崩(しらくづれ)と稱す、山勢南に曳きて鳳凰山、地藏嶽となる。

一八一　鳳凰山・地藏嶽……駒ヶ嶽と同一の山脈にして甲府市より眞西に當りて見ゆ就中鳳凰山は頂巔に五丈八尺と號する鉾の如き花崗岩の巨塊突出し、遠くより認むるを得地藏嶽は稍隔りて南に位し山頂に小さき地藏尊の石像を數多安置す昔時登山客多かりしこと察せらる、東麓なる芦安村より登るに便なり、最高頂八千尺を超ゆ。

一八二　白峰……赤石山系の中軸をなせる山脈にして駒ヶ嶽、鳳凰山の山脈より野呂川

の峽谷を隔てゝ西に位し高さ略ぼ一萬尺を超え、甲府盆地よりは鳳凰山脈の背後に僅かに其峰頭を仰ぎ見るを得、山頂三峰に分れ、北嶽、間の嶽、農鳥嶽とす北嶽最も高峻なり、内地に於ては富士山に亞ぐの高峰にして登山家の垂涎する所なれども、登路險惡、往復少くも三日以上を要し途中露營せざるを得ず、東方芦安村より入るを順路とす。

一八三　桂川……富士の東北麓なる山中湖より發し關東山系の間を穿ちて東南に流れ相模に入りて相模川と稱す其關東山系を貫流する所、數百尺の峽谷をなし風光の佳なる所多し殊に武藏に近き所に猿橋（ゑんけう）あり甲州街道の要驛とす橋は橋杭を用ゐず兩岸より木材を差出し巧みに之れを組みて架す、古來本邦三奇橋の一と稱せらる今は鐵道其下流を通ぜり、猿橋の附近に桂川の水を導きて急に落下せしめ水力電氣を起し遠く東京市に高壓電流を送れり所謂桂川水電これなり。

一八四　甲斐絹……山梨縣は養蠶、製糸の盛なる縣なるが其東方桂川の沿岸村落にては盛んに機を据ゑて特有の絹織物を產す、甲斐絹卽ちこれなり羽織裏地として廣く需要せらるゝのみならず蝙蝠傘の布地として近年益々賞用せられ海外へも輸出せり谷村（やむら）を以て其中

樞地とす。

一八五　甲州葡萄……山梨縣は絹の名產と共に果實の名產なり殊に葡萄は以前より世に名あり盆地の東方なる丘陵地に多く栽培す其美味なること博く賞贊せらる、勝沼を以て中心とす近年本縣釀造の名を以て葡萄酒を販賣すれども果して、この葡萄を以て釀造せるや否や甚だ疑はし、元來葡萄酒は殆んど山野自生の酸味ある果實を以て作る、已でに生食して美味なる葡萄は釀造に不利なり或は奸商の僞物ならんか。

一八六　水晶……水晶は亦山梨縣の名產なり信濃境に近き金峰（きんぱう）山の麓に產す、花崗岩の地盤にある洞窟中に生ぜり洞窟を俗に「カマ」と呼ぶ、昔は水晶は非常に貴重し價額も不廉なりしが明治維新以後產出頓に增し弘く世間に用ゐらるゝに到れり本縣の水晶は無色透明なるもの、草入のもの、並に水入、双晶等あり甲府市には數多の水晶業ありて軒を列べり。

一八七　身延山……日蓮宗の本山として名高き身延山は久遠寺（くおんじ）と稱し、縣の西境なる七面山の麓にあり甲府市より西南四里なる鰍澤（かじか）より富士川を下ること七里、右に折れて寺に

到るを得、目下、靜岡縣より富士川に沿うて輕便鐵道を布設するの計劃あり、又七面山の中腹に小池あり池畔に一種の硅藻土を產す之れを「御土」と稱へ採て以て藥とす、身延山の南方に硯材を以て著名なる雨畑あり。

一八八　甲府……甲府盆地の中央に位し舊、武田信玄の城市にして人口五萬を超ゆ城址は今は公園となれり。

一八九　酒折宮……甲府市の東に酒折宮（さかをり）あり古、日本武尊東夷征伐の遺跡と稱せり、史書に碓氷峠を越へられたるとは今の碓氷峠にあらずして甲信の山道なりといふ。

一九〇　御嶽……甲府市の北三里半にして御嶽（みたけ）の勝地あり金櫻神社を祀る途次、谿流に臨み奇巖突兀風光奇拔なれば探勝客の遊覽多し。

靜岡縣

一九一　富士山……富士山は本邦第一の名山にして內地第一の高山たること普く人の知る所なり甲斐、駿河の境上に聳ゆる一大消火山にして殆んど完全なる圓錐形を呈し遙に

之れを仰げば所謂「白扇倒懸東海天」の語に背かず裾野は緩漫にして遠く曳き莫大なる地積を領す山頂に舊噴火口の跡ありて之れを內院とも「御鉢」とも呼ぶ火口の周壁は凸凹起伏し其最高點は東南隅にありて劍ヶ峰といふ海拔一萬二千七百尺とす、全山火山岩にして裾野は火山灰と黑き火山砂礫にて掩はれ廣き草原をなし、所によれば樅の深林あり中腹は栂の如き針葉樹の純林にて包まれ中腹以上は直ちに草木疎となり磊々たる熔岩の亂積せるのみにて殆んど裸出す、火口內には盛夏と雖ども殘雪を止め世に「千古の雪」といふ、富士に登る路は三ヶ所あり、南よりするものは大宮口と呼び登山の正門とす東海道鈴川驛より汽車にて大宮に到り其れより漸次山道に懸る、北口は吉田口と呼び中央線大月驛より山麓吉田を經て登る、東方は東海道鐵道御殿場驛より直路又は須走（すはしり）を經て山に懸る、大宮口最も長く東口最も近し山麓より頂上まで健脚にて一日を要す登山客は概して前日の中に七八分通り登りて一夜を明かし翌日拂曉出發し、日出を拜しつゝ頂上に達するを常とす、年々七月一日を以て「山開き」とし八月下旬まで登山客絕ゆることなし、登り道は麓より頂上までを十分して一合より十合に到る、十合は卽ち頂上なり、大抵一合毎に粗末なる宿舍の設けあ

りて休息宿泊に便にせり、之れを室（むろ）と呼ぶ、吉田口の如きは一合の中間にも尙ほ室を建つ、頂上火口の縁には數軒の室と淺間神社あり甘酒、餡餅などを鬻ぐ、火口の周圍は路惡けれども一周するを得、之れを「御鉢巡り」といふ、又五合目に於て山を一周する道を「御中道（おちうどう）」といひ之れを巡る者は少し、關東諸國には富士登山講ありて年々白衣結束して登るを例とす山麓には案内人、强力などありて雇ひに應ず、天氣不良の日は風雨荒れて砂を飛ばし危險なり、近年は山頂に巡査派出所並に電話の設あり行路大に安全となれり、又寫眞師、郵便局などさへあり、婦女子、老幼、盲目者さへも容易に登るを得、山頂は寒冷にして盛夏と雖ども焚火して暖を取り、大氣稀薄なれば中腹以上は滿足なる飯を炊く能はず、且つ水に乏しければ不得已雪を天日に曝し融かして飲料に充つ、唯山頂の一隅に金明水銀明水と稱する小き井戸ありて氷の如き清水を湧出せり、富士は元來火山なれば往古より幾度となく活動し時には熔岩を流出したることあり山梨縣に向つて流出せしもの最も長大にして遠望すれば大蛇の匍へるが如し之れを劍丸尾といふ、南面の中腹には寶永山あり寶永年間破裂の際生じたるなり又山麓には小き寄生火山幾個もあり、吉田口に近き所に富士の人穴と稱し

熔岩の中に隧道の如き穴あり、蓋し熔岩の表面固結したるとき、內部の未だ熔解せる部分が流れ去りしに因る、其附近に俗に蚯蚓石と呼びて蟲の如き形の熔岩片を產す、山頂火口の緣に今尙ほ熱氣を漏らし微かに蒸氣を發する所あり富士の南に愛鷹（あしたか）山あり箱根山と共に鼎立の姿をなす。

一九二　富士七湖……富士山の北麓に山中、河口、本栖（もとす）、精進（しやうじん）、西湖（さいこ）の諸湖あり、何れも風光の幽邃を以て名あり此等の湖は富士の裾野と之れを繞らせる山脈との間にある環狀の窪地に水が溜りて成れるものにして富士より流出せし熔岩のため遮られ、かくの如く幾多の湖沼に分裂したるなり之れに箱根の蘆の湖を加へて富士の七湖とす、山の中腹より瞰下するときは鏡の如く見えて奇觀なり。

一九三　天城山……伊豆半島の中央を東西に橫れる消火山の列にして伴二郎、八丁池、根子嶽などの諸峰秀でて五千尺に及ぶ半島の東海岸に近き所に洞笠（とうがさ）山、矢筈山など小さき整形の寄生火山を有せり、天城山は元と樅の密林てに掩はれしが、近年段々伐採して、老樹は殆んど無くなれり、山列の麓に數個の溫泉場あり北麓なる湯ヶ島溫泉稍聞ゆ、同山は御

料獵場として其名著はれ、又山葵の名産地なり。

一九四　熱海……伊豆半島東海岸にある著名なる溫泉場にして東海道國府津驛より小田原を經て十里、輕便鐵道の設あり途上、海濱に沿ひ風光明媚、且つ氣候溫暖なれば遠近より避寒のたる雲集する浴客夥し、同地には湧出口二十六ヶ所あり其内一口は間歇泉にして大湯と稱し、毎日晝夜各四回づゝ時を定めて盛に蒸氣と熱湯を噴出し其間は靜穩にして微かに湯を流がすのみ、一ヶ月に一回づゝ「長涌き」「長休み」ありて數時間に亘る噴出あり海岸に近ければ泉質は殆んど海水の如し天平寶字年間の發見に係るといふ。

一九五　修善寺……伊豆半島の中部に位せる著名なる溫泉場にして狩野川支流の畔より湧出し湧出口十五ヶ所あり就中鐲鉆の湯と稱するは溪流中に露はるゝ岩角の裂隙より湧出するを以て奇觀とす泉質は鹽類泉なり、附近の地、歷史上源氏の遺跡多し。

一九六　伊豆山・伊東・湯河原……伊豆半島の東岸には熱海の外に尙ほ溫泉の噴出少からず熱海の南なる伊東、北なる伊豆山、箱根山南麓谿澗に湯河原あり何れも鹽類泉にして浴客多し。

一九七　下田……伊豆半島の南端に下田港あり港口開きて風波荒く良港にはあらざれども米國水帥提督ペルリの來航を以て史上に著はる、近海漁業の利多く、漁船は此港に集り東京に向つて發す、又、石花菜を產すること多し。

一九八　清水……靜岡市の東なる江尻驛より近き海濱にある開港にして主に同縣產の茶を積出すに便なり元と同港が輸出を許されざりし時は茶は横濱港より船積せしが近年開放されしにより茶業の中心は清水に移れり此の地、駿河灣に臨み前に三保松原の砂洲を望み後に富嶽を負ひ風光頗る佳し、三保松原の根基の丘陵上に龍華寺あり眺望の勝地を占む靜岡市との間なる海邊に久能山あり德川家康の遺骸を葬り日光廟創設の前は、此地のみを家康の靈廟とせり、海濱より數百段の石磴を踏みて墓所に登るを得。

一九九　田子浦……清水港より東方なる同じ駿河灣の濱にして富嶽を望む景頗佳なり。

二〇〇　靜岡……駿河の國の首都にして元と駿府と稱し東海道中、名古屋に次での大都會なり人口六萬を越ゆ、古來東海道の要驛なれば壯大なる旅舘少からず漆器、竹細工、製紙等の工業あり。

二〇一　沼津……駿河灣の東北底にあり　氣候風光の佳なるを以て　避寒地として　名あり其東方に皇室の御用邸を設げらる、海岸の我入道（がにふだう）又其東方なる江の浦は海水浴と水泳場を以て聞ゆ。

二〇二　三島……伊豆、駿河の境にあり舊東海道箱根山の西口にして、これより小田原までを所謂箱根八里と號す、今は東海道鐵道より稍離るれども豆相鐵道の便あり、三島より修善寺に到る中間に韮山あり舊城趾なり、維新勤王の志士江川氏が創めて銃砲を鑄造するに用ゐたる反射爐今尚ほ存して遊覽客の杖を曳く所とす。

二〇三　濱松……遠江の首都にして東海道の要驛たりしが鐵道開通後一時は衰退せしも近年鐵道工場の設あり又山葉と稱する本邦唯一の「オルガン」工場起り其他種々の工業勃興して日を逐うて盛ならんとす。

二〇四　濱名湖……遠江の海岸にある湖にして其周囲二十三里面積六千七百町歩とす、元と完全なる湖なりしが嘗て地震のため湖岸の一部陷落し今は海水を通ぜり、之れを「今切」と稱す湖口の傍に燒津（やいづ）、舞阪の舊驛あり海水浴場を以て著はる、湖口には辨天島ありて

長橋を架して往來に便にす。

二〇五　久根鑛山……天龍川の中流に沿へる所にある鑛山にして銅礦の大なること我邦第一との稱あり古河家の所有に屬す、然れども他の鑛山の如くに製煉を施さず銅鑛のまま採りて輸出せり。

二〇六　製紙……靜岡縣は製紙を以て夙に著はる三椏（みつまた）を栽培し其れより薄き和紙を製せり之れを駿河半紙と稱す近時、西洋風の製紙を經營し原料に木材をも加へて洋紙、改良半紙等を製産す、富士製紙會社の工場最大にして大宮に設置せらる洋紙の製造高本邦内第一位に居り、年額四百五十萬圓に達す。

二〇七　園藝産物……靜岡縣は氣候溫和なれば柑橘類の結實に適し近年益々廣く栽培し苗木を改良し外國にも輸出せり、遠江の方面には糸瓜を盛に作り之れを白く晒して西洋に輸出す、主として海綿の代用となす又夏帽子製造などに用ゐらる、又薑の栽培盛にして其根を採り乾して晒し支那西洋に輸出せらる、本縣は園藝品に適するを以て興津に東京農科大學の園藝試驗場の設あり。

二〇八　製茶……本邦に於ける茶の産地は古來山城の宇治を推せども産額の夥しきことは靜岡縣を以て第一等とす其年額二百五十萬貫内地製茶の三分の一を占む、内地にて飲用するの外に布哇、米國並に歐洲に輸出せらる、清水港は專ら之れがために開港せられたる位なり。

愛　知　縣

二〇九　名古屋……名古屋市は東海道の要衝にして、昔封建制の時代には所謂尾州藩の城市にして德川家親藩を置きたり、城は三百年前加藤清正の設計に係り構造壯大にして天主閣には金の鯱の像を載せたり城址今は第三師團の司令部となれり市街は商工業殷盛しにて人口三十七萬八千、邦内三都横濱神戸に次ぐ熱田は元と管外なりしが數年前併合して益々市域を擴張したり東海道鐵道、關西鐵道、中央線、尾西線など輻湊して濃尾平野は固より本州交通の中樞となれり又熱田に築港して名古屋港と稱せり、東京西京の中央にあるを以て中京と名づけ、市内を東西中南の四區に分つ、工業の主なるもの木綿織、燐寸、麥藁眞田

を始めとし、柱時計、七寶燒、輸出向の扇子、「ヴアイオリン」「ピアノ」などあり木綿織の産額は邦内第一に位す又、車輛製造の大工場あり、教育としても第八高等學校、高等工業學校、醫學專門學校等の官立學校あり、市内電車を通じ市況殷盛なり。

二一〇　熱田……元と東海道の一驛なりしが今は名古屋の一區となれり、名にし負ふ神宮は神苑幽邃、伊勢神宮に模し、草薙の寶劒を祀る、木綿の紋染を以て有名なる鳴海、有松は熱田の東に在り。

二一一　瀨戸……陶器磁器の製作を以て有名なる瀨戸町は名古屋市の東北六里にあり電車を通ぜり、其附近に原料たる陶土の産出あり、製作品の額全國に冠たり、茶碗、皿、茶器、花瓶等の内地向き日用品の外に西洋輸出向の珈琲茶碗、洋食皿、砂糖壺などをも製し、盛に輸出せられ、この地陶業の淵源は其由來頗る古く嵯峨天皇時代より始まれり、織田信長の時に到り課税を免じ他に陶窯を設くるを禁じて專賣の特許を與ふるなど、大に斯業の發達を計りたり其後、一進一退、變遷ありしが文化年間、技術者加藤民吉なるもの肥前の有田に赴きて磁器製作の法を學び來り瀨戸の窯業に一新紀元を開きたり明治維新の際、尾州

家の保護を離れしより一時衰微せしが、其後政府の奬勵に由り外國輸出を開き今日の盛況を呈するに到れり明治二十八年以來同地に陶器學校設立せられ、徒弟を養成しつゝあり、世に陶磁器のことを瀬戸物といふは昔此地の專賣たりしに因る、年額五百萬圓を超ゆ。

二一二　常滑燒……知多(ちた)半島の常滑(とこなめ)町には一種獨特の常滑燒と稱する陶器を產す、土質珉赭色にして大なる品を製するに適す藍甕、植木鉢、便器など多し、近年は土木工事の盛なるため土管の類を盛に製作せり、傳ふる所によれば天平年間、僧行基菩薩の創めて此地に窯を開きしといふ降て文化年間、斯業に改良を加へ漸く今日の盛況に到るの途を開けり。

二一三　龜崎……知多半島の一邑にして酒、醬油等の釀造を以て名あり近來、麥酒の釀造をも初めたり、加富登「ビール」は此地の產なり。

岐阜縣

二一四　飛驒高山……飛驒の國は一帶、高原にして中央に高山の盆地あり高山町は其內に在り、四方何れより來るも地勢險惡にして交通頗る不便なり岐阜縣に屬すれども岐阜

より入るには十數里の山道を越さゞるを得ず、神通(じんつう)川に沿うて富山の平原に下るにも僅かに川に沿うて車道を通ぜり內地に於て鐵道の末だ通ぜざる所は島嶼を除いては唯飛驒一國あるのみ附近の山中に水松(いちゐ)の樹を產す古來、笏を製するを以て一位を賜はりたりといふ、今は一刀彫又は文房具などを作りて販賣せり、水松の樹の名產地たる位山は恐く乘鞍嶽のことなりといふ。

二一五　神岡鑛山……飛驒の中央より東北越中に近き所に在りて三井家の有なり、盛に方鉛鑛を採掘し其れより銀を製煉す、銀の產額本邦內屈指の位置にあり又亞鉛鑛を產し近年之れが製煉に著手せりといふ。

二一六　多治見……美濃の東部にあり陶器の製作盛なり製品は茶碗、德利、皿、鉢等の如き日用什器なれば廣く世間の需要を充たせり之れを美濃燒と稱し慶長年間の創製に係り其後文化年間に改良せられたりといふ其附近なる土岐津に陶器學校の設あり。

二一七　岐阜……濃美平野の東北寄りに位し長良川に臨む、長良川は鵜飼の名所として世に聞え屢畫題となりて描かる元來鵜飼は漁師の業にして夏の始め鮎の溯る頃、鵜を使う、

て之を捕へしむるなり鵜の首に環を篏め之れに索を附け夕刻より輕舟に篝火を焚き川を漕ぎ下りて鵜を放てば鵜は巧みに魚を捕ふ、漁師は直ちに索を引いて鵜を舟に上げ頸を壓して鮎を吐き出さしむ、毎夜四五艘つゞの鵜飼舟出づ、納涼の頃は長良川橋上見物人、山をなす近年交通の便開けてより遠近の客來り故らに舟を雇ひて漁を觀るもの多し、岐阜は復た日本紙と竹の良品を産するを以て提燈、團扇、傘を以て名あり岐阜提燈は薄き良質の紙を以て張り極めて細き竹骨を以て支へ、頗る高雅の品なれば廣く内地に賣捌け又海外へも多く輸出せり、岐阜市には名和氏の經營に係る昆蟲研究所あり。

二一八　大垣……岐阜より西にある舊城市にして其附近に柿の良品を産す、市の西北赤坂に金生山と稱する丘あり、各種の大理石を産す鼠色、黑、褐色、更紗等の種類あり、置物などを彫刻して販買し大塊は洋館の建築材、碑石、石像などを刻むに適す、有名なる養老の瀧は市より西南三里なる養老山脉中にあり瀧は大ならずと雖ども、孝子の傳説により三尺の兒童も其名を記臆せり今は養老公園として縣にて管理し鐵道を通ぜり。

三　重　縣

二一九　宇治・山田……伊勢の國の南方にあり宇治と山田は元と離れたりしが、市街膨張して兩邑相連り一市となれり參宮鐵道、龜山より分岐し津を經て宮川を渡り山田に來る山田は宮川の畔に近くして豐受太神を祀りて外宮（げぐう）と稱へ、宇治は山田の南凡そ一里の所にあり丘陵を負ひ五十鈴川の清湍に臨み天照皇太神を祀り内宮と稱す外宮内宮併せて伊勢神宮又は伊勢大廟と稱へ全國中最も高崇なる神社にして皇室又は國家に大事ある毎に　聖上親しく參拜奉告せられ或は勅使を遣はして奉告祭を行はせらる、兩宮共神殿質素莊嚴にして殊に内宮の神苑は老杉、欝蒼として俗塵を脱し森嚴を極む、古より伊勢參宮とて遠國より參拜するもの四時絶ゆることなく、市内段盛、旅館殊に多し唯惜くは旅客の來往繁きため餘り俗化して風儀宜しからず、神苑に附屬して皇學館あり專ら國學を研究する學校なり。

二二〇　二見浦……伊勢といへば直ちに二見ヶ浦を聯想せしむ、二見ヶ浦は宇治山田よ

り東南二里以内の所にあり鐵道を通ず層狀をなせる水成岩の岩礁海濱に起伏し就中大小一對の岩角相列んで峙立し之れを夫婦岩といふ、張るに七五三繩を以てす、海濱は東方に向つて開け前に伊勢の海を控へ朝暾を仰ぐの景頗る佳麗なり、近海に海苔を産す。

二三二　志摩の眞珠……志摩の海岸は岬灣出入夥しく暖流沖を洗うて水産物に富む就中眞珠の産、近來著名となれり鳥羽に隣れる英虞灣には三木本氏の特許に係る眞珠貝の養殖所ありて廉價なる人造眞珠を産出す。

二三三　萬古燒……伊勢の萬古燒は同國四日市の附近にて製する質素なる陶器にして玳赭色を帶び彩藥を施さず茶器、花瓶等を製し急須は日用品として最も廣く需要せらる元文年間沼波弄山なる人、始めて此地に陶業を起し萬古燒の元祖となれり、同國津市には別に阿漕燒なる陶器あり萬古燒に似て更に雅致あるを以て賞用せらる。

二三三　四日市……伊勢國北部海岸にあり外洋通の船舶寄港するもの多し、商況の盛んなることは却て縣廳の所在地なる津を凌駕せり其近郊に製油製紙の工場、紡績工場等勃興して工業も亦盛なり。

二三四　伊賀上野……伊賀は鈴鹿山脈と笠置山脈との間に介在する小さき山國にして中央なる盆地に上野の村邑あり元と交通不便の地なりしが關西鐵道線開通してより伊勢大和並に近江方面へ出るに便となれり附近に月ヶ瀨の梅林ありて古來雅客文人の探勝せし所なり、伊賀燒は白地の質素なる陶器なるが却て風雅なりとて歡迎せらる、多く花瓶茶器などを製し關西諸國に捌け行くなり。

二三五　鈴鹿峠……美濃、尾張、伊勢と近江大和との境上に南北に走れる山脈は卽ち鈴鹿山脈にして伊勢内海に落る川流と大阪灣に注ぐ水源との分水嶺をなし、關東方面より近畿に入るには必ず此の分水嶺を越さゞるを得ず、山脈の北部は稍や低くなりて關ヶ原となり、こゝに中仙道を通じ中央の比較的高き所に東道道の鈴鹿峠を通ぜり昔は關ヶ原の附近に不破の關、鈴鹿峠に鈴鹿の關ありき關ヶ原には東海道鐵道線布設せられ鈴鹿峠には關西鐵道線の柘植驛より近江の草津に通ずる支線あり、同山脈中に關西線の加太の隧道を穿ち、鈴鹿峠は一に關峠とも稱し昇降二里に足らざる山道にして其麓に關の驛あり、坂は照る〳〵鈴鹿は曇る間の土山」云々の馬子謠は此の峠越しの情を寫せるなり。

◎北陸地方

二二六 裏日本……北陸道、山陰道、並に奥羽地方を一般に裏日本と稱す、日本群島の内、太平洋に面せる側を表日本、日本海に濱せる側を裏日本とす、表日本は夏日雨多くして冬月乾燥し、之に反して裏日本は夏日乾燥し冬月降雪の量多し、表日本は氣候一般に溫暖交通早く開けたれども、裏日本は概して冷涼に、交通の開け遲かりし、何となく表日本は陽氣にして裏日本は陰氣なる感あり。

二二七 北陸の雪……北陸地方は一般に降雪深し、就中最も深きは新潟縣越後の高田、小千谷（おぢや）とす奥羽地方に於ては羽前の尾花澤最も深しといふ、例年十一月下旬より天候概して曇り勝ちにして絶えず雪を降らし十二月中旬より三月初旬までは降雪殆んど融ることなく、彌や上に積りて三四尺より七八尺乃至一丈に達す、屋上に積る雪は往々人家を壓潰すを以て、降るに隨つて卸すなり、卸したる雪は不得已、道路の中央に積み上げ、恰も城壁の如く高くなり其上を歩むときは二階建の家屋よりも高く階を刻して人家の入口に降

り又、二階の窓より直ちに、歩み板を渡して出入するもあり、家屋の建築は積雪に適するため二階を高くし窓を少くし軒は深く出し軒下の幅一間に及ぶ、通行人は此の軒下を歩むを以て市街地にては殆んど傘と下駄の必要なき所あり、屋上の雪が直ちに店頭に辷り落ちざる爲め屋根は道路に向けて傾斜せしめず、屋上には瓦を置かず、板を以て葺き、其上に石を列べて之れを押へ、丸太を繋ぎて登るに便にせり、積雪の時期は屋内一般に淡闇く、防寒のため毎戸必ず爐を築き、室内には炬燵を設け、蔬菜の類は冬の初めに購ひ、多くは穴倉の内に貯へて冬籠り中の食料に充つ、かくて冬季は概れ爐邊に置酒、談笑して日を送り、僅かに副業を營むのみ、山野は齊しく銀世界と化し林樹電柱の頭まで沒することあり、田となく溝となく、自由自在に通行するを得、雪の軟なる所は底の廣き鞋を穿ち、車馬は用ひられず、橇又は車輪を取り去りたる車臺を雪上に牽きて荷物を運搬す、車夫は橇引となり、紳士役人醫師など橇に乘りて往來す、近來洋風の「スキー」を用ゐて雪中運動を試みるもの多し、氣候最も寒き時は雪は細くして固く、恰も白砂を蒔くが如く衣服に降り懸るも濡れることなし故に極寒は傘を用ゐるに及ばず、四月に入れば天漸く霽れて青空を望み積雪追

々消えて草木は一齊に發芽し、梅も櫻も一時に開花す、かゝる光景は到底他所に見る能はざるところなり雪國の社會人事は自ら他地方と異なること多く、北越雪譜などの名著ありて雪國の風俗を巧みに描寫せり。

二二八　日本海沿岸の砂丘……日本海沿岸は冬月風波强くして海濱より吹き揚ぐる砂は積んで丘をなす、之れを砂丘といふ、砂丘は何れの海濱にも見るものなれど日本海沿岸には殊に良く發達し海濱に平行して高き堤の姿をなす、山陰道九州の海岸も亦盛なるが殊に越後の海岸には甚しく、信濃川の如き大河と雖ども河口は之れがため漸次、東北に向つて移りつゝあり河口の推移を防くため莫大の工費を要すといふ。

二二九　北陸の鐵道系……北陸道には海岸線に平行して縱走せる鐵道線路あり、西南は越前の敦賀より東北は越後の村上に達し、福井、金澤、富山、新潟、長岡の大都會を連絡せり、本線は直江津に於て信越線に、新津に於て岩越線に、敦賀よりは南に折れて東海道線の米原（まいはら）に連絡し以て他の幹線に通ず、直江津以西を北陸線、以東を北越線と呼べり。

福井縣

二三〇　敦賀……敦賀港は越前の西部なる灣内にあり日本海沿岸の最良港にして、開港場たり東海道米原驛より北陸線によりて連絡し、日本海航路の要衝にして殊に西比利亞のウラヂヲストックに渡るの要津たり西比利亞線に由り歐洲に赴くには此港より出帆するを最便利とす、東京大阪等の大都會より獨逸伯林に到るまで海陸連絡汽車汽船切符を發賣す敦賀の附近に藤島神社あり南朝の忠臣新田義貞を祀れり。

二三一　若狹塗……若狹國小濱町にて製する漆器にして黑、綠、赤、青の彩漆を以て塗りその上に金銀箔を散らして獨特の紋樣を現はせるものなり箸、函類、書棚、文庫等を製す質も亦堅きを以て廣く賞用せらる其起源明かならざれども德川時代に發達したるものなる可し元と存星の遺風を模したるものなりといふ。

二三二　羽二重……白無地の絹織物にして元と禮服地として內地に用ゐられたるが、近年は團扇、「ハンケチーフ」、造花材料等各種の美術工藝品に用ゐらる、而して羽二重の大

部分は北米合衆國を初め西洋諸國に輸出せらる、最近日本全國の羽二重輸出額實に六千萬圓に上り、其内、福井縣の產を以て第一とし石川縣、富山縣、福島縣之れに次ぐ福井縣内にて福井市の附近を主とし、大野、勝山、鯖江、武生等之れに次ぐ輸出向の羽二重は皆な大幅にして大抵二十「ヤード」を一卷とす歐米にては之れを染め又は加工として婦人服並に諸般の美術工藝品となす、本縣に於ける羽二重生產の由來は比較的に新しく明治四年頃より漸く端緒を開き同十八年より輸出品製織に意を注ぎ始めたり、しかも二十一年までは練白の方法獨立せざりし位なり、今や年輸出額二千萬圓を超え、縣内に檢査所を設けて製品を檢査し專ら輸出を奬勵せり、羽二重と共に奉書紬の產ありて昔は羽織地に用ゐられしが今や廢れて殆ど顧られず。

二三三　奉書・烏の子……共に日本特有の紙にして殆ど本縣の獨占なりとす、奉書は純粹の楮皮を雪の如く晒して製し、專ら典禮に用ゐられ、烏ノ子は絹糸を混ぜて漉き質强靱なれば紙幣證券の料紙として最も妙なり、奉書は聖武天皇の時代より、烏ノ子は慶長年間より製し始め幕政時代には諸侯より厚き保護を受け色紙短册等は朝廷より御用を命ぜられた

り明治維新當時も金札用紙の抄造を命ぜられたり。

石川縣

二三四　白山……北陸第一の高山にして昔は富士、立山と共に皇國の三山と呼ばれしことあり、山容南北に伸びたる一大嶂壁の觀を呈し、中腹までは中生層に屬する水成岩なれども、頂上に近き所は火山性なり、山頂三峰に分れ中央なるを御前嶽、北を大汝（おほなんぢ）、南なるは稍や離れて別山と稱す御前嶽最も秀でて海拔八千八百六十七尺といふ、御前嶽と大汝の間に翠（みどり）ガ池、千蛇（せんじや）ヶ池などの圓き池あり多分火口跡なる可し、冬月積雪の深きを以て盛夏といへども殘雪絕ゆることなし、高又山植物の珍種に富む、白山に登るには越前福井より勝山、谷峠、牛首（うしこべ）を經て山麓の市ノ瀨溫泉に由りこれより山に懸る、又金澤より霍來（つるぎ）、女化（おなはけ）原（がはら）を經て山に懸る、御前嶽の中腹に彌陀ヶ原といふ高原ありて小き室堂（おろだう）を建て雨露を凌ぐに便にす、八月上旬山客少からず。

二三五　九谷燒……加賀の國、獨特の陶器にして赤色の釉藥に金箔を交へ其色頗る濃艶

なり、茶器を主とし花瓶、置物、杯、食器等之れに次ぐ、製作は分業せられ、生地は同國江沼郡山代村等にて主に製し金澤、大聖寺、小松、寺井等にて繪畫を施して燒くなり、九谷燒は其創め寛永年間大聖寺の城主前田氏が其臣をして江沼郡九谷に窯を設けしめたるを起源とす、當時肥前有田の製法を學びたりしにより自ら同地の風あり、當時の製品は今や古九谷と呼べり其後、文化年間に到り繪付け釉藥の法を改良して現代の如き濃艶なる著色の品となれり。

二三六　硬質陶器……加賀の金澤市には近年硬質陶器と稱する一種新機軸を出せり、質堅牢にして美しき白色を呈し、釉藥を施したる表面頗る滑かにして食器などに用ゐて快し、紋樣の著け方も主に西洋風を模したれば洋食皿、珈琲器等に最も適し、船舶、旅館、「ホテル」、病院、洋食店等に歡迎せられ、創立僅々十年に過ぎざるも顯著なる發展を見るに到れり。

二三七　金澤……北陸、山陰を通じての最大都會にして人口十一萬を超え、邦内屈指の都市なり、昔德川幕政の時代には前田家百萬石の地領を有せる城市にして其威力四隣を壓

したり、維新後、市勢一旦衰微せしが鐵道の開通、工業の發達と官衙兵營、學校の新設等により近時再び隆盛に復したり、石川縣廳の所在地たるの外に第九師團司令部、第四高等學校、醫學專門學校、工業學校等あり、市内の兼六公園は本邦有數の名園とす。

二三八　輪島塗……石川縣は漆器製造高を以て邦内第一に居り、年額百萬圓に垂んとす縣内に於て金澤塗、山中塗、輪島塗の三樣あれども輪島塗を以て最も著名とす本縣能登の國輪島に產す、一種の粘土を用ゐて生地を固め又漆器面に淺き彫刻を施し之れに金泥漆を塡め所謂沈金彫なるもの特色とす其昔、應永、寛文の頃紀伊根來塗を學びて、こゝに製作を始め、後藩の保護を受け漸次技術進歩して今日の盛況に到れり、製品は日用家具の外に裝飾品、硯箱、書棚、重箱、花筒など主なり。

二三九　羽二重……石川縣は福井縣に次ぎての羽二重產地にして、明治九年創めて京都の織機を學び本縣内に傳習せしめ同二十年輸出羽二重を織り始めたり初めは家庭工業なりしが漸次工場組織となり福井縣の重目物に對し、專ら薄き輕目の品を產し世界的に好評を博せり本縣には又、紋織、斜子、絽などを產し其總額一千萬圓を出入す產地は金澤市を中

心とし其近郡に分布せり。

富山縣

二四〇　立山……富山縣の東方に聳ゆる高峻なる山岳にして南北に伸び黑部川の峽谷を夾んで信濃の白馬山と對峙せり山勢嵯峨、東に向つて急峻に、西に向つて緩漫なる傾斜を呈し富山の平野に連れり、最高峰を雄山に呼び海拔九千尺に達し其南に淨土山、大鳶、小鳶、北は別山、劍嶽に連る、山體は花崗岩なれども中腹には火山性の部分あり地獄谷といふ所には大小數口の硫汽孔を開き盛に蒸氣と硫黃瓦斯を噴出せり又大鳶山の麓には立山溫泉と稱する硫黃泉を湧出せり雄山は最も峻嶮にして一ノ越より五ノ越に到る難所あり、狹き頂巔に雄山神社を祀る、八月中旬北陸諸國より登山者少からず、中腹なる彌陀ヶ原には室堂（むろだう）の設ありて雨露を凌ぐに便せり、日本海に面せるを以て冬月の降雪非常に深く盛夏を過ぐるも殘雪尚ほ消えず、山頂よりの眺望頗る雄大なり、登山の順路としては富山より山麓の芦峅寺（あしくらじ）に到り中語（ちゅご）と呼ぶ案内人足を雇ふて、發し九里にして室堂に達し翌日頂上に擊づる

を得、芦峅寺（あしくらじ）より常願寺川の水源に沿うて十里なる立山溫泉に泊り其より登るも可なり溫泉より佐良（さら）峠、針ノ木峠を踰え黑部川の峽谷を涉りて信濃の大町に出づる路もあり立山の南に藥師嶽、黑嶽、鷲羽嶽等あり何れも飛彈山脈の樞軸とす交通、登路極めて不便なり。

二四一　富山の賣藥……富山縣廳の所在地なる富山市は藥賣の行商を以て天下に聞ゆ同市に於ける各種賣藥業者凡そ一萬人、年額三四百萬に上る、今日にてこそ世上に數多の賣藥製造業者あれども古へは殆んど全國獨占の姿なりき賣藥中最も古くして最も有名なるは反魂丹と稱する品にして藥舗の最も盛大なるを廣貫堂とす、反魂丹がかく名聲を博せしは古き由來あり元祿三年藩主前田正甫氏、參勤のため江戸城內に居りしとき偶々諸侯の中にて一人の急病者を出せしが正甫氏、懷中より一服の反魂丹を出だし服用せしめしに立ろに苦痛を醫したれば評判は忽ちに城中に響き渡り、引て諸藩よりも所望せられ、各藩領內に行商を派遣することとなり、前田藩主は之れがため奉行を置き之れより徵收する賣藥稅は藩の屈指の財源となるに到れり明治十五年賣藥印紙稅を設けらるゝまでは年額六百餘萬圓に達せしといふ今日にては內地は無論、臺灣朝鮮支那の內地まで普及せるの勢なり。

二四二　高岡銅器……本縣は銅器を以て名あり殊に高岡市を以て主産地とす　銅を鑄型に入れ之れに繪畫を彫刻して製す其色澤、褐色を帶びて雅致あり之れを宣德色と稱す製品の主なるものは火鉢、燭台、水盤、藥鑵等の實用品並に裝飾用置物等とす、其昔慶長年間前田利長氏此地に封ぜらるゝに及んで銅鐵器の製作を始めしたるが起源にして爾來益發達して今日に及べり。

二四三　魚津の蜃氣樓……魚津は富山縣の東方海岸にある邑にして、其海上に屢々蜃氣樓の現はるゝを以て世人の注意を惹くこととなれり蜃氣樓とは、天氣晴朗の日、大氣中の水分の作用により海上遙かに人家山林などの光景を現はすものにして昔は伊勢の內海に於て現はれたりとて蛤の口より一種の氣を吐き出だすものと信じたり、其原因に就ては未だ滿足なる說明なし。

新　潟　縣

二四四　妙高山……信濃の黑姬、戸隱山に連なれる消火山にして富士火山帶に屬す、山

容宛も富士の如し最高七千餘尺、東麓に赤倉溫泉、燕溫泉等あり山の構造は重複火山にして大田切、小田切の兩火口瀨ありて東に流れ關川に入る。

二四五　彌彥山……後越の海岸に近き所に位し三島郡と中蒲原郡に跨り山頂二峰に別れ東なるを多寶山といひ西なるを香語山といふ最高二千八十餘尺頂に彌彥山神社を祀り夏日登拜客多く途中に茶店などの設あり、附近は一帶に平地なるを以て海陸の眺望殊に佳し。

二四六　米山……越後中央の海岸に近く聳ゆ、標高三千二百尺、火山性なり、西麓海岸に街道ありて米山峠といふ山勢緩漫なれば、山の中腹まで稻田開け居り頂に米山藥師堂あり。

二四七　親不知……越後の西部、越中に近き所は飛驒高原の盡端にして峻嶺延びて海濱に達し截然として屹立す、舊の北越街道は其山脚を通じ波打ち際に接す滿潮のとき、海上の荒れるときは激浪山脚に迫りて街道を沒し旅客は巖壁の窪みに身を托し辛して通過することを得、若し一歩を誤るときは親子相失ふの災に陷ることあり故に親不知、子不知の險と呼び古來旅客の懼れし所とす今や山腹を穿ちて安全なる新道を開き又近年鐵道の開通を

見るに到れり。

二四八　越後の石油……越後と謂へば直に石油を聯想す可し實に越後は本邦石油の大部分を產せり近年秋田、北海道、臺灣並に樺太にも追々石油業興りたれども其全部を擧げて尙ほ越後一國に及ばざること遙かに遠し、越後に於ける油田の主なるものは、北にありて新津、西海岸にありて尼瀨、中央にありて長岡の東山及び西山、西南にありて頸城地方とす、經營者としては日本石油會社を最大とし寶田石油會社之れに次ぐ越後に石油の產することは遠く天智天皇の御代より知れり所謂「燃ゆる水」の名を以て同國七不思議の一なりき、これ今日呼ぶ所の原油にして軟き岩質の丘陵、溪谷より流出し、可燃性の惡臭ある液體なり、而れども「燃ゆる水」の利用は世人の顧るものなく一種の臭水として閑却されたりしが明治維新以後西洋の燈器（ランプ）燈油を用ゆるの風流行し內地の原油を精製して石油を得るの事業勃興したり最近に到り他縣に油田の發見さるゝと電燈、瓦斯燈の流行すると因り幾分燈火用石油の需要を減じたりと雖ども、一面に新用途新販路の擴張ありて今日尙ほ年額一千餘萬圓の輸入を仰ぎて內國產の不足を補へり、從前は手掘並に普通の機械

掘にて油井を掘りしが近年に降りては新式「ロータリ」法を應用して更に產油の額を增すに到れり、汲み取りたる原油は先づ鐵管を以て工場に導き釜に入れて蒸餾し燈火油の外に輕油と重油とに分離し燈火石油は更に硫酸と苛性曹達にて洗滌し始めて市場に出るなり、輕油並に重油も各種の用途あり殊に重油は石炭に代へて機關に燃やし工場船舶等に採用せらる、新潟縣に於ける石油一ヶ年の產額約七百萬圓に昇り、製油工場の主なるもの長岡柏崎、新津、沼垂、新潟、直江津等に在り。

二四九　佐渡金山……古へより金銀を「佐渡の土」と俗稱し金銀の產は佐渡を以て代表せられたり佐渡の金山は同島相川町と其附近にありて佐渡鑛山並に北立鑛山と稱し目下三菱會社の經營に係れり其昔天文十一年越後の一商人が一夜、山中に紫光を發するを認めて此鑛山を發見せりといふ慶長、元和の頃、最も隆盛を極めたり明治維新後政府の經營に屬し宮內省御料局の管理となり明治二十九年拂下げられて三菱の手に歸せり、產するところ金を主とし銀銅之れに次ぐ其產額年八十萬圓に達す中大部分は金なり現今朝鮮、臺灣を除きては內地金山の屈指の位置に居る。

◎近畿地方

二五〇　近畿……昔、皇居が京都に在りしとき山城、大和、河内、和泉、攝津の五ヶ國を以て畿内五國と稱せしことあり、近畿とは卽ち畿内に近き地方を意味するなり。

二五一　淀川……近畿地方に於て最も廣大なる流域を占むるは淀川なり、淀川の本流は長さに於ては僅かに二十里に過ぎざれども支流を合算すれば千百里を超えて利根川の次に居り其内舟筏を通じ得る里程を合するも百六十八里に及びこれ亦内地屈指に居る、支流の主なるもの宇治川、桂川、加茂川、木津川、池田川等にして宇治川は其源を琵琶湖に發せり、下流は神崎川、中津川、安治川、木津川に分派し大阪市を貫き水運の便を與ふること多大なり、大阪より伏見に至る間、約十三里、能く汽船を往復せしむ。

二五二　琵琶湖……琵琶湖は本州中央に於て一大盆地をなし湖水の周圍六十里、面積六十九萬二千町歩、水深九十八米突を算し、湖水面が海面より高きこと八十六米突とす周圍沿岸元と湖底なりし所が露れて低地となり田圃開け村邑多く連る湖尻は瀨田川の急流となり

りて宇治川に落ち、鹿跳（しゝとび）、米洗（こめかし）の景あり、瀨田川の西岸山麓は螢と月見の勝地として聞え紫式部源氏物語著述を以て名ある石山寺は其麓にあり。

二五三　紀伊山系……近畿地方の中にて最も大區域を占むるは紀伊山系なり、紀伊半島全部を横切り東は伊勢の南部より志摩の半島を形成し伊勢内海を隔てゝ遙かに赤石山系と連絡を取り西は淡路の南半より鳴門海峽を越して四國山系と相呼應せり蓋し日本南部山骨をなせる大山系の切斷されたる一部分にして山脈は東西に走り縱谷をなせる紀ノ川は東西に流るれども山系を横斷せる新宮（しんぐう）川は曲折甚しく深峽をなして交通の便を與へず、爲めに紀伊山系は古來熊野と稱し僻陬未開の地域として世に知られたり、然れども雨量の豐富なると氣候の溫和なるを以て森林の繁茂盛にして杉の良材を産するを以て名あり。

二五四　近畿地方鐵道の特徵……近畿地方は幹線鐵道の縱横せる外に短距離の支線網の如く連絡せり、此等の支線の多くは日清戰役後急に勃興敷設せられたるものにして生産貨物の運搬を目的とせず概ね神社佛閣の參拜客の便を計りたるものなれば、寧ろ電車鐵道を布設するの得策なるに、民間事業家が未だ鐵道の經驗に乏しかりしため悉く普通の

軌道を布設したれば、忽ち損失を招き經營困難に陷り幹線鐵道に併呑されるに至れり。

滋賀縣

二五五　比叡山……滋賀縣と京都府との間に跨り高さ二千五百尺、琵琶湖畔の阪本村より直路一里半にて登り得可く、山頂は四明岳と稱し眺望佳なり中腹に延曆寺あり天台宗の總本山にして建築は唐の風を模し大門より低く下りて本堂あり本堂は根本中堂と稱す永代燈明あり桓武天皇が點ぜられて以來一千有餘年間、未だ燈火を絶やさゞりしといふ、昔は延曆寺の外に寺坊數十山中に散在し一山の勢力四隣を壓せし時代あり延曆寺は帝都を山城に移されたるとき鬼門の方を守護するため建立せられたるものなりとぞ。

二五六　伊吹山……岐阜縣の境に聳ゆる名山にして、高さ五千尺全山殆んど石灰岩にて成り樹木極めて少し、東海道線長岡驛より登るを便とす伊吹山は此の近道の高山なれば元來植物の種類に富めるが上に、德川幕府時代には藥草を栽ゑしことあり、されば邦内他に絶えて見ざる珍草を產せり。

二五七　近江八景……琵琶湖の南部湖畔に沿うて風光明媚の地點少からず古來八景の名を以て算へらるもの三井寺、石山寺、唐崎の老松、粟津ヶ原、瀨田川の長橋、矢橋の渡船場、堅田等あり。

二五八　近江商人……古來滋賀縣人は行商として邦内諸國を巡旅し經濟上成功せるもの少らず之れ近江商人として名を博せる所以なり。

京都府

二五九　山城盆地……山城の國は所謂「山河襟帶自然の城」と稱し東西北の三方は山嶽を以て繞らし内に平野あり唯南方のみ開けて遠く宇治川の流域に續く、地勢明かなる盆地にして太古は琵琶湖の如き湖沼たりしを、湖尻は漸次廣がりて水面は低くなり遂に今日の如き盆地となりしこと想像に難からず、盆地の南隅に今尙ほ巨掠(おぐら)ノ池ありて舊湖沼の殘滴なりとす比叡山頂より瞰下すれば平坦砥の如き地勢は南に向て緩かに傾斜し最も低き窪地に湛ゆる水は卽ちこの巨掠ノ池にして、宛ながら地文學上の變遷を語るに似たり盆地の中央

より東に偏して加茂川あり西に寄りて桂川流れ盆地の南隅に會合して淀川を形成す、京都盆地と大阪灣沿岸平地とを連絡する所、咽喉の姿をなし天王山之れを扼して戰略上の要衝となれり。

二六〇　京都……今は京都盆地の東方に偏し加茂川を夾みて東西に擴がり、川の西を洛中、川の東を洛外と呼ぶ、一千有餘年前桓武天皇の御代、奈良よりこゝに奠都せられし以來明治天皇御即位まで引續き帝都として皇居の在りし所とす當時、支那の唐の都に倣ひ市區整然として碁盤の面の如く街路は東西南北に通じ皇居は北の正面に位地を占め東西の主要道路は北より算へて一條二條より九條に到り、其間に小路を夾む南北の主道は皇居の正面に朱雀大道あり、今日にては都の西部並に南部は田圃に化し市の最南部停車場の在る所は昔の七條なり、市の周圍には社寺殿堂大伽藍且つ名所舊蹟夥しく散布せり、殊に加茂川の東側は東山と呼び、丘陵近く接し、北より算へて平宮神宮、南禪寺、眞如堂、永觀堂、清水寺、祇園八阪神社、知恩院、大谷、黒谷、泉湧寺、三十三間堂、豐國寺、天德寺、東福寺、等相列び市の北郊には金閣寺、銀閣寺、上加茂、下加茂神社、相國寺、大德寺、西北には北野天滿宮、平

野神社、仁和寺(御室)、妙心寺、嵯峨、清涼寺、天龍寺、少しく離れては嵐山、高雄、栂尾の名勝あり、市の南には東寺あり此等寺堂の多くは佛教各派の總本山たり、市の中部に東西本願寺建てり、加茂川に架せる三條、四條、五條の三橋は昔より名橋として世に聞ゆ、皇居の跡は京都御所と稱し即位の大禮は今後も尙ほ此處にて行はる、別に市の西隅に二條の離宮あり、京都帝國大學、第三高等學校は市の東北なる吉田に、繪畫專門學校、高等工藝學校は市の中央に位せり市の東南、深草に第十六師團の衞戍地あり。

京都は明治二年の遷都後一旦衰微に傾きしが其後、美術工藝と學術宗教の中心として市況を復活せり工藝の中にて特に一頭地を抜きたるは西陣織、友禪染、刺繍の類にして全國絹織物の首班を占め外國輸出品も少からず清水燒、粟田燒、漆器、銅器の如きもの必しも產額は多からざれども頗る著名なり、一般工業には煤烟を避くるため火力を用ゐるを禁じ琵琶湖より導きたる疏水により發電せる水力電氣を供給せり、水力電氣並に電氣の利用は恐く本邦中率先なりとす、京都は名勝史蹟に富むを以て四時遊覽客絶ゆることなく就中、嵐山、嵯峨、御室、祇園の櫻花、高尾、栂尾、清水寺、天德寺(通天橋)の紅葉、加茂川原の

納涼の季節は最も賑かなり、伏見は京都の南郊にありて市街始んど連絡し淀川通ひの汽船、こゝまで溯航す、伏見稲荷は東山の南端丘陵に倚り參詣者極めて多し、七條停車場は交通の結接點にして東海道線より山陰線、奈良線に分岐し、京阪間及び市内電車之れに輻輳せり現時人口約四十五萬を算す。

二六一　宇治・桃山……京都市より東南三里半、宇治川の畔に出づ此邊一帶を宇治と稱し古來、茶の産を以て名あり産額は靜岡に次ぐと雖ども品質の佳良を貴ぶなり、宇治、木幡、池ノ尾あたり茶園連り主に玉露を製す、川には古風なる宇治橋を架し北岸に黄檗山、三室戸、南岸に平等院あり殊に平等院の鳳凰堂は藤原時代建築の模範として尊重せられ、歴史美術家の激賞して措く能はざることろなり、國寶として保護せらる、川の上流は瀬田川と呼び其間に鹿跳、米洗の急湍あり古歌に名を存せる喜撰の遺跡は宇治橋より稍下流にあり宇治より山階に通する途中に醍醐寺、法界寺あり之れ亦建物は國寶に編入せらる、桃山は宇治の西北、伏見との中間にして豐臣秀吉邸館の跡は今や全く荒廢して僅かに瓦片を土中に發見するに過ぎず近時其附近に明治天皇及び昭憲皇太后の陵を築かれたり。

二六二　笠置山……後醍醐帝の行宮として三尺の兒童も其名を記臆せる笠置は府の東南隅、奈良、三重縣に接する所にあり花崗岩の丘陵地にして木津川の清峽其麓を流れ今は關西鐵道其崖下を通ず、丘上僅に小祠を祀るのみ歴史家の懷古低徊去る能はざる所なり。

二六三　丹波……丹波は一帶高原にして中高の山嶽鬱結し、水流彎曲、小さき村邑其間に散點して交通不便なりしが今は舞鶴並に山陰兩鐵道線縱横に横斷せり國内東北半は京都府、西南は兵庫縣に屬す有名なる福知山は京都府に、篠山は兵庫縣に入れり。

二六四　舞鶴……丹後の海岸は岬灣出入錯雜し舞鶴は其一なり、灣内水深くして巨舶を繫ぐを得、同地は元と山陰の一小港なりしが日清戰爭の後、灣内の東部を軍港となし鎮守府を置かれたり日露の海戰に際しては重要なる根據地たりき。

二六五　宮津……丹後の中央なる小港灣にして昔は俗謠にさへ謳はれたり、町の西端に三景の一として聞えある天の橋立あり長さ一里許りの沙洲、灣口に横はりて青松繁茂せり、砂洲は西北岸より東南に伸び、其切れ口に文殊堂あり沙洲の根基に成相山の寺堂あり。

奈良縣

二六六　奈良盆地……奈良は一の盆地にして東、笠置山脈、西、金剛山脈、南、紀伊山系を負ひ北は丘陵地を夾みて京都盆地に接す、神武天皇創めて都を奠められたる橿原は盆地の中央に在り、爾後歷代の帝都は概してこの盆地内に置かれ最後奈良朝に到りて最も規模を擴張せられたり今の奈良市は當時の都會の一小部分に過ぎず、盆地内に御陵墓、古刹、舊蹟、名勝、多く散布し古代の往還は縱横井然として通じ今尙ほ村落は之れに沿うて散在せり。

二六七　奈良……奈良盆地の東北隅に在りて奈良朝時代帝都の一部分を殘すものなり今は人口僅かに三萬餘、市の東は直ちに春日山、若草山(俗に三笠山)にして其麓に春日神社の杉林、猿澤の池、興福寺、東大寺あり、興福寺は東大寺と共に聖武天皇の勅願にて立てられたりしか兵火のため大部分廢頽に歸し僅かに其一部分を再建せしもの金堂、五重塔、南圓堂、北圓堂あり、東大寺も亦再建の部分多く大佛殿巍然として聳え、南大門二月堂、三月堂、正倉院、鐘樓之れを繞らせり、殊に正倉院は聖武天皇崩御の際下賜されたる御物を悉皆保存せるものにして構造、粗笨なるにも係らず藏ずる所の玉帛樂器、香木繪畫の類一切汚損せず、且つ祝融などの災禍を免れたるは天祐といふ可し、千有餘年前の文化を眼前に觀るを得可く、恐く世界最古の保存品たる可し、今は國寶として勅封秘藏せられ史家、美術家の最も尊崇する資料なり、市内に帝室博物館、女子高等師範學校の設あり又盆地内の交通の中樞となれり。

二六八　法隆寺……奈良市より西南三里餘にあり、推古天皇御代の建築に係り本邦中恐く最古の建物なり、金堂、經堂、五重塔など何れも古色掬す可し且つ莊麗を極む金堂には佛教傳來の當時、輪入したる印度佛、玉蟲の厨子、名匠の作品、壁畫等何れも美術家の垂涎禁ずる能はざる所なり、寺の周圍は一部落をなし法隆寺村といふ、同名の停車驛あり。

二六九　吉野……吉野とは奈良縣の南部、和歌山縣内へ凸入せる山地一帶の稱にして、紀伊山系に屬し山巒群集蔚結し交通極めて悪し、山地の北側は吉野川東より西に流れ、山中の諸溪は多くは南に流れて新宮川に集り南海に落つ、後醍醐帝の行在所たりし吉野宮、帝の御陵(塔尾陵)正行の遺跡として聞えたる如意輪堂、千本櫻の名所などは凡て山地の北邊に

集り吉野川より遙かに一里半の所にあり、之れより奥に山上嶽、東に大臺原山あり山上嶽は役行者小角を祀り關西地方より登拜者頗る多し、其れより彌山、釋迦ヶ嶽を經て紀伊熊野、本宮に出づるを得、櫻の名地は今は公園として保護せられ花季、遊覽客雲集す、南和鐵道に吉野口なる驛あり之れより下車して川を渡り山に懸るを便とす、吉野は杉の老木多く良材を出だす。

二七〇　畝傍……神武天皇の御陵を以て名の聞えたる畝傍山は、奈良盆地の中央にある小丘にして山頂に住吉神社を祀る、御陵は同名の停車場より南半里にして山の東北に在り地は平夷なれども翠松欝茂し境内白砂を布き、繞らすに濠を以てす構造固より質素なれども森嚴高崇參拜者自ら襟を正し首を垂る、橿原都趾に橿原神社を祀れり今は寂寞を極む

二七一　多武峯……盆地内名勝の一なり奈良鐵道櫻井驛を距る南方二里、吉野川に出づる峠を通ず、談山神社あり藤原鎌足を祀る社殿壯大ならざるも結構綺麗、關西の日光廟なりとの稱あり秋季霜葉見事なり、附近に三輪明神、長谷寺などあり。

大阪府

二七二　大阪……大阪灣に臨み淀川の分派を夾み人口百廿五萬、本邦第二の大都會にして世界に於ても有數の都會なり豊臣秀吉築城以來急に發達して瀬戸内海並に四國九州方面日本海沿岸までの交通商業の中心たりしが日清戰役後工業頓に發達し臺灣、南支那且つは印度地方への貿易の樞軸を握るに至れり、工業の主なるものは綿絲紡績及び綿布にして數多の大工場、川に臨みて建ち、鐵工場、製紙工場、製油工場、燐寸、化學藥品、煉瓦「セメント」工場等最多く其他百般の工藝輻湊し煙突林立して煤煙を吐き、淀川の下流なる安治川には瀛船、帆船、所狹きまでに繫がれ發著織るが如し然れども沿海は水淺きを以て巨船は皆神戸に碇泊せしが近年築港、竣工の結果、是等の巨船を容るゝに到りたれども惜ひ哉臨港鐵道不完全なるため築港の效力を發揮するに到らず淀川は從來氾濫の憂多かりしかば別に分流を開鑿して餘水を之れに放流することゝなせり之を新淀川と稱す市内を東西南北の四區に分ち街道は一般に整然たり近年市内に電車を通じ市の境域を擴張せり市の東北に

秀吉築城の壁濠嚴然として存し今は第四師團司令部と造兵廠を置き川の對岸に造幣局あり市の東南に聖德太子の建立に係る四天王寺、並に仁德天皇の宮趾たる高津神社あり、教育機關としては高等工業學校、高等商業學校、醫學校の設あり、陸上交通としては東海道鐵道の外に舞鶴線、南海線、關西線、大和線、山陽線並に神阪、京阪、電車の起點となれり。

二七三 楠氏遺跡……府下河内國は楠木氏の遺跡に富む、有名なる千早城は大和、河内の境なる金剛山の西側中腹にあり今は城砦の跡を認めず山麓に千早村あるのみ、四條畷は同山脈北部、生駒山の西麓にありて小楠公神社を祀れり楠氏秡別の櫻井驛といふは、河内の北方、淀川の畔、山崎、高槻間に在り孤松の根に小碑の建てるのみ。

二七四 堺……堺は和泉の國の最大都市にして大和川の出口に臨み、人口六萬を超ゆ昔は貿易港なりしが今は大船を繫ぐ能はず、刄物、段通等の名産物あり、この附近海濱の風光佳しく濱寺の公園あり堺と大阪との中間に住吉神社ありて參拜者常に絶へず其海濱の燈臺は最も古風を存し俗に住吉の高燈籠と呼び繪畫に見るところなり。

二七五 箕面……大阪市の北方四里にして池田の釀酒地あり更に一里にして箕面山あ

り山中名瀑ありて夏は納涼避暑に秋は紅葉に好し今は公園となし市より電車を通じ曳杖の客四時共に絶へず。

和歌山縣

二七六 熊野……和歌山縣は紀伊の大部分を占め、海岸を除きては山嶽重疊し交通に不便に極む、新宮川、奈良縣吉野の奥より發し山嶽の間を穿ちて南流す、峽谷にして殆ど舟筏を通せず兩岸峻嶺をなす而して森林は蓊鬱として多く良材と薪炭を產す之れを熊野地方と呼ぶ、川に沿ふて新宮、本宮の兩祠あり熊野權現を祀る、昔は行幸のありし神社なれども交通の不便なるため今は參詣客少し、川の途中に滝八丁といふ所あり絶崖嶂立深潭を夾み水勢緩漫なり、本邦二大瀑の一なる那智瀧はこの山中にあり落下五十丈と號す傍に那智山普陀落山の名刹あり西國卅三所順拜地の札所として善男善女の間に謳歌せらる、何れも氣候溫和風光明媚なり。

二七七 和歌山・和歌ノ浦……和歌山市は紀ノ川（吉野川の下流）の出口に臨み人口

八萬に近く德川幕政の時代には親藩を置かれ紀州侯と呼ばれたり、紀州「ネル」といふ木綿織の創業地は當市なれども今や移りて京都大阪に却て盛なり市の海岸に和歌ノ浦ありて風光明媚を以て響き、背後の丘上に西國巡拜地一番の札所なる紀三井寺あり眼下に和歌ノ浦を控へ眺望頗る佳し。

二七八　潮岬……紀伊半島の盡端にして强度の燈臺ありて熊野沖を照らし、又無線電信局ありて遠洋の航船と通信を交換せり此邊復た捕鯨業の盛なる所とす。

二七九　高野山……紀伊といへば直ちに高野を聯想す高野山は和歌山縣の北部、奈良に近き一帶の山岳にして空海上人の開山に係り山頂に靈廟あり、金剛峰寺(こんがうぶじ)其他數多の寺坊連なり別天地をなす靈廟の傍に廣大なる墓地あり累代信仰者の骨を埋む眞言宗の總本山にして大學林の設あり和歌山市より十八里、吉野川沿岸の橋本より四里にして登るを得、昔は女人禁制とて一切婦女子の登山を許さゞりき。

兵庫縣

二八〇　兵庫縣の境域……日本全國中兵庫ほど複雜なる境域の縣は他に無し、播磨、但馬、淡路三國の外に丹波、攝津の一部分づゝを領せり、卽ち近畿地方と山陰、山陽、南海の三道に跨れり。

二八一　神戸……人口三十八萬を算し名古屋市と殆んど同じく本邦大都會中の第六位に居る大阪灣の西北隅に在りて海岸水深く巨舶を繫ぐに便なり其昔、兵庫に隣れる一漁村たりしが開港と共に長足の進歩を遂げ忽ちにして兵庫を凌駕し今は兵庫を併合して市内に編入せり日清戰役の後、大阪の工業發達に伴ふて益〻繁榮し、東洋諸港への航路の起點となり關西地方の貿易品は大部分こゝに集まる、其發達の經過、横濱と相似たり、輸出品の首位に居るものは綿絲、燐寸、銅にして支那、印度、南洋に向き花莚、麥稈眞田等も其產地に近きため本港より出づ、輸入品は紡績原料たる棉花を第一とし、大豆、豆粕、鐵、米之れに次ぎ人口の稠密なる農業地に消費せらるるなり。

二八二　酒造地……日本清酒の代表產地たる灘(なだ)、伊丹(いたみ)、西ノ宮は凡て兵庫縣の東方、大阪府に接す所にあり此地背後に花崗石の丘陵を負ひ、前に大阪灣を控へ水質氣候共に好適

し清酒品質の優良なる天下第一等と誇れり。

二八三　有馬溫泉……近畿地方にて最も著名なる有馬溫泉は神戸市より六甲山を隔て〻北側にあり含鐵溫泉、炭酸冷泉など多量に湧出す土地稍高く、夏尙ほ涼しければ避暑湯治客、充滿せり舞鶴線有馬口より山に入るを便とす山下に寶塚の溫泉あり大阪より電車を通ずるを以て亦大に繁榮せり、有馬の靈泉として古來珍奇に考へられたるは炭酸冷泉なり泉源常に沸々氣泡を吹き之れを瓶に塡めて振るときは空氣銃の如く瓶栓を飛ばす、故に鐵砲水の俗稱あり蓋し炭酸瓦斯の沸出に因るなり、近時之れを汲み有馬水の名を以て世に販賣せり、神戸布引瀧の附近にも同樣の炭酸湧泉あり平野水と呼び清凉飲料として其名を博せり。

二八四　須磨・明石……神戸市以西、海岸の地、白砂靑松、相映し風光明媚宛ら繪を見るが如し加ふるに氣候溫和、夏は凉しく冬は暖かなれば古來勝景の地として謳歌されたるが鐵道の開通と共に近畿の遊客常に雲集し瀨戸內海の一大公園として管理せられ、別莊など多く建てられ、須磨、舞子、鹽屋の邊最も秀づ唯惜くば呼吸器病患者の多く集まりて病毒

傳染の憂あることなり。

二八五　湊川……湊川は神戸市を貫ける小溪にして昔は神戸、兵庫の境界たりき、川は平素水涸れ唯砂磧のみなれば河床平地より高く鐵道は河床の下を潛りて隧道をなせり、されど一朝豪雨に遭ふときは、濁水滔々忽ち堤を切つて氾濫し兵庫の市街を沒し人家を流すことあり近年水路を西に變更して其災害を免るゝに到りしが楠氏終焉の地として其名を史乘に止めたる湊川は全く跡を失ふに到れり湊川神社は其東畔にあり水戸光圀卿の碑石魏然として立ち大義名分を千載に炳かにせり、惜ひ哉社境殿賑に過ぎ熱鬧騷俗の巷と化し、有識の士をして眉を顰めしむるに到りたるは頗る遺憾なりとす。

二八六　老松の名所……瀨戸內海沿岸は氣候一般に乾燥して雨少く、加ふるに花崗岩の崩壞せる白砂は土壤に混じ黑松の生育には此上なき好適地なり、されば沿岸到る所、松林濃翠滴るが如く所々に老樹を存す就中、高砂、曾根、尾上（おのえ）、相生の松など所謂「松盡し」の名木は凡て本縣播磨の國にあり。

二八七　製鹽……乾燥寡雨の瀨戸內海は當然、製鹽に適し古來鹽田多く開け、到る所、鹽

を燒く釜より烟の立つを見る、製鹽の量に於ては香川縣に讓れども世に聞ゆるは却て播磨赤穗なり、赤穗は元祿事件四十七義士に聯關して更に驍名を博せり、而れども內地の製鹽は何れも加熱のため燃料を使ふを以て臺灣の天日製鹽に比して經濟上不利なるを免れず。

二八八　柳行李……旅行用若くは衣服の容器として便利なる柳行李は杞柳（こりやなぎ）と稱する揚柳科灌木より原料を採る、杞柳は自生もあれども此地方にては畠に栽培し切株より勢良く伸び出だす氣條（やわい）を刈りて皮を剝ぎ木質を水に晒し手工を以て編みて製す、粗製品は近縣より出づれども仕上は主として但馬なり、製造の由來は古けれども近時外國向「バスケット」提籠などを造るを以て急に發達したり內國九餘百萬圓の內七百萬餘圓は兵庫縣にて占む。

二八九　燐寸製造……今日となりては燐寸は極めて廉價にして極めて平凡なる日用品なれども、明治初年の頃は西洋より輸入し一個幾錢といふ高價にて賞用せられたり、其れより前は專ら燧石を用ゐたるなり、內地にて創めて燐寸を製したるは明治八年東京に起りたる新燧社と稱する一工場にして、當時政府より保護金を下附したる位なり、兵庫縣下に製造工業を見たるも皆同時代なれども長足の進足を呈したるは明治二十二年頃とす、今や全國

產額一千三四百萬圓に達し、其內千萬圓以上は支那始め東洋南洋諸國に輸出せらる、全國中兵庫一縣にて七八萬圓卽ち約六割を占め而して神戸一市に於て縣下產額の八割を獨占し工場三十二、職工六千名と號す實に神戸は東洋燐寸業の中心地なりとす、而して之れに用ゐる軸木は主として北海道にて供給せられ赤燐と鹽酸加里は輸入品を仰ぎしが今や福島縣下にて鹽酸加里の製造を見るに至りたり。

二九〇　玄武洞……玄武洞は但馬の北方、城ノ崎（き）溫泉の附近に在り柱狀の岩石直立密集して山をなし下に洞窟ありて入るを得、奇景を以て名あり、この岩質を玄武岩と稱す。

二九一　生野鑛山……播磨、但馬の境上に生野あり古來、銀山として聞えたりしが今は銀銅をも併せ產し、三菱會社の有に屬せり口碑の傳ふ所によれば大同二年の發見なりといふ慶長元和の頃より幕府の直轄となり明治維新後、政府より宮內省に移管し明治二十九年民間に拂下げられたり年產額百三十萬圓を超ゆ。

◎中國地方

二九二　山陰・山陽の比較……中國は一大半島の形をなし脊梁山脈によりて山陰、山陽に分たる、山陽道は前に靜穩なる瀬戸内海を控へて海岸には岬灣出入し沿岸と河岸には平野連なり、氣候も四時溫和なれば、古來交通早く開け戸口繁殖し文化亦疾くに進みたり山陰一帶は之れに反して海岸出入少く、海上波荒く平野乏しく、冬月積雪と砂塵多ければ交通文化何れも山陽より著しく遲れたり、前者を表とすれば後者は裏といふ可し、山陰の鐵道は夙に布設せられたれども山陰線は今に全通の運び到らず、産業亦之れに準じ山陽は農業盛んにして人口の稠密に伴うて手工工業發達し、麥稈、經木眞田、疊表花莚などの産多し、山陰は之れに反して日本海の漁業、陸上の牧畜を主とせり。

岡山縣

二九三　製帽用眞田……麥稈並に經木眞田は殆んど手工品なれば、人口稠密なる内海沿岸の地に發達せり、麥桿眞田は小麥の莖を刈りて乾し、藥品を以て晒し、之れを女工の手を以て編み長き紐となせるなり、經木眞田は「ドロヤナキ」「トヾマツ」「シナノキ」等の木材

を薄く削りたるを「リボン」狀に編みて製す。何れも「ミシン」機に懸けて圓く捲き夏帽子を製す、内地消費の外に外國へも盛んに輸出せらる、内地産額約六百五十萬圓の内二百六十萬圓までは岡山一縣にて製産せらる而して岡山縣内に於ては備中高梁を中心とす。

二九四　花莚……疊表並に莫産(ござ)は古くより用ゐらる、藺(ゐ)(燈心草)並に七島藺(しちたう)(芏草)を以て編みて製す、普通の疊表は前者を原料に採り、備後を以て名産とせり、後者を以て作りたるは俗に琉球と稱し體裁劣れども質は却て强し、寄席又は床などに敷き或は荷物梱苞に用ゐらる西洋輸出向きの花莚は染めたる藺を編み交ぜて美しき紋樣を出だしたるものにして洋館の床上に敷くため歡迎せられ明治十一年頃より創めて製造したるものに係るが其後發展して主要輸出品の班に列するに至りたり普通の疊表は廣島(備後)大分兩縣を主とすれども花莚の方は岡山縣を頭目とす總計産額一千萬圓の内、花莚は三分の一を占め略三百三十萬圓とす、其中二百五十餘萬圓は岡山一縣にて産出する勢なり。

廣島縣

二九五　廣島……廣島市は中國第一の大都會にして人口十四萬三千、全國第八位に居る、舊淺野侯の舊領の城市にして城址今は第五師團司令部となれり高等師範學校、第五高等學校、控訴院などの設置あり、當師團は日清、日露兩大役には何時も劈頭に出動し且つ出帥根據地として最も適當せり、附近の海岸に宇品港ありて軍隊兵器糧秣輸送の要港となれり四國との間、內海の幅、狹くして藝備海峽をなし要塞地帶として警備せらる。

二九六　吳と江田島……吳市は廣島市の東方にありて鐵道を通ず、江田島は其海上にあり、吳は海軍根據地にして鎭守府を設けられ、盛大なる造船工廠と邦內第一の製鋼所ありて巨艦の建造組立をなすに適す近時戶口頓に增殖して人口十萬を超え江田島には海軍兵學校あり。

二九七　音戶瀨戶……瀨戶內海中最も風光の奇拔なるは音戶（おんど）ノ瀨戶なり、廣島灣の東角と倉橋島との間にして兩崖山迫り水路極めて狹く、潮汐干滿の際、奔湍の如き急流をなし舟手の苦む所なり、瀨戶の中央に差し懸るとき、船は宛然湖中にあるが如し、倉橋島の水際に孤松あり平淸盛の塚なりといふ船首一轉西に進めば眼界忽ち豁達にして吳の製鋼所

妖烟天を覆ひ數隻の艦艢常に海面を壓して威風堂々たるを見る、瀨戶の水流急なるところ瀨戶貝を產す此地方の名產なり。

二九八　牡蠣……牡蠣は廣島縣名產の一なり宇品の海岸盛んに之れを養殖せり、冬月俵に塡めて近畿地方に賣捌く。

二九九　嚴島……日本三景の一として名を博せる嚴島は廣島より西南五里の沖合にあり今は山陽線の宮島驛より汽艇の往來ありて遊覽至て便なり、島の周圍七里、全島花崗岩にて成り最高六百尺を出づ之れを彌山（みせん）と稱す山麓の海岸に濱して市杵姬神社あり創建の由緖は頗る古しと雖ども平淸盛安藝の國守たりしとき殿舍全部修繕せられ今日の壯麗を致せり、其後屢行幸ありて古文書名繪を藏するもの數限りなし廻廊汀際に橫はり滿潮のときは海水廊下に泛ぶ、海中に建てる大鳥居は高さ七間に餘り、社の側に千疊閣と稱する大厦あり秀吉朝鮮征伐の時、軍議を開きたる所なりとて日淸、日露の兩役に宇品より出發の兵士概れ之れに參拜して門出を祝するため杓子を獻納するが例となれり、山脚に小瀑あり紅葉谷の公園といふ、彌山には弘法大師護摩焚きの跡と稱する求聞持堂あり、頂嶺には岩角露出

内海の眺望を双眸の内に收むるを得、之れを千疊敷といふ、島の周圍に七浦と稱して各小祠を安置し舟手の巡拜するもの多し、社殿の附近風光殊に明媚にして老松の下、鹿を飼ひ旅舍旗亭軒を連ね貝細工、黑松細工などを鬻ぐ遊覽四時絶ゆることなし。

三〇〇　瀨戸内海……中國と四國との間に夾める内海を瀨戸内海と稱す、海とは謂へ陸地の陷落して成りたる一大湖に外ならず、淡路、門司、佐賀ノ關の三ヶ所にて狹き水路を以て外洋に通ず、海中大小無數の島嶼散布して一の多島海をなす故に外洋潮汐の滿干ある毎に海水は狹き水路を押して出入するを以て恰も奔湍急流の如し島嶼の間隙も亦同時に急湍の姿をなす凡てかゝる所を瀨戸といふ内海の島嶼は概して皆な兜の如き山をなし一として砂洲又は平坦なるものなし地盤概ね花崗岩にして崩壞せる巖角に孤松の存するなど奇拔の風景多し、若し夫れ輕快なる汽艇に搭じて島嶼の間を駛せんが眼界は時々刻々に變轉し宛ら走馬燈を見る如し、海上波靜なれども航路錯雜して往々衝突の憂あり舟子の常に苦む所とす、軍艦千島嘗て英國より廻航の歸途こゝに衝突沈沒せり。

山口縣

三〇一　關門海峽……中國の西端、九州の西角とは狹き海峽を隔てゝ相對す中國に下ノ關、九州側に門司ありて關門海峽と稱し本州より九州に渡るの要津とす海峽の兩岸、丘陵高く峙ちて自ら瀨戸内海の咽喉を扼せり、國防上緊要の地點なれば堅剛なる砲臺を築きて警備せり。

三〇二　下ノ關……馬關又は赤間ヶ關とも稱す、中國半島の盡端にして商業上恰も大阪の出張所の姿を呈し、大阪の物價は直ちに下ノ關の物價となり、僅か一葦の水を隔つれども對岸の門司とは人情風俗を異にせり、人口六萬に近く山陽鐵道線の終點にして神戸より三百二十九哩、東京より六百五哩、常に直通急行の列車往復せり最急行二十五時間半にて達するを得、驛前に山陽「ホテル」の旅館あり海峽には小汽船を浮べて門司へ連絡す、又朝鮮釜山港への汽船不絶發着せり、安德天皇を祀れる赤間ノ宮、壇ノ浦の古戰場は其附近にあり、赤間ヶ石と稱する硯石は名產なり。

三〇三　山口……山口は縣廳所在地にして官立高等商業學校さへあれども、海岸を離れたる一小盆地なれば交通餘り便ならず人口も從て少く僅か二萬餘、未だ市制を布かず山陽線小郡驛より四里、四面山を繞らせり。

三〇四　錦帶橋……周防岩國の城市に在る名橋にして岩國川に架す、橋は五區に分たれ石を積みて橋脚とし、中央三橋は橋柱を用ゐず太皷橋の構造なり、欄杆には擬寶珠を飾り古風掬す可し岩國驛より一里を隔つ。

三〇五　海軍煉炭所……周防の海岸に德山港あり、昔は下ノ關に對して上ノ關と稱し瀬戸内海航路の寄泊地なりしが、維新以後、衰頽せしも其後海軍用煉炭製造所を設けられ再び繁盛を恢復したり、煉炭とは「コークス」と無煙炭の粉末を「ピッチ」を以て煉り固めたるものにして軍艦倉庫内に積込むに便なり元來軍艦には無煙炭に非ざれば火力弱く且つ煤煙多くして戰術に不便なり、然るに我邦には無煙炭乏しく英國より輸入するの必要あり、之の缺陷を補ふため採用したるが煉炭なり、煉炭は其形自由に製造するを得れども積込みに便なるため煉瓦の如き型となす、近來大正炭などの名目にて坊間に販賣せるものは卽ち煉炭

を家庭用に製したるものすと。

三〇六　萩……萩は山口縣北海岸の小都會にして昔は毛利侯分藩の城下なりき、産する所の夏蜜柑は遠く關東迄も販賣せらる、萩燒は赤味を帶びたる土を以て燒きたる陶器にして一に深川燒と稱し、質脆ければ厚手に燒くを常とす、優美には非ざれども自ら雅致あり。

鳥取縣

三〇七　大山……伯耆の大山と通稱す日本海沿岸火山帶（鳥海火山脈）に屬する消火山にして高さ五千餘尺、其形端麗にして富士の如し、遠く裾野を曳きて海岸に及び、名和長年の陣所たりし船上山は其中腹なり。

三〇八　夜見ヶ濱……鳥取縣の西方、島根縣に接する所に砂洲長く伸び島根半島にて擁せる灣を塞ぎ、僅かに尖道湖に通ずる狹き水路を殘す、砂洲の北端に境港ありて日本海沿岸航路の重要なる寄泊所とす、砂洲の根本に米子の港市あり、砂洲の東岸、外海に面せる側を夜見ヶ濱と名つく。

三〇九　白珊瑚……鳥取縣名産物の一に白珊瑚といものあり、色白く形箸の如く眞直にして枝を岐たず、海中より採集し研きて菓子箸又は小楊枝を製す、長きものは數本束れて鐵の竿を心に入れ杖となすを得、この物は眞の珊瑚には非ずして別に海柳（うみやなぎ）と稱するものなり、生時には鳥の羽の如き形せる軟肉あり珊瑚と同樣數多の微細動物の群棲體にして海底に立ちて八　、工藝に用ゆるは其骨骼を晒したるものなり。

島　根　縣

三一〇　三瓶山……石見の中央に聳する消火山の一群にして大小數個の圓錐山より成り島海火山脈に屬す、親三瓶（おやさんべ）、子（こ）三瓶、孫（まご）三瓶等の名あり、山中硫氣洞ありて硫質の瓦斯を吐く。

三一一　出雲半島……平面の地圖にて見れば一の半島なれど地質上より見れば元來別個獨立の大島なりしを、川より流す土砂、海波のため打ち寄せたる砂のため漸次、埋められて陸續きとなりたるものとす、現に衣見ケ濱は新しき砂洲にして陸地と島との間を殆んど

連結せんとせるものなり、半島の東部内側に美保關あり惠比壽神社を祀り、船子多く參詣す、所謂「關の五本松」とはこの海岸に生ぜる老松にして内二本は相列びて夫婦松と呼ぶ。

三一二　宍道湖……宍道（しんじ）湖及び中ノ海は島根半島が三條の砂洲によりて陸地に連絡して其間に生じたる湖沼にして大なる潟なり、松江市は此の潟に臨みて存在す宍道湖は周圍十一里面積八千四百七十町歩あるといふ。

三一三　出雲燒……松江附近にて製する陶器にして黃綠色の釉藥を施すを常とす、茶器花瓶、皿などの外に筒形火鉢を多く造る。

三一四　砂鐵……出雲、島取の山中には砂鐵を産し、採りて鎔かして以て良質の鋼を製するを得、古より中國筋に刀鍛治の名工を出せるは蓋し故あるなり、彼の神話に素盞雄尊が怪蛇「オロチ」を討ち取りたる時、蛇の尾より出で三種神器の一なりと傳へらる叢雲劍は恐くば中國の山中にて鍛治されたる古劍にして、「オロチ」は蠻族の名なる可し、尊は蠻族討伐の戰利品として天照大神の朝廷へ獻納されたるものならんか。

◎四國地方

三一五　四國の地盤……地質學者の調査せる所によれば、四國は腹背各、地質構造を異にせり瀨戸内海に面せる側は、山陽筋と同じく花崗岩にて成り、太平洋に面せる側は東西に走せる古き水成岩の山脈より成る、この水成岩の山脈の群集を四國山系と稱し、紀伊半島、淡路島の南緣、九州の東北端と同一の地質構造より成り恐く太古には連綿たる一大山系なりしが久しき年代の間に削磨或は陷沒して紀伊水道や豐後水道を生ぜしものなる可し現に淡路島の南緣は紀伊の西角、阿波の東隅と相接近して極めて狹き海峽をなし其中に散布せる暗礁も亦同一の岩石より成れり、淡路の南方沖合に飛び離れたる小さき沼島（ぬしま）も亦同樣の岩石にて成り、古代の大山系の破片たる可し、豐後水道に於ても伊豫の佐多岬と豐後の佐賀關と双方より相伸びて、過去の連絡の形迹を殘するものと謂ふ可し、而して四國、紀伊、九州の中軸を連結せる大山系を更に東に辿れば赤石、飛驒の山系となり本州の中央を斜斷して日本海岸に達し親不知の嶮崖に到つて截然として跡を失せり、之れを日本南彎大山系又

は支那山系と地質學者は呼ぶなり。

三一六　四國の交通……四國は大部分山岳を以て掩はれ、僅に海岸に狹き平地の孤立せるものあるのみ、されば陸上に鐵道を延長するは困難にして、今日に到るも未だ四縣を連絡するに到らず、僅に都會の附近に短距離の鐵道を敷けるのみ、之に反して海岸には寄泊地多く各港を連絡せる定期汽船瀨繁に往來して海上交通大に便なり沿岸航路の起點は大抵大阪又は神戸港にありて四國の交通中樞は却て大阪にありといふも過言にはあらず。

德島縣

三一七　鳴門……遍く世人に膾炙せる阿波の鳴門は、德島縣の東端と淡路島の西南角との間に夾める狹き水路にして、過去の時代には一連の山脈なりしを海水の侵蝕などに因りて斷絶したる跡なるべし水底淺く暗礁多くして舟行危險なり、加ふるに外洋の潮汐滿干に際し内海に浸入する海水は瀧の如き瀨をなし渦を卷いて走る、兩崖屹立、風光頗る奇拔なり縣下大島の一端に眺望に最も適する地點あり俗に千疊敷と稱し旗亭を設けて觀客を招け

り、此附近一帶に柑橘の類を產し鳴門蜜柑と稱す、生のまゝ或は「ジャム」に製して世に鬻ぐ。

三一八 藍……德島縣は昔より藍の名產地なり藍は蓼の類にして之れを畑に栽培し、葉を刈り取り蒸して醱酵せしめ、藍黑色の藍玉を製して市場に出だす藍玉は之れを溶かして染料に用ゐたり、昔は藍色紺染の原料は獨りこれを用ゐしが後、印度より印度藍の輸入あり次で獨逸にて人造藍の發明せられてより其價額の低廉に壓倒せられて內地藍の耕作は年々と共に衰へたり、されども尙ほ德島一縣にて年額二百六十萬貫を產し內地總額五百萬貫の過半量を占めり阿波縮を始め諸種の木綿織はこの藍を用ゐて染む。

三一九 劔山……四國第一の高山にして高さ七千三百尺とす、山頂に安德天皇の寶劍を祀るといふ。

三二〇 祖母谷……祖母谷(いやたに)は阿波、讃岐に跨る山中の部落一帶の稱にして交通極めて不便、甚しき僻陬の地なり、吉野川の上流、其間を迂曲して流れ、崖高く水深くして、葛蔓を以て編みたる橋を架す甲斐の猿橋と共に本邦奇橋の一と稱せらる。

香川縣

三二一 小豆島……香川縣の沖合にある島にして醬油の產を以て著名なり島內に神懸(かんかけい)又は寒霞溪と稱する勝地あり奇峰、怪石に富み風景幽邃にして所々に瀑布、洞門などあり關東の妙義、九州の耶馬溪に比すといふ、岩質は凝灰岩なり。

三二二 屋島……平氏の末路として史乘に著名なる屋島は、高松市の東部に突出せる一小半島にして丘陵の頂は卓子の如き高臺をなして海中に伸び遠く之れを望めば家屋の棟の如し故にかく名づく。

三二三 金比羅宮……讃岐なる國名と離る可からざるは金比羅大權現なり琴平町の奧、五劍山の麓にあり昔より靈驗ありとて關西地方の善男善女多く參拜し年中參詣者の絕ゆることなし、其繁盛、伊勢大廟、筑後の水天宮と伯仲す。

三二四 鹽田……香川縣は氣候地味並に人口の稠密に於て對岸の兵庫、岡山縣と相並び產業も亦殆んど同樣なり、燐寸、麥稈眞田、製造の外に鹽の產額亦大なり、一地方に於ける

鹽の產額の盛なること本縣坂出の右に出づるものなし、鹽田の面積千三百七十町歩、一ヶ年の產鹽額、二億三千五百萬斤、內地全體の四分の一を占む、鹽田は海濱の砂地を平垣に均らし水面より僅かに出づるの高さとなす、周圍に堤を繞らして波浪の侵入を妨ぎ、溝を掘りて田內に海水を導く、滿潮の時、海水の溝內に入り來るを俟つて柄杓を以て海水を幾度となく砂田の上に撒布す、かくて鹽分を含みたる表面の砂を搔き集め槽に入れ上より海水を注げば鹽分に富める鹹水を侵出す、この濃厚なる鹹水を鹽燒小屋に導き扁平なる釜に盛り石炭若くは薪を焚いて沸騰せしむ、充分濃密となれる鹹水は更に別の淺き鍋に移して蒸發を盛ならしむ、食鹽漸次結晶して半溶けの雪の如くなりたる頃、鍋より搔き集めて笊に盛れば殘餘の水分は笊の底より漏りて食鹽忽ち固結し雪の如く純白となる、海水中に含有せる鹽化「マグネシア」等は未だ結晶するに到らず漏水に交りて除き去るを得るなり、現今の制度にては製造せし食鹽は一旦政府の專賣局に買上げ更に適當の値段付けを以て民間に拂下げ小賣商に配たるなり、されば臺灣、關東州等にて製する廉價の天日製鹽と雖ども內地に入りては價額は均一となり瀨戸內海の製鹽業も之れがため壓倒さゝる憂なし、食鹽は

食物調理に用ゐらるゝの外、鹽酸、曹達其他工業上の原料として夥しく消費せらる、因に記す我國にては岩鹽の產出する所なし。

愛媛縣

三二五　別子銅山……日本四大銅山の一なる別子は愛媛縣の東南隅に在り現時盛大なる銅山としては恐く最も古きものなり、其發見は元祿三年に係るといふ、同八年以來住友家の經營に歸し爾來二百二十餘年依然繼續して、近年にては銅の製煉額一ヶ年一千百萬斤、其價値三百六十萬圓とす、鑛床は四國山脈の主軸たる結晶片岩の中に層狀をなして存在し足尾、小坂などとは趣を異にし却て茨城縣の日立、靜岡縣の久根銅山に似て自ら太平洋側銅鑛床の特色を有せり、採掘所は海拔三四千尺の山中にありて土佐の境に近し而して鑛石の製煉は內海沿岸なる新居濱總開並に四阪島にて作業し、煙毒の流布を防げり。

三二六　市ノ川「アンチモニー」……縣內東部に市ノ川鑛山あり硫化「アンチモニー」卽ち輝安質母尼鑛を產するを以て著名なり產額豐富ならざるも結晶形の偉大なるもの

あり往々長さ三尺に餘り研ぎ澄ましたる秋水の如き觀を呈す、かゝる優秀の結晶も漸次採り盡して今は乏しくなれり、近時支那湖南省に大なる「アンチモニー」礦發見されてより市ノ川は顏色なきに到れり。

三二七　石槌山……愛媛、高知兩縣の境に聳え、四國第二の高山にして海拔六千四百尺といふ、山頂に石槌權現を祀り、夏季中國筋よりの信徒登山するもの夥し山麓より三里と稱し中腹に一ノ阪、表白阪、早鷹阪あり之れを昇りて一夜を明かし更に急峻を攀ぢて頂巔に達するを得、途中急峻なる絕崖には三段の長き鐵鎖を懸け、之れに縋りて登らしむ、絕巔は岩角屹立して眺望頗る廣濶なりといふ。

高　知　縣

三二八　製紙……現今世に用ひらるゝ紙は大別して和洋二種とす、其内洋紙は近世起りたる業にして木材を粉碎して製したる「パルプ」並に古き布片を原料とし藥品を以て漂白し大仕掛の器械を以て漉くなり、故に其工場は邦内各所に散布せり、之れに反して和紙は古來

慣用の方法を以て楮、三椏などの纖維を原料とし、之れを溪谷の清流にて晒し、植物の根より搾りたる粘液を糊となし、多くは手漉にして板に貼りて乾かすを常とす、近來藁「パルプ」等を交ぜて惡質の和紙を製すること多しと雖高知縣、岐阜縣の如きは依然古來の風に據り、純良なる日本國有の紙を產出せり殊に高知縣製紙業は醍醐帝の頃より已でに起れりといふ、製品の主なるもの各種の半紙、小半紙、美濃紙の外に、仙華、杉原、典具帖、書院、薄葉等の特殊の優良品より半切、傘、障子紙、近頃は「コピー」用紙等あり年額は四百四十萬圓に達し全國和紙總產額千九百萬圓の二割六歩を占む。

三二九　珊瑚……婦人の頭飾に用ゐる珊瑚は古くより本縣の特產の如く考へられたり、近世は薩摩、肥前の沖合にても採らる、珊瑚は水淸き深底岩礁の上に上に固着して生じ、太き索を以て編みたる網を以て海底を曳き、枝の折れて網に懸るを引揚ぐるなり、枝は赤、白、桃色「ボケ」色などあり又生き枝と死枝とあり麗しき赤色の生枝を最も貴重とす、頭飾、簪の珠に用ゐるは、枝の太き所を截りて研きて製す又枝のまゝ滑かに磨きて裝飾ともなす、固と高價なれば世間には往々僞物あり、土佐に於ける珊瑚の主產地は西方、室戸崎の沖合

にして古へより年中、絶え間なく漁船を發して採れども未だ盡る模樣もなし。

◎九州及琉球地方

三三〇　九州の地勢……地質學者の調査に據れば九州は三樣の地帶より成れるものとす、九州の樞軸をなせる山骨は四國山系の連脈にして、東北大分（おいた）の佐賀ノ關より九州を斜めに西南に貫きて肥後の天草に達するものにして、古き層狀水成岩の重層にて成り、次に九州の西北一隅を成せる部分は筑紫山系と稱して、古き火成岩の錯雜さるものにて成り、中國山系の餘波と見る可し、第三には火山質地盤にして縱橫犖の如く走れる火山帶にて成る、其一條は瀨戸內海の軸を延長したる方向を占め、東北角なる國東半島、別府溫泉の邊より州の中央なる阿蘇山を通して肥前の多良、溫泉嶽に達するもの、他の一條は阿蘇山より分岐して南走し鹿兒島灣の方向に至るもの、之れを霧島火山帶と稱して、有名なる霧島山、櫻島など之れに屬し、遙かに南海に沒して琉球列島の北側に散點せる細かき火山島礁亦之れが脈上に噴起せるものと考へらる、此等の山體の隙間を埋めたる若き地質は筑紫、熊本の平

野と丘陵を形成し九州の大富源たる炭田も亦この若き水成岩中に包有せらるゝなり。

三三一　九州の表裏……九州は西北半と東南部と地理上全く趣を異にせり、西北半は地勢一般に平夷にして、交通良く開け人口も稠密に、產業も夙に發達せり加之、無限の炭田は地下に埋藏され、掘て以て現代文明と財力の源を養へるなり、且つ海岸の出入夥くして昔より航路の寄泊地となり、福岡、佐賀、長崎、大分、熊本の諸縣之れに屬す假りに之れを表九州とす、之れに反して東南半面は山岳多くして平原少く、海岸は錨地に乏しく、山林に富むと雖ども、石炭の產出無く、昔より交通阻害せられ人口亦稀薄なり、宮崎、鹿兒島の二縣之れに屬し假りに裏九州と稱するを得、而して氣候に於ては裏九州は溫暖にして冬月も寒氣弱し、表九州は寒暑の差甚しく冬月積雪少からず。

三三二　九州の鐵道……九州鐵道の玄關といふ可き起點は門司にして、之より最大幹線は州を縱貫して鹿兒島市に達す全長二百三十八哩とす第二幹線は本線鳥栖（とす）驛より分岐して肥前半島の盡端長崎に到る、門司より長崎まで百六十五哩とす九州の大都會は此の兩幹線によりて連絡せらる、第三幹線は小倉驛より分岐し東北岸に沿うて外洋沿岸に出で大分

に到る、この線全長僅かに百哩、漸次宮崎縣に入らんとす、宮崎縣は近年まで全國中鐵道の通ぜざる縣(外に高知縣)の一なりしが、近年鹿兒島線より短距離の支線を出だし都城(みやこのじょう)を貫けり、別に九州の西北隅、筑豐、唐津の炭田地方は石炭輸送のため短線交結して網をなせり其狀、恰も大阪東京の平野並に北海道の炭田地方に彷彿たり。

福岡縣

三三三 人口の稠密……福岡縣は九州中最も人口稠密なる縣にして、一平方里五千百五十人の割合となり全國中、東京、大阪、神奈川、香川、愛知に次で第六位に居り福岡、小倉、門司、久留米の四市と小倉、久留米の二個師團並に九州帝國大學、帝國唯一の官設製鐵所あり其殷盛想ふ可し蓋しこれ現代文明の大要素たる石炭の供給豐富なるに起因せずんばあらず。

三三四 福岡の炭田……地下に石炭を保藏せる所を炭田といふ、日本内地炭田は三ヶ所に別れ、北海道と常盤の外に九州炭田あり、九州炭田は更に三池、唐津、高島、筑豐の四區

に別つこと得。大部分は本縣に屬し餘は佐賀、長崎の兩縣に跨れり筑豐地方の炭田は遠賀川(をんが)の流域に集まり、大小無數の礦區に分れ、開坑の數枚擧す可からず、炭層は大體薄くして且つ斷層多く採掘餘り便ならず、三池炭田は南に離れて熊本縣の境に接し炭層厚くして八尺乃至一丈に及ぶものあり傾斜、斷層共に少くして採掘上最も便利なり、此等炭田は皆なる軟き砂岩の間に夾り炭質は黑炭褐炭の中位にして無烟炭の比に非らず、炭田地方は運炭鐵道蜘蛛手に分岐し炭車の往復瀨繁なり、門司、若松は石炭の取引場にして各坑より集まる石炭堆んで山をなす。

三三五 三池炭礦……三池は本邦内地最大の炭礦にして筑後、肥後の境にあり、礦區東西一里半、南北四里、總面積四千八百萬坪を領し、三井家一門の所有に屬せり、現今採掘稼行せるところ約四百萬坪にして大浦、宮ノ原、宮ノ浦、七浦、勝立(かちたち)及び萬田(まんだ)の六區に分ち、各坑口には新式の捲揚機を据ゑ付けて、盛んに採炭せり、炭層は幾段もあれども實際採掘せるは八尺炭といふ最上、最厚の一層にして、東北より西南に徐ろに傾斜し、最南なる萬田坑にては地表下九百尺の下にあり、坑内地下水の漏るゝこと夥しく巨大なる喞筒を運轉して

排水に忙はし、一ヶ年出炭量二百萬噸其價値六百萬圓に上り、全國採炭總額の一割以上を占む、發見は今を去る四百年前文明年間なりといふ明治の初め政府の手にて經營し來りしが同二十三年三井家の有に移れり。

三三六　三池港……三池炭礦に聯關して三池港あり天然の港灣にあらずして、大牟田(おほむた)の海濱に人工を以て突堤を築き、石炭輸送の目的を以て經營せるなり、突堤の長さ一千間にて十五萬坪の水面を抱擁し、四萬坪の船渠を備ふ、沿岸に延長千三百八十尺の大壁を築き、以て一萬噸の巨舶三隻を同時に繫泊せしむるを得、境内、軌道を縱横に敷き炭礦より輸び來れる石炭を電力自働機を以て船積するを得、其規模頗る壯大なり、積出す所の石炭は長崎縣の南端なる口ノ津に揚げ更に東洋諸港に仕向けるなり。

三三七　八幡製鐵所……福岡縣に於ける現代的名所の一は慥かに八幡(やはた)の製鐵所なり場所は若松港の奥にありて鐵道は戸畑、枝光(えだみつ)、八幡の三驛に接す、農商務省直營にして明治卅年より創設せり、總地積六十萬坪各種の工場五十餘棟、大熔鑛爐四基、職工七千人、大小無數の烟筒より日夜間斷なく吐出する煤烟は天を掩ひ暗夜遠く望めば大火災の如し、其規

模の偉大なる言語に絶す、消費する鑛石の七割は支那大冶鐵山より三割は朝鮮より仰ぎ、可成内地の鐵鑛を使用せざる方針なり、鋼鐵の年産額十五萬噸、本邦製鐵の七割半は、こゝより産す而かも國運の進歩と工業の發展と共に鋼鐵の需要は益〻旺にして其不足を補ふため年々四千萬圓近くの鐵塊鐵材を西洋より輸入せざるを得ず、若し夫れ歐米の强國の其れに比せんか、米國の二百分の一、獨逸の百分の一英國の七十分の一、に過ぎず玆に到て吾人は呆然として我邦産鐵量の微々たるに驚かざるを得ず、境内に「コークス」製造場、「タール」副産物工場、軌道、針金、鐵板並に砲彈の製作場等を有せり、創立の當時寂莫たる曠野たりしが今は八幡町のみにて人口二萬を超ゆるに到れり。

三三八　門司……門司は實に九州の門戸なり、山陽鐵道の終點なる下ノ關と相對し連絡用の汽艇不絶往復して織るが如し加之、内海外洋航路の舶船常に輻湊發着して暫くも寧時なし背後は直ちに丘陵山岳にして對岸の下ノ關と共に瀬戸内海の咽喉を扼し國防上重要の地點たれば要塞地帶と定め、山上山下に砲臺を築き警備頗る嚴なり、門司は開港場として多く石炭を輸出し近年戸口急に增殖し山腹谷間まで家屋を以て塡め、寸毫の餘地なき勢な

り人口五萬六千に達せり。

三三九　福岡・博多……福岡市は舊來の福岡と博多とを併せたるものにして、舊の福岡に士族、官吏の住居多く、博多は純然たる港市たりき今は渾一して盛なる商工業地となれり博多の東端に九州帝國大學あり、更に其東は東公園と稱する松林にして箱崎八幡の千代ノ松原に連續す、松林の中に龜山天皇の御銅像並に日蓮上人の大銅像を立てり。

三四〇　箱崎八幡……弘安の役と共に史乘に著名なる箱崎は博多灣に臨める砂濱にして松樹亭々密林をなし千代ノ松原と稱す、松林中に八幡宮あり、社殿古色蒼然として「敵國降伏」の扁額は當時の敵慨心を偲ばしむ、社頭に元寇紀念館ありて遺物を保藏せり、附近に名島の帆柱石といふものあり神功皇后三韓征伐の際用ゐたる戰艦の帆柱が化石せしものと傳ふ蓋し樹幹の硅化したるものが地層中より露出せるものなる可し。

三四一　太宰府……俗に宰府と呼び天滿宮を祀る、鐵道線二日市驛より近し、前面に天拜山あり菅原道眞、天を祈りし舊蹟なりと傳ふ、一月二十五日鷺祭ありて遠近の參詣者頗る賑ふ。

三四二　櫨蠟……福岡縣の產物に木蠟あり、木蠟は櫨の樹を栽培し其實を集め煎りて絞り蠟を採るなり、製したるまゝの品は生蠟と稱して褐綠色なるを、更に晒して乳白となす之れを饅頭形の型に入れて固め市場に出だす蠟燭の製造其他工業上に用ゐらる其產額福岡一縣にて百二十萬圓に上り全國三百六十萬圓の三分の一を占め、愛媛縣之れに次ぐ、櫨は主に筑後方面に栽培し秋の紅葉仲々見事なり。

三四三　久留米……青年男子の常服として遍く使用せらるゝ久留米絣の製造元は卽ち本縣久留米市附近なり流石に九州の木綿織物中產額に於て第一位を占む、福岡縣として年額百六十萬反、價額三百三十萬圓に及ぶ其大部分は久留米絣なり、市の附近に第十八師團司令部あり又市內に水天宮神社ありて參拜者年中盛なり、市の東方一里に高良山ありて名勝の地とす、霧島躑躅の栽培に巧なること世に著はる。

三四四　芥屋の大門……博多灣の西、唐津灣との間に大門崎といふ所あり芥屋の大門と稱して、海岸の岩壁に奇怪なる洞窟あり之れを七ッ釜といふ、干潮の際輕舟に棹さし洞內に漕ぎ入るを得、蓋し玄武岩の柱狀構造をなせるものにして但馬の玄武洞と同一性質の

ものなり。

佐賀縣

三四五 伊萬里燒……瀨戸、岐阜、京都と共に本邦の四大陶磁器産地として指を屈せらるゝは佐賀縣の有田なり、製品は伊萬里、唐津港に集散するを以て伊萬里燒、唐津燒と稱す、中國筋にて唐津物といへば關東にて瀨戸物といふが如く、陶磁器の代表的名稱となれり、有田に於ける陶磁器の元祖は慶長三年にありといふ、朝鮮征伐のとき彼の國より陶工を伴ひ來りて、此地に窯を築かしめたり後、附近の地に良質の土を發見するに及んで、其技術漸く世人の耳目に觸れ、本邦磁器製作の起源となれり、正保、寛文の兩年に彩色に改良を加へ或は朝廷に獻納し或は外國へ輸出を企て漸次隆盛となり、明治に入りて香蘭社創立せられ此方面磁器製造の中堅となれり、年産額百三十萬圓、內國全産額千三百萬圓の一割を占む製品は茶器、花瓶、皿等種々あれど概して白地に染付紋樣にして優美なり、西洋輸出向としては珈琲皿、料理皿、藥味壺、砂糖壺、牛乳指シ等あり。

三四六 有明海……肥前半島と九州本土との間に夾める灣は卽ち有明ノ海にした灣底は佐賀縣に屬す、海底極めて淺く干潮のときは海水遠く退き、泥底露出し、步行舟揖共に不可能なれば板を泥上に滑らして渡るなり、之れを潟板（がたいた）といひ岡山縣の兒島灣にも同樣の板を用ゆ、かゝる淺海に蟶（アゲマキ）と稱する二枚介夥しく產し、捕へて以て肉を乾し主として支那へ輸出す、本縣主要產物の一にして年額數萬圓に上る。

長崎縣

三四七 長崎……肥前半島の南端に在る港市にて人口十七萬六千餘、內地に於ける第七位を占む、港としては細長き長崎灣の底にあり灣內水深く浪靜かにして巨船を容るゝに適す、昔は江戸長崎と稱し國の極端の如く考へたりしが今や鐵道を通じ陸上交通亦極めて便利なり本港が開港として海外と貿易を行ひしは疾くの昔よりにして西洋人として創めて來航せし葡萄牙人は此港に上陸して西洋物貨を輸入し邦人が西洋の事物を知りしは此時が始なり所謂「紅毛傳來」と稱せしなり其後天主敎布敎のため紛爭を釀し終に鎖國令を布くに

到りたりしが、獨り長崎港のみに限りて外國との通商を許可したり殊に、和蘭、朝鮮、支那とは貿易を繼續し蘭人は港の一隅なる出島に居留地を有せし事あり、和蘭の學者も往々來航したりしかば當時の志士は陰かにこゝに來りて、蘭學を修め以て西洋の事情を識り又醫術などを習得せしなり、同市諏訪山公園にシーボルド並にケンペル兩氏の記念碑を建てり、蓋し邦人が歐米と交通を開きたる歴史上長崎は永久記念す可き地とす、日露戰爭前までは露人の如きも市の郊外なる稻佐村に部落を設け、同國東洋艦隊の乘組員は冬月大抵此地に避寒したりき、市内に高等商業學校、醫學專門學校の設あり。

三四八　造船所……長崎灣内、市より離れて立神並に飽ノ浦に大造船所あり三菱家の經營する所にして壯大なる船渠あり、神戸の川崎造船所と共に東洋屈指なりとす、近年は軍艦の組立なども同所にて施さる。

三四九　水産……長崎縣は一大半島なれば、水産の發達せる、産額の夥しき九州第一に居るは當然なり、捕鯨會社ありて鯨を漁し、鯨油、鯨鬚の外に鯨肉の鹽漬を製す、其沖合、薩摩との間には珊瑚を採るべく鰯は邦内最も良品なる五島鰯を製出す鰤は盛に漁せられ其鰤

を以て優良の「カラスミ」を作る、光參（きんこ）の産額多く乾物として支那に輸出せらる。

三五〇　高島……高島は長崎港の沖合數里にある小島にして同港より汽艇半時間にて達するを得、其附近なる端島と共に石炭礦となれり、本島石炭の發見は二百年前にありといふ、寛永年間平戸の人、五平太なる者之れを採掘して近國の鹽田の燃料に販賣し始め、所謂「五平太炭」の名を得たり、今日にても一般に石炭を單に五平太と俗稱するは蓋しこれより始まれり其後、幾度か變遷して現礦主三菱會社の有に歸せり、本邦中恐く最も古き炭礦にして坑内は遠く海底に侵入し炭層概ね掘り盡し、今は産額多からず。

三五一　溫泉嶽……肥前半島の東南に分岐せる支半島を島原半島といふ、溫泉嶽の消火山之れに座し、嘗て大破裂を催し熔岩を流下して、島原の港を脅かせしことあり今尚ほ山上には地獄谷と稱して廣き硫汽洞あり盛に硫氣を噴出し附近に強き硫黄溫泉あり。

三五二　對馬……對馬は上下二島より成り其中間の海峽を淺海灣（あさみ）といひ、竹敷の要港あり日露戰役の頃までは日本海の咽喉を扼し海防上樞要の地點たりき、其後朝鮮南端の鎭海灣に新たに鎭守府設けられてより竹敷は不用となれり、日本海々戰當時の行動に鑑みれ

ば如何に對馬が帝國の海上權に優越なる地點を占め居るかを識す可し。

熊本縣

三五三　熊本……有明海に臨める平野に在り人口六萬一千、昔は九州中堅の大都會にして、九州唯一の師團並に高等學校ありて、軍事上學術上且つは商業上の樞要の地たりしが今や福岡に大學、鹿兒島に高等學校、長崎に高等商業、醫學專門學校、小倉、久留米にも師團司令部置かれて熊本は昔日の勢なし、然れども加藤清正の建築に係れる堅固なる城壘あり西南の役には九州鎭臺と稱して、西鄕の勇軍に對し克く之れを支へ、終に陷落を免れたりき、市内に清正を祀れる加藤神社、郊外に本妙寺あり又市の東方一里に水前寺と稱する公園ありて清池湧泉舟遊に良し。

三五四　阿蘇山……阿蘇山は熊本縣の東方、大分縣境に近く位する活火山にして、九州中央の雄鎭と呼ばる褐野の廣きこと周圍二十里に及び、舊火口の壁は外輪山を成して直徑五里とす實に地球上最大の火口なり其内に高嶽、中嶽、烏帽子嶽、根子嶽等の火口丘あり其

周圍の火口原に村落、田圃開け阿蘇一郡をなす、白川黑川の二流あり、合して火口瀨をなして熊本平野に出づ之を白川と名づく、黑川白川の會する所に數鹿留（すがる）、鮎歸（あゆかへり）の二瀑あり、又栃本、垂玉（たるたきうちのまき）、内牧等の溫泉あり中嶽は頂に火口ありて不絕噴煙し時々活動して灰を降らし且つ火口は往々移動す。

三五五　田原坂……西南の役に激戰地として其名を知られたる田原坂は、熊本市の北方にあり植木、木葉の兩驛より遠らず坂は敢て險なるに非らざるも攻防上要害の地なりとす坂の頂に大理石の碑を建つ。

三五六　天草洋……熊本より八代海を夾みて天草群島あり宇土半島の突端三角港より狹き海峽を隔てゝ渡るに便なり群島は水産に富み且つ無煙炭と善良の陶土を產す群島より西なる沖合は天草洋にして賴山陽の詩によりて其名世に響けり。

三五七　人吉と球磨川……人吉（ひとよし）は鹿兒島縣境に近き山嶽中の一盆地にありて別天地をなす、熊本平野より僅かに球磨川の岸に沿うて交通の路あり、鹿兒島線鐵道亦八代（やつしろ）より川に沿うて上り人吉より南は薩肥分水嶺を貫いて鹿兒島方面に出づ、球磨川は京都の保津

川、木津川、遠江の天龍川、甲斐の桂川と同じく峽流をなし兩崖絶壁の間奔湍白泡を飛ばし風光絶佳なり、肥薩の分水嶺は山嶽重層、鐵道は海拔二千五百尺の高際に於いて六千八百七十尺といふ全國屈指の長隧道を穿つ、之れを矢嶽の隧道とす且つ傾斜の急なるため軌道は螺旋狀に迂回して山を踰すなり、之れを大畑（おこはた）「ループ」と稱す大畑は驛名なり。

大分縣

三五八　大分の海岸線……本縣の海岸は和歌山縣、岩手縣の海岸に似て出入複雜し岬灣櫛比せり、加ふるに山嶽多くして直ちに海に濱し、沿岸に平地少ければ陸上交通不便なりされど沿岸の航路は夙に開け佐伯、臼杵（うすきひじ）出日等の小寄泊地はあれども、港市として大都會をなすもの一もなし、近時鐵道漸く開通したれば別府の如き溫泉地は忽ち繁榮の巷となりたり然れども物産比較的に乏しきが故に商工業の發達見る可きものなし縣廳の所在地大分（おほいた）すら人口僅かに三萬に足らず新く市制を布きし位なり。

三五九　別府溫泉……別府は大分縣の東北海岸にありて背後に由布（ゆふ）嶽（豐後富士）の消

火山を負ひ、前は渺茫たる大洋に浴し、氣候溫和、湧泉の量も多ければ古より其名世に聞えしが近來鐵道の開通してより遊覽客頓に夥しく、山を開いて別莊など設くる者日に月に增加せり、別府の地は由布嶽の裾野に屬し、地下に熱氣を藏し土地を掘れば忽ち溫湯湧出する位なり、海濱の砂に身を埋めて砂浴をなす事此地の呼び物となれり、稻田に井戸を掘りて熱湯を湧出せしむることも得、泉質は海濱にありては鹽分泉にして山に入れば硫黃泉となる、別府市街地より離れて鐵輪（かんなわ）、觀海寺の浴場あり又、紺屋地獄、坊主地獄、血ノ池地獄などの硫汽洞、泥泉あり泉湯を以て布を染め又湯華を製して販賣せり。

三六〇　耶馬溪……阿蘇火山の裾野、火山凝灰岩の地を山國川が貫きて峽流をなす、之れを耶馬溪と稱し賴氏の文筆により天下に其名を轟かせり、蓋し凝灰岩が流水に遭うて容易に削磨彫刻せられたる結果、怪石奇巖、流に沿うて起伏し、所々に洞門などあり沿岸を傳うて歩を移すときは光景の千變萬化迎送に遑あちず、文人墨客をして恍惚たらしむといふ、かくの如き地形は他に比類なきに非ざれども、耶馬溪の特に著名なるは全く山陽の筆力に因らずんばある可からず。

三六一　宇佐……宇佐は八幡宮を以て有名なり應神天皇武内宿禰を祀る、同名の停車場より遠からず舍殿神錆びて古色蒼然たり和氣清麿の史實は小學兒童も之れを知り、紙幣の繪畫にも用ゐらる。

三六二　佐賀關……佐賀の關は本縣東北に突出せる半島にある小港にして、半島の盡端を地藏岬と稱し早吸神社を祀る、對岸には伊豫の佐多岬遠く突出し地藏岬と相呼應して瀬戸内海の入口を扼し、剩さへ其間に高島介在して水路の幅、六里に充たず内海をして一大湖の觀あらしむ蓋し一大山脈が地變のため斷絶されて生じたる海峽なればなり、聞くならく明治三年歐洲に於て普佛戰爭の勃發せし際、我帝國は中立を宣言し、陸地の周圍三里以内を領海なりと發表したりしが列强は不知不識默認せしため瀬戸内海は遂に帝國の領海たるを公法上承認せらるゝに到れり、卽ち兩岬及び高島の岸より三里を隔てゝ畫きたる圍線は相接觸して内海の口を塞ぐに因るなり。元來歐米にては三里にあらで三哩を領海とせり。

三六三　宮崎縣の海岸……宮崎縣の海岸線は隣りの大分縣と正反對にして全く單調なり全國中かゝる平夷なる海岸線の處、他に無かる可し、僅かに細島と油津ノ小港灣ありて、沿岸航路の船舶を繫ぐに足る、而して西北南の三面は何れも山岳を負ひ交通の便宜しからず、されば氣候溫良、天産物も必ずしも貧弱ならざるに係らず文化開けず商工業は起らず久しく別世界の感ありしなり、近時漸く鹿兒島線吉松より分岐せる支線は縣廳所在地たる宮崎町に接續せんとす、而して沿岸の平地には道路夙に開修し馬車の往來自由なり。

三六四　霧島山……本邦屈指の活火山たる霧島山は日向、大隅に跨れる一大火山群にして廣大なる地積を占む、大小幾多の火口の跡は或は半ば崩れ、或は圓く存して水を湛ゆるあり群山中の主峰は東霧島、西霧島の二つとす、西霧島は一に韓國嶽（からくに）とも稱し、標高五千五百尺、中腹の火口は大浪ノ池となり、滿山綠樹鬱蒼として山麓には溫泉の湧出さへあり之れに反して東霧島は高距に於て前者に讓れども尙火氣を帶びて一滴の水分なく滿山赤裸々として寸青を見ず、頂點は尖りて高千穗峰となり中腹に御鉢と稱する大火口を開き時々噴烟して降灰遠近の野に飛び滿目凄然たり、高千穗の頂には天逆鉾といへる靑銅の棒あり長さ

六尺熔岩の中に直立せり、重さ十貫餘、強力の者之れを拔くを得、西霧島の麓なる溫泉は大小數個あり、榮ノ尾、硫黃谷、明礬谷の三者は各浴舍を設け逗留に便なり、東霧島の南方裾野に霧島神宮あり天孫瓊々杵尊を祀る、大隅の國分より五里とす、昔は神宮參拜者が山に入りて溫泉に浴せしが今は鐵道牧園驛より下り捷路四里にして直接溫泉に達するを得。

三六五　都城……都城は其名の榮えたるに似ず一の盆地都邑なり恰も人吉に異らず從來は他國より交通不便にして仙境の感ありしが今は漸く鐵道の連絡を見るに到りたり。

鹿兒島縣

三六六　鹿兒島……鹿兒島市は鹿兒島灣の內に在り三面山岳を繞らし昔は唯、海路に由るの外、交通なかりしかば島津公の領藩として自ら別天地の感ありき、王政復古、中央集權、郡縣の制、定まりたる後と雖ども言語風俗習慣、他とは異なり、住民の氣風自ら勇武にして一敵國の如く思はれ、西鄕隆盛之れに據りて兵を擧げ官軍に抗せしことさへあり今は鐵道の開通と共に商工業も疏通し、市況繁盛に赴き、人口は熊本を凌駕するに至り從

つて古來特殊の氣風漸く衰退せんとす、港として鹿兒島は風波を避け琉球並に南海諸島に渡るの要津なり、教育としては第七高等學校の外に高等農林學校あり其他士氣を皷吹するため會文舍などの塾舍あり。

三六七　城山……西鄕隆盛終焉の地として聞えたる城山は、鹿兒島市の西端に連なる丘陵にして岩崎谷は其裏に當る、滿山樹木蓊鬱晝尙ほ暗がりしが今は切り開きて公園となれり、脚下に市街を隔てゝ前眼に櫻島を仰ぎ眺望頗る佳なり。

三六八　櫻島……鹿兒島灣內に橫れる圓形の島なり、全島これ一の火山體にして島といふよりも山が灣內に座せるなり、山容富士の如く整然として裾を曳き、山頂に二個の消火口あり、高頂を御嶽といふ高さ三千五百尺、其昔活動せしを久しく閉慰し火口內に微かに濛氣を洩らし山麓に溫泉を湧出する位なりしが大正三年一月俄然爆發して濃烟天を掩ひ降灰四近をを埋め山腹には二三の新火口を開きて熔出を押出したり、熔岩は直ちに海に達して水烟を揚げ全島は殆んど降灰のため荒廢に歸し、大隅との間なる黑神の海峽も熔岩と浮石のため閉塞せられたり、嘗て天明年間にも破裂を催して盛に赫灼たる熔岩を流し對岸なる

鹿兒島住民を戦慄せしめたることあり其時の熔岩は今尚ほ岬角島礁をなして海中に殘れり櫻島は霧島火山帶に屬し北、霧島山より南、開聞嶽の間に夾まりて連絡を示せり。

三六九　櫻島大根……名にし負ふ櫻島大根は一抱へもある大なる根を有し三四月の交市場に出だす、主として櫻島の畑地に栽培せらる、小兒一個の大根を提げては長く歩むこと能はず、通常の調理法を以て食用に供す其種子を他所に移すも、かくは旺かに生育せず。

三七〇　鹿兒島の熱帶植物……日向の南端並に鹿兒島縣の南部は已でに亞熱帶に近く、加ふに暖かなる海風常に泛うて冬月霜雪を見ず且つ暖流のために漂ひ來る熱帶植物の種苗は往々海濱島礁に到著して發芽し、土着の植物となれり、日向の海岸なる青島並に大隅東岸志布志灣内の檳榔島は其の例にして盛に蒲葵の自生せるを見る、又櫻島並に半島の南端には榕樹の類育ちて枝間より氣根の垂るるを目擊す可し、林學者は此地方を榕樹帶に入れ、中國近畿四國地方の黑松帶より區別せり、其他の植物分布亦之れに準ず。

三七一　山ヶ野金山……山ヶ野は我邦屈指の金山なり、薩摩大隅の北部にあり古より島津公の藩領とす今は鑛業館なるものを設けて事業を監督せり其發見は二百七十年の昔に

あり大小の鑛脈四十餘條を算し其幅一尺より一丈二尺に及ぶ一ヶ年の製品、金百三十九貫、銀二百三十四貫、價額七十三萬圓に上る、内地に於ける主要金銀產地の一に居る、芹ヶ野、大口、牛尾など恐く同一の金脈に屬するものなる可し產する所の金銀混合物は青金と稱し大阪造幣局に送りて之れを分離精煉せり。

三七二　錫……錫は薩摩半島の中部なる谿山に產す同地は本邦唯一の錫產地といふ可し採て以て、神酒德利、皿、鉢等を作る、產額少くして到底需要を充たす能はざれば年々印度地方より多額の輸入を仰げり。

三七三　種子島……薩摩半島を離れたる沖合にある島にして其昔、葡萄牙人來航して銃銃を用ゐ禽獸を獵したり、邦人が銃を見たるはこれが最初なれば當時、銃を呼んで「種子島」といへり。

三七四　屋久島の杉……屋久島は種子島の西南にある一島にして全島高峻なる山岳聳え森林鬱蒼として杉の樹殊に多し、中腹以上に巨大なる老杉あり採て良材を製す之れを屋久杉と稱し市場に出だす。

三七五　薩摩燒……著名なる陶器にして鹿兒島市外に窯場あり、慶長十九年島津義弘公の命に依り韓人朴氏の創めて製せしものにして其質乳白色に細かぎ疵を現はし頗る雅致あり昔は無地なりしが近世は金泥紅藍を交へて紋樣を描くに到れり主として茶器を製す。

沖　繩　縣

三七六　琉球……琉球は其位置、支那大陸と日本群島の間にあるを以て自然兩國間の紛爭の燒點となり甲の勢强ければ之れに隷屬し乙の勢强くなれば乙に追從す、大古にありては推古帝の御代より已でに交渉始まれり降りて萬治元年源爲朝、此地を征し文治三年其子琉球王となり同年島津忠久をして管理せしむ、爾來內地よりの干渉遠ざかるに從ひ、漸く支那と親み、日本との關係は有名無實となれり、一面西洋强國に向ては獨立國と稱し條約を締結したり、明治の世に入りて再び交渉始まり、同六年琉球王を藩主となし尋で內地の府縣と同格となし、十二年には沖繩縣を置かれ、王は華族に列せられて內地に移されたり列國も亦琉球の併合には甚しき異議なく遂に承認したり。

三七七　飯匙倩……飯匙倩（はぶ）は有名なる毒蛇にして長さ五尺に及び琉球固有の產なり、腹面の鱗の色によりて金「ハブ」銀「ハブ」の別あり、林間草叢の間に棲み往々人を咬んで毒殺す、年々之れがために斃るゝもの決して尠しとせず、されども土人は迷信の餘り、毒蛇に咬まるゝは前世に犯したる罪惡の報なりと信じ敢て醫治せんと欲せず、寧ろ人に語るを恥辱なりと思ひ隱蔽せるを常とす、近時縣廳にては懸賞を以て「ハブ」を捕へしめ、又中毒を治するため血淸療法發明せられ効績顯著なり。

三七八　砂糖……鹿兒島の南端より南は已でに亞熱帶に入り甘蔗の栽培に適せり、琉球も亦盛んに甘蔗を畑に植付け、莖を刈りて搾り、煮詰めて黑砂糖を製す、臺灣領有の前は內國の砂糖主產地たりき、然れども、未だ工業組織發達せざれば石臼を牛に牽かせて蔗莖を臼の間に夾みて糖汁を絞れり。

三七九　芭蕉布……芭蕉布は芭蕉の莖の纖維を採りて織りたる粗き織物なり、多くは淡黃色無地にして帷子（かたびら）の如く膚に着かず島民は之れを衣服となし內地にては襖、屏風或は書物の表紙を貼るに用ひらる。

三八〇　杪欏……琉球には熱帶植物の多きこと謂ふ迄でも無し、羊齒類の如きも大木をなし高さ一二丈に及び葉は五六尺ありて羽翼の如し、莖幹を切りて園藝材料若くは花挿しに用ゆ、此類に「丸八」といふあり葉柄の脫痕に圓に八の字形の紋樣あり「杪欏（ヘゴ）」と同樣に用ゐらる。

三八一　琉球塗……濃赤色の漆器にして漆の塗り方厚く堅牢なるを誇る、往々、綠漆を交へ又美しき貝殼を彫りて之に嵌め紋樣を出せり。

◎北海道及ビ樺太

北　海　道

三八二　地勢……北海道は本土と千島列島とに分つことを得、千島列島は凡て火山若くは其噴出物より成る島にして卽ち火山島なり而して之れを連結して引ける線は卽ち千島火山帶（又は千島火山脈）と稱し本土に入りても其線上に火山の座せるを見る、本土は南北に

縱走せる水成岩の山骨と東西に交叉せる千島火山帶並に本州の背梁をなせる中央火山帶が之れに入り込み、此等の山骨と其の間隙を塡める新しき土質にて成れり、縱貫せる山脈は北方宗谷（そや）の岬より南方襟裳（えりも）岬に達するものにして、地殼の褶曲より成ること本州の赤石山系四國、九州山系などと同樣なり。

三八三　氣候……北海道と謂へば年中氣候寒冷なるが如く覺ゆれども其實然らず、本土の中央なる上川地方の如きは盛夏には百度近くに達して九州熊本平野に劣らず却て關東、奧羽の平野より暑さもあり、然れども、これは僅かの日數、僅かの時間にして秋より冬を經て來春に到る月日は極めて長く、嚴寒の極度には華氏零下二十五度（攝氏〇下三二度）に降ること珍しからず故に年平均溫度は著しく低くして寒暑の差は甚しきものとす就中本土の中央なる上川十勝の原野などは所謂大陸氣候にして寒暑の差殊に酷しき所なり之れに反して南端の襟裳岬の如きは位置海岸にあり且つ寒流の洗ふ所なれば年中の平均溫度低きが上に寒暑の差、意外に少く、嚴寒と雖とも華氏八度位（攝氏〇下一三度半）にして烈しき寒威にあらず而して盛夏は漸く七十五度（攝氏二四度）を超えず、樺太、朝鮮を懸けてこれ程、

冷しき所は他に無し、一般に冬の長き所は積雪五、六月甚しきは七月上旬まで殘り九月下旬已でに初雪を降らす故に春秋の溫和なる季節は極めて短し。

三八四　冷帶の動植物……北海道の如き冬の長き地方にては植物の蕃殖に困難なりと想ふなれど、實際は然らずして草木の繁茂頗る旺盛なり山野は巨大なる樹木を以て掩はれ未だ斧鉞を加へざる所にては蓊鬱として天日を洩らざる位なり、此等の樹木は落葉濶葉樹に非ざれば必ず針葉樹松柏の類なり、山茶、櫧（かし）、椎（しひ）の如き濶葉常綠樹は一切自生せず而して樹陰並に濕氣多き沮洳の地には雜草非常に蔓り、概して葉形の大なるもの多く「蕗（ふき）」、羊齒（だ）、艾（よもぎ）、「土當歸（うと）」の如き類最も榮え、「蕗」の葉は一柄を以て簑と笠の代用なすを得、此等の草本は悉く多年性宿根草にして六月下旬邊り殘雪消ゆると共に一齊に發芽し忽ちにして花を咲き葉莖は數尺に伸び、其生長の速なること雨後の筍の如し、炎暑の候過ぎれば木となく草となく均く紅葉を始め初雪と共に木ば悉く裸となり草は地に伏して滿目淒然、やがて見渡す限りの銀世界となるなり動植物も食物の缺乏と共に或は穴居して冬眠し或は保護色によりて純白となり或は暖地に移住すること彼の雁鳧の如し、かくて半年は全く死眠の

世界に化す、獨り人類社會は鋭氣を皷して活動し、漁業伐木などは却て此の季節に盛んに營まる。

三八五　北海道と內地……北海道と內地は僅か津輕海峽を隔つに過ぎざれども、動植物は著しく異なるなり單に氣候にのみ依らずして全く緣の絕てるが如き感あらしむ猿の如き黑熊の如き靑森までにて止り、北海道には「ヒグマ」あり松竹杉の如き內地の普通植物は北海道に入れば跡を絕つなり、嘗て札幌農學校の雇敎師ブラキストン氏之れを調査して生物分布上重要なる境界線と見做したれば世人之れをブラキストン線といふ蓋し日本群島が元と一連の陸地たりしを地變力のため分離するに當り津輕海峽は最も早く切斷されし海峽にして動植物は當時より交通を中斷せられ、かくは著しき境界を示すものなりといへり。

三八六　北海道の開拓……北海道は封建時代より已でに開拓の緖に就きしが明治維新以降著々步武を進め移民を奬勵し道路を通じ土地を無料にて下附したり、開拓の模範として札幌に農學校を設けられ主として米國より敎師を聘雇したれば自ら米國風に範を取れり、近年に到り鐵道の布敷を急ぎ要地々々を連絡するに至りたり。

三八七　産業……人口の稀薄なると氣候の温和ならざるため工業は未だ一向に發達せず現時主なる産業は漁業、林業、特殊の農業、石炭の採掘、其他之れに伴ふ副産物を以てせり、土地の廣大なるに比し人口の稀薄なるは全く米國加奈太の風にして農林の經營も亦彼に似て凡て機械を用ゐ規模宏大なり。

三八八　移民農業……内地より家族を擧げて移民せんと欲する者には北海道廳に於て許可し、適當なる土地を選定し無料にて借付けるなり、一戸分として五町歩を單位とし之れを四年間に開墾し終へ、植物の何たるを擇ばず農作物を耕作するに到らば成墾檢査を經て永代自己の所有に歸するなり、かゝる未開地は草木亂生し人跡未だ踏まざる所多し、立樹を伐り雜草を焚き拂ひて直ちに菜種若くは豌豆を蒔き付ければ生育速かにして忽ちにして耕地の姿をなす移民開墾者は概して菜種と豆を蒔くを以て北海道を通じて菜種、豆の收穫夥しき理なり。

三八九　農業……北海道は冬季長く夏季短き故、成熟の遲き農作物は不適當なり、大麥、小麥、燕麥、喬麥、大豆、小豆、豌豆、菜種、馬鈴薯、亞麻など良く成熟す就中、亞麻は

内地には殆んど作らざるも此地方には頗る適し其莖を刈りて纖維を採り「リンネン」を織る、馬鈴薯は掘て澱粉を製造し、燕麥は乾して壓挿し馬糧として販賣せらる、米は昔は到底耕作に適せざるものと考へしが近年は石狩原野に稻田開け五十餘萬石の收穫あり、野菜、林檎の如きもの亦良く育つ。

三九〇　林業……林業は樹木を切り出すに忙はしくして殖林などに著手せず、伐採したる樹木は建築用材として内地に出すの外、鐵道枕木を取り粉碎して製紙の原料なる「パルプ」を製し、又、燐寸の軸、經木眞田の原料ともなる、樹木の最も多きは椴松、蝦夷松にして落葉松、栂、水松、「ミヅナラ」など之れに亞ぐ。

三九一　水産……北海道は世界的の漁場の一なりといふ海には鰊、鱈、昆布の産夥しく河には鮭、鱒を産す、昆布は年額百二十萬圓に達し乾して内地に輸送し樣々の食品となす鰊は二百萬圓に近く主として身欽鰊となし食料と肥料に用ゆ、鱈は鹽漬、棒鱈となし鮭、鱒は鹽引として合併二百萬圓を算す「カズノコ」は鰊の鰓にして鰊を裂きて砂上に乾し身欽鰊を作るとき、鰓を採り出し乾して貯ふるなり、千島方面には海獸多く遊泳し膃肭獸、海驢、

海豹を主なるものとす捕獲して其毛皮を剝ぎ市場に出だす、昆布並に乾魚は支那に盛んに輸出せらる。

三九二　鑛產……北海道鑛產の主なるものは石炭、硫黃と砂金なり石炭は一大炭田をなして夕張炭礦、空知炭礦、石狩炭礦、幌内炭礦、幾春別炭礦等あり採炭の總量一ヶ年百五十萬噸、內地總額の十分の一を占む、北海道の石炭は可燃瓦斯を含むこと多きため往々爆發することあり、硫黃は火山地方の產物にして古武井、岩雄登等の硫黃山著名なり一ヶ年產額五千萬斤、價額七十三萬圓に上る砂金は北見の枝幸、石狩の石狩川に產し嘗ては枝幸の採拾盛なりしため一時世上を騷がせしか今は全く衰微せり。

三九三　牧馬……北海道は馬の牧畜に適し到る所に放牧せり、最も著名なるは新冠にして御料種馬場なり道內、鐵道の未だ開けざる所には交通のため馬を養ひ驛遞より驛遞に旅客荷物を運搬せしむ。

三九四　行政區劃……北海道は一道として殆んど內地府縣同樣の取扱を受け道長官職權は殆んど府縣の知事の如し、道內を十一ヶ國に分つは明治維新の際內地の舊慣に倣ひたるものにして郡縣の如き行政上の意味を含まず、道內を十四區劃に分ち之れに支廳を置く、人口の多き市街は區制を布き內地の市制と略同一なり人口の少き所は町村とす。

三九五　交通系……北海道本土には一條の大幹線あり南端函館より起り俱知安、小樽、札幌、岩見驛を經て旭川に到り東南に折れ富良野、落合、新得、帶廣、池田、白糠を經て釧路に達す全長四百二十四哩とす、旭川より天鹽線小頓別まで九十哩、岩見驛より追分を經て室蘭まで八十五哩、池田より野付牛を經て北見網走まで九十哩、以上を重なる三支線とす、其他に留崩線、夕張線の短き支線を派出せり。

三九六　アイヌ……北海道といへば直ちに「アイヌ」人を聯想す可し「アイヌ」人は身體偉大にして、皮肌の色白く毛深し、殊に男子は胸腹背にさへ毛を生ず、頭は男女共理髮せず結婚したる婦人は口の兩側に藍色の鯨墨をなす、衣服は粗き織物にて胖天の如く仕立て特殊の紋樣を織り込む、簡單なる農業又は漁業を營み、粗惡なる小屋に住み木材を刳りて獨木舟を造る、彼等は金屬を煉ることを知らず、內地人より刄物其他鐵器を得、刄物は之れを研ぎ柄と鞘を嵌め腰に佩び、之れを用ゐて種々の手工をなす、彫刻は極めて巧みにして

必ず固有の紋樣を刻みて飾を施す、彼等は文字を書せず、言語は内地語と全く異なり、北海道中各所に散在すれども日高、膽振の邊に純粹の「アイヌ」部落あり都會近くに住む者は内地人と交際し、内地語を辯じ、職業に雇はれ、或は内地人の風俗に化し、内地人と結婚せる者もあり、昔は内地にも一般に住居したりしが日本人の播布と共に漸々退きたり、今は全土を擧げて一萬七千人位といふ、「アイヌ」人は北海道本土の外に千島、樺太にも住し稍風俗習慣を異にせり、千島「アイヌ」は少數にして今は色丹島に集合せしめたり、「アイヌ」人は固より内地人卽ち大和民族とは異なり、さりとて亞細亞大陸の諸民族とも類似せず却て西洋の白人に彷彿たるところありて學者の疑問となれり。

三九七　函館……函館は北海道の關門といふ可く内地奥州線、青森港より日々定期の連絡船ありて半日或は一夜にて渡るを得、其れより本土各所と鐵道連絡し又沿岸各港に向つて定期不定期各種の便船を發す、函館は北海道交通の一要津にして同時に開港場たり。

三九八　五稜廓……函館を距る西方一里餘にある舊城廓にして維新の當時、幕府の殘黨之れに據りて官軍に抗せしところなり今は製氷場として聞え製氷は盛んに内地に販賣せら

れ、

三九九　小樽……本土西海岸の良港にして人口九萬、近來長足の發展をなし一般開港場として且つ樺太に渡るの發航點たれば海陸交通の一大要衝にして商工業の中心地とす、されば近來其繁榮札幌、函館を凌ぐに到りたり。

四〇〇　石狩川……北海道第一の大川にして其長九十二里、朝鮮を除きては信濃川に次ぎ本邦第二の長流なり其流域は廣大なる石狩原野にして下流は羊腸迂曲して水路の變遷したる跡には曲玉形の湖沼を存せり。

四〇一　札幌……札幌は北海道廳の所在地にして其昔開拓使の置かれたりし所なり、元と道内最大の都會なりしが今は繁榮は小樽、旭川に奪はれ稍寂寞の感あり人口七萬餘とす東北帝國大學あり元と札幌農學校と稱せしなり市街は井然として碁盤の面の如く中央に防火線の目的を以て廣き大通を通じ其れより東西南北各一條より九條に到る、恰も京都、奈良の市街の如し蓋し米國ニューヨークなどを模せしなり北海道の新市街道は凡てかくの如し、郊外に製麻會社、麥酒會社等の大工場あり近郊山中に定山渓（じょうざんけい）の溫泉場あり。